木に凭りて

吉田絃二郎著




UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 008 784 856 0

吉田絃二郎著

木に倚りて

才根木ゝ房版



目次

一九五五十一月四日

著者自裝

木に凭りて

吉田絃二郎著

草の花あり

東京を立つて十日。駿河灣の單調な波の音にも飽いた。人を避けて靜かに本を讀むつもりで旅に出たが、旅に出て見ると、いつでもさうであるが、落ちついて本を讀む氣にはなれぬ。何處にゐても人の心を奪ふものはある。靜寂を求めて自然に還ればそこにもまた自然の誘惑がある。

波の荒いせゐか、漁村といふものがあまりないためか、一眸の海に一隻の船すら見出されないことが多い。たまに汽船でも發見すれば、船の影が水平線の下に隱れてしまふまで海を見つめてゐる。海を掩ふ雲に變化あるごとに波の色が或ひは暗く、或ひは紺青に、或ひは淡紫色に、或ひは玻瓈の如く白く變つて行く。そのやうな雲の變り、海の色の移りかはりまでもが私の心を惹く。

或ひはならい或ひははへ或ひはなべし。半時と經たぬ間に風の方向が動く。波の音が移る、波の高さも變る。波の音が靜かになれば不圖裏の松山の四十雀の鳴く音が耳につく。

濱ではもう百舌(もず)が啼きはじめた。芒の穗が白い。瑠璃鳥は海の微風を浴びながら背戸の靑い山で囀つてゐる。

寺の子供たちが濱の地曳に誘ふ。夜釣に誘ふ。人の善い住持が庫裡(くり)の方から德利を抱へて、夜遲くまで話し込みに來る。暗い海を渡る天の川を眺めつゝ語る。

旅は決して讀書をゆるさぬ。旅の自然、旅の微風、夜明けの空、朝の海、午睡、午後の海、小鳥の聲、夕燒、雲の色、波の音、星のさゝやき、すべてが私の魂をひたすらに惹きつけてしまふ。

旅は怠惰な私の心を一層怠け者にしてしまふ。私は旅の怠惰を愛する。

七日住んだばかりでも幾人かの顏馴染の人はできる。背戸の畑で草を刈つてゐた女、濱で夜釣をしてゐた男、濱の駄菓子屋の老媼。

乘合自動車から振りかへる村の苺畑の石垣、寺の屋根、木槿(むくげ)の花。濱の松の並樹には四十雀が鳴いてゐた。その西から二本目の松の枝では、この冬一人の旅の若い男が首を縊つて死んでゐたといふ話を思ひ出した。

靜岡に着いて、午後の汽車まではまだ三時間近くの暇があつたので、淺間さまに出かけ

ることにした。古城の濠には白い蓮が咲いてゐた。賤機山の嶺まで登つて見たが雲が深くて富士は見えなかつた。木の下に若い一人の男が下駄を脱ぎ、木に凭りかゝつたまゝ立ちつくしてゐた。着物は破れ、手足はひどく垢づいてゐた。恐らく氣が狂つたのであらう。その眼は寂しかつた。笑ふでもなく、もの言ふでもなく、何見るでもなく、恐らく考ふることもしないであらう。

私の胸には二三年前駿河の海岸で逢つた一人の青年のことが思ひ泛かべられた。かれは熱心な哲學研究者であつた。かれの病身が反動的にかれの思想をさういふ方面に向けたのであつたか、かれは恐ろしく理智的であつた。冷たい理智の上にのみすべての問題を片付けようとしてゐた。大抵の病人は感情的になり易い筈であるが、かれは自分の冷たい運命を靜かに理智的に批判することを忘れなかつた。しかしどこまでもかれは病人であつた。かれは冷靜な理智によつて宿命を信ずるやうになつた。かれはよく宿命といふ言葉を使つてゐた。冷たい理智の上に築き上げられた宿命觀は十九世紀のロシヤのインテリゲンツイヤの哲學であつた。ツルゲネーフ然り、チエホフ然りであつた。

無智にして宿命の中に死ぬるものはむしろ幸福であるかも知れぬ。しかし一度考ふるこ

とを教へられた近代人にとつては、それは永劫にゆるされざる禁斷の地である。考ふることを教へられたる近代人は、考ふることなしには生きてをれぬ。しかも暗い鐵の鎖に縛められたる人間の宿命のみが、かれ等の思惟の對象となつて現はれて來る。考ふれど考ふれど、かれ等の思惟の世界に映つて來るものは人間の宿命のみである。刹那々々に斷たれゆく人間の生命である。刹那々々に蝕まれゆく人間の手であり、足であり、心臟である。

考ふるといふことは自らその醜き手を斷ち、自らその腸を斷ち、自ら考ふるそれ自身の腦髓を抉り、摑み、捨てることとである。

思惟する人間にとつては、たゞ思惟することのみが生活であつて、すべてはたゞ宿命に支配せられてゐる。人間は思惟することのみは自由である。そしてたゞそれだけの自由が與へられてゐる。いかに思惟しても一羽の雀をも地に落すことはゆるされてゐない。

思惟する以上は、自分が自分であることを意識する以上は、自分で自分の世界を作りたい。しかも人間には考ふることの他には何の力をも賦へられてはゐない。

「ともかくもあなたまかせの年の暮」

俳人一茶にしてもこれほどの覺りを切り拓くまでには、四十餘年の苦しい生活の底をく

ぐつて來なければならなかつた。

まつしぐらに考ふることのみに生きてゆく唯一つの興味を感じてゐる若い人々にとつて、なか／＼あなたまかせといふ諦めの心は生まれて來ない。また生まれて來ないのがいい。若い人の生(なま)さとりほど見苦しいものはない。思惟の根氣のつゞくかぎりは思惟した方がいゝ。苦しむだけは苦しんだ方がいゝ。悟りといふもつまりは諦められぬ諦めではないか。

悟りとは最深所の寂寞感ではないか。禪の悟りといふも、悟り無き悟りの寂寞ではないか。柳は綠花は紅といふも、限りある人間の思惟の力の破産の刹那の諦められぬ諦めではないか。

思惟する人は諦められぬ諦めの世界に入るか、でなければ木に凭りかゝつてゐる狂人になるか、その何れかであらう。

靜岡からは程遠からぬ用宗(もちむね)の濱邊に病を養ひつゝある靑年の俤がともすれば、眼前の不幸な若者のそれと一緒になつて映つて來るのであつた。

安倍川(あべかは)の白い磧(かはら)が靑い田をめぐり、宇津の谷の嶺も川を隔てゝ見えた。

安倍川をわたつて宇津の谷峠へかゝるところに丸子の宿がある。西行、芭蕉が山を越えたところもやはり同じ山であり、同じ川が流れてゐたであらう。芭蕉はどの山を見つゝ川を越えたであらうか。西行はどの山を眺めつゝ峠を越したであらうか。

ものいはぬ男ありけり今朝の秋

×

靜岡を立つた汽車は大井川島田驛を通る。川の少し手前、昔の東海道の松並木の盡くるあたりに島田の町がある。そこに友人の八木氏がゐる。二日前に久能まで訪ねて來て生憎の不在に逢はず歸つて行つた八木氏のことを氣の毒に思ひながら、八木氏の家らしき見當を眺めてゐる刹那、焦くやうな眞晝の稻田の中に八木氏と奥さんや妹さんや赤ちやんが立ちつくして汽車を眺めて、私たちを探してゐるのを發見した。刹那に汽車は鐵橋を渡つてしまつた。

旅にをれば人の心ほどうれしいものはない。

人と人との美しい心が動いてゐる間は生きてゐたい。

名古屋にも私は一人の友人を持つてゐる。かれも心の美しい人間である。心の弱い人間

である。今日名古屋のステーションを通つたことを後で知らせてやつたら、かれはどんなにか私を怨むであらう。かれと、かれの奥さんや小ひさな一人の子の上に幸福あれ。

去年かれと私の妻と三人で遊んだ犬山がかすかに青い稲田の涯に見えた。木曾川の水にはもう秋の色が動いてゐた。

關ケ原、醒ケ井あたりの夕暮れの汽車に乘つた人は誰も經驗することであらう。秋近い旅であれば、山に沿うた杉の並木の雨のやうな蜩の聲を。東では箱根、西では伊吹山の下を通るころ、いつも秋近くなれば蜩の時雨のやうな聲を聽く。

琵琶湖が見ゆるあたりから暮色が迫つて來た。義仲寺を見出さうとつとめたが、暮靄すでに湖沿ひの町をも、野良をも埋めてしまつて、何も見ることができなかつた。

芭蕉、丈草、木節、湖畔に住んでゐた俳人たちのことが思ひ出された。

轗軻不遇の俳人鬼貫が幻住庵を訪れてすご〳〵と歸つて行つたであらう湖沿ひの道には、母と子らしい二人の女が團扇を持つて、水のほとりに立つてゐた。

近江路は暮れたばかりぞ初嵐

×

岡山から宇野線の汽車に乘りかへたのは焦くやうな日盛りであつた。

どこも近年にない旱魃なので、このあたりではしきりに水車を踏んでゐる。稻が赤く燒けてしまつたところもある。地は裂けてゐるところもある。いかにも明るい感じを抱かせる中國特有な砂山がさらに耐へられぬほどの蒸し暑さを誘うて來る。遠い干潟がつゞく。

宇野高松間の瀨戸内海の航海は僅かに一時間半であるが、船に弱い私にも、もつと航海が長かつたらと思はれるほど愉快な航路である。四國の山と中國の山を舷の左右に眺めながら船は屋島の方向へ滑るがごとく走る。どこまでもどこまでも海藻が流るゝ。

屋島を左に高松城の白い樓を見出しえた刹那には、廣重の時代を思ひ出さずにはをれなかつた。

高松から四國の海に沿うて汽車は走る。到る處長汀曲浦の眺めである。鬱蒼たる山を背にし、幾つかの豐かな村をつゝんだ平野を展げて、白砂の濱が續く。濱には老いたる芒が微風を浴びてゐる。美しい、正しく劃られた白壁の家が靑田の間を點綴してゐる。さすがに寺が多い。家の群を見出すところには必ずゆるやかな屋根の勾配を見せた寺がある。塔がある。稻田の辻、松山の嶺に、村の入口に或ひは白い木槿の咲く濱沿ひの道に、古びた

る燈籠がある。さすがに遍路の國である。

稻田の中にはまだ農夫たちが桔槹で水を汲んでは稻に水をやつてゐる。恐らく一家總出であらう。十五六歳の男の子が一人で桔槹の桶を抱へては水を汲み出してゐる。桔槹の重しの石の方へはその父らしい男、母らしい女、弟妹たちが一本の綱に縋つて釣瓶の水を引き揚げてゐる。稻田のつゞくかぎり桔槹の水が汲まれてゐる。中には働き盛りの子を失つた人たちでもあらうか、老爺と老婆と二人で大儀さうに桔槹の水を汲んでゐるのもある。米を作つてゐる人たちの仕事を見れば頭が下る。

幾里も幾里も鹽田がつゞく。そこでも旅人は、汐汲む人々がいかに蒸すやうな日の中に働きつゝあるかを見せつけられる。黑い坦々たる鹽田に汐を汲んではぱつと撒いてゐる人人の赤銅色の背を落日が照りつけてゐる。撒かれたる汐に小ひさな虹が走る。

ゆくりなくも私の心には自殺をした田中のことが泛かんで來た。田中の父が四國の或る郡の郡長を勤めてゐたのは、まだ田中が東京へ來て士官學校へもはいれずぶら〳〵してゐたころであつた。田中が急に學校の成績が惡くなつたのには原因があつた。田中ひとりが抱いてゐた悲しみのためであつた。田中は自分の悲しみのために父を喜ばせることもでき

ないで東京を放浪してゐる間に父を失つたのであつた。田中は自殺をする日までその時の苦しい心の經驗を忘れなかつた。かれは電報を受け取ると共に東京を立つた。神戸で父の好きな葡萄を籠に入れて船に乘つた。船が四國の濱に着いた時かれは葡萄の籠を抱へて白い砂の上を走つた。父はすでに白玉樓中の人となつてゐた。かれは幾日か思ひつゝ惱みつつ白い砂濱に佇立した。私は今その濱の名をすつかり忘れてしまつた。しかし恐らく私の汽車が走つてゐる伊豫の海岸であつたやうに思ふ。

　かつて伊豫の美しい一つの濱は父を思ふかれにとつてやる瀬ない思ひ出の場所であつたであらう。伊豫の濱を走りながら私はかれを思ふ。雲雀が鳴き、瓜の花が咲いてゐた稻毛の海岸を私は一人で歩いたことがあつた。私はあの忘れがたい日を思ふ。

　讃岐から伊豫に入つて、山はます／＼高く、美しくなつて來る。雲を呼ぶ奇峭長峽の懷につゝまれて豊かな町も村も日暮れてゆく。

　一茶が四國に友を訪ねて來たがすでに友は十五年前に死んでゐたといふことや、さらに昔西行が四國を旅したことなどを思ふ。丸龜城の背景を爲して、平原の中にそゝり立つ讃岐富士は西行も見、一茶も眺めた山である。

四國の山には殊に美しい夕燒けの雲が湧く。

×

新居濱に下りたのは夜の九時ちかくであつた。こゝでも私は思ひがけない人に出迎へられた。十年前である。築地で語學などを教へてゐたころに通つて來た少年が、今では伊豫の故鄕に歸つて來て小學校の先生をしてゐるのであつた。よく脚氣で苦しんでゐたので私は歸國をすゝめたことがあつたが、一里半の山の中からわざ〳〵夜中に會ひに來てくれたのであつた。

濱では祭りの夜であつた。田の中の森につゝまれた一宮といふ、村にしては大き過ぎるほどの宮である。車から下りて、人ごみのなかを拔けて宮の前にぬかづく。夏の禊であらう、徑八九尺もあらうと思はれるほどの新らしい藁の輪が宮の前にしつらへてある。人々は藁の輪をくぐつては拜殿の前にぬかづく。

驛からは三十町ばかり、暗い漁村の間を縫うて車を走らす。入江に望んで旗亭がある。何といふ島やら、陸やら、たゞ燭のみが闇の中に水を隔てゝさゝやく。

水に臨んでゐるせゐか、夕凪ぎも噂に聽いてゐたよりは涼しい。思つてゐたよりは風呂

も美しい。水もいゝ。

入江には潮が滿ちて來た。提灯を點しつらねた船が川上から島の方へ漕ぎつれてゆく。三味線を彈き、鼓を打つ妓たちが、客と共に唄ふ。最初はかなり騷々しくもあり、不愉快でもある。

しかし夜が更け、星が輝き、波の音までも靜まるころ、水を隔てゝ遠い舷の歌を聽くのは何となく水郷の秋の夜の哀愁をそゝられる。

金で快樂を買ふ男たちはともかくとして、この寂しい島の濱までも流れて來て、男たちのために媚を賣らなければならぬ人たちのことを考へると、波を隔てゝ聽く唄に切々たる哀韻が籠る。

夜が明け切れぬうちに男たちは窓の直ぐ下にもやはれた小舟から沖の方へ歸つてゆく。男たちはたいてい内海通ひの汽船の船乘りである。

沖にはかれ等を待つ親船が島影に煙を吐いてゐる。

白い服の男、青い服の男たちは後朝(きぬぎぬ)の別れを惜しむほどの餘裕も持つてゐない。すべての目まぐるしい近代生活は、大まかな海上生活者の魂までも冷灰化してしまつたのであら

う。濱に立つて客を送る女の姿も見られぬ。

たゞ、さすがに初秋らしい風のみが退き潮の上を吹いて沖の島へ白い浪を送つてゐる。

夜釣りの舟が入江に歸つて、帆を卸せば風はぱつたり凪いでしまふ。窓の下の入江の潮はひた〳〵に退いてしまふ。

一疋の痩牛が尻をひつぱたかれながら川の岸に來る。後ろからは色の黑い男と一匹の大きな犬がついて來る。

男は無理に牛を川の中へ引き入れようとする。牛は嫌つてなか〳〵川の中へ入らぬ。男と犬は舟に乘る。男は綱を曳き青竹を揮つて牛を向う岸に牽き上げようとする。犬は吠ゆる。牛はそれでもなか〳〵川を渡らうとはしない。

最後に牛は引き摺られながら川を泳ぐ。ゆるやかな勾配の砂原を歩いて黑い柵に取りかこまれた一構への屠牛場の中へ牽かれてゆく。ポプラの下を曳かれてゆく牛の姿が柵越しにしばらくは見える。牛はなほ鳴いてゐる。

一二時間の後には、白い手術服のやうなものを着た獸醫や、大きな籠を自轉車にくゝりつけた男たちが八人も九人も建物の中から笑ひさゞめきながら出て來る。

アーサー・シモンズの詩を思ひ出す。

「わが聽く時に
　死ぬばかり恐ろしく泣く牛の聲を。
荒くれし男らは、むごき犬をつれつゝ
さながらに死の苛責の家へ牛を逐ふ時
いかでわれ木の下に坐り
うれしきよしなき本に讀み耽りえんや。」

こゝでも人々はいつも逞ましい犬を連れて渡場を渡つてゆく。殺されにゆく牛を見るのはほんたうに不愉快である。トルストイでなくとも屠牛場に曳かれてゆく牛を見ると耐らない氣持ちになる。

しかし魚が魚を食ひ獸が獸を食ひ合つてゐる自然を見ると、互に殺し合ふことが生けるものの悲しい宿命であるやうに思はれる。殺すものも、殺されるものも共に悲しい宿命である。一人の人間が生きてゆくために幾人かの人間が殺されつゝある。不知不識の間に私

たちは隣人を殺しつゝある。世に一人の義人あるなし。それが人間の宿命ではないか。

牛が屠舍へ曳かれて行つた渡場を渡つて屠舍の横を濱に出る。波にさらされた牛の骨が堆く積まれてゐるあたりに可憐な磯の花が咲いてゐる。四國第一の石槌山がかすかに見える。何といふ鳥であらう、鷺に似て黑く、聲は千鳥のやうにあはれである。波の上を磯づたひに飛んでは濱に餌をあさつてゐる。

濱には石風呂といふのがある。アーチ型に石を疊み上げて、柴を焚いた上に、水に濡らした筵を展べて、襤褸(ぼろ)のどてらを着て人々は轉がつてゐる。焦熱地獄である。風呂を出て冷たい水を浴びた後の心持ちは何とも言へぬさうである。白い砂濱を絕えず村の人たちは石風呂の方へ歩いてゆく。

×

日中は近ごろになく風が强かつた。波が立つた。波の上の雲が吹きやられてしまつた結果、空は非常に美しくなつた。紺碧の空がまつたく磨きをかけられた。今まで見えなかつた島が白い波頭の上にかなたにもこなたにも浮き出して來た。中國の山も直ぐ近くに映つて來た。

今まで見えなかつた島の數を算へて見たりした。

日が暮れ、潮が濱に滿ちて來ればまた舷いちめんに酸漿提灯を點した舟が妓たちを乘せて窓の下を通る。恰度今朝、屠牛場に曳かれた牛が、悲しさうに鳴きながら渡つて行つたあたりを行樂の舟は上り下りする。そのたんびに花やかな提灯の燭が岸の屠牛場の硝子窓に燃えるやうに映り、ゆらぐ。

燭を點しつらねた船は鼓を打ち鳴らして沖へ出てしまふ。濱では夕凉みの人たちの影も夜が更けるにつれて、二人に減り一人に減つてしまふ。捨てられたやうに濱にもやはれた舟と舟の間の暗い水の上に、初秋の空が白い星の光りを漂はしてゐる。

入江の闇は靜かである。眠つたやうに。

宿の女が二人、入江の水を見ながら緣臺に凉んでゐる。

一人の女が燈籠を作つて來て入江の水に泛かべた。かなり隔つてゐるので、何で作つたのかどんなものゝ上に泛かべてゐるのかわからないが、燈籠は女の手を離れて入江の暗い水の上を沖へ沖へと流れてゆく。

二人の女はいつまでも流れてゆく燈籠を見つめてゐる。

恐らく女たちはこの島に賣られて來たものであらう。そして夜な夜な荒くれた男たちに媚を賣つてゐるのである。

岸に立つて流れてゆく燈籠を見つめてゐる二人の女の上にも秋の風が吹き初めてゐる。燈籠は沖の白い波に幾度か隱れた。隱れてはまた浮かび出た。

×

恐らく昨夜燈籠を流してゐた女であらう、今日は私の部屋に來て、宿の婢と一緒に私の荷物を車に運んでくれたりした。

「あさましいとは思ふのですが、どうしてもこの境界から拔け出ることはできませぬ。あたしたちの體はすつかり腐つてしまひましたから。こんな家業をしてゐましても、夫もあり子供もあります。一番大きな子は十六になります。東京に奉公に出してあります。ぜひ一度會ひたいと思ひます。一人は里子に出してあります。夫は永年病氣ですし、里子には毎月十圓づゝ送らねばなりませぬし、家の方は四十圓、あたしのお小遣が二十圓、どうしても月に六十圓は稼がねばなりませぬ。無理にもお客をとらねばやつてゆけませぬので。」

話してゐると、都會の浮ついた女たちよりはずつと感じがいゝ。人間らしい。苦勞をし

た女だけにしみ〴〵とした話をする。

「あなたが東京におかへりになつたら、淺草のこれ〳〵の町に行つて、子供がをりますからぜひ、故郷へ歸るやうにと傳へてください。」女は子供の名を書いてくれた。

不運なる女、不運なる母、不運なる子。

×

金刀比羅（ことひら）だけはお參りをして歸らうと思つて多度津から汽車を乘りかへて琴平に下りた。思つたより感じのいゝ町である。殊に山は言ひやうもなく美しい。たゞ長い幾町もの石磴（いしだん）に沿うて寄附の金高を記した無數の碑が並べられてあるのがあたら名山を臺無しにしてしまつた。惜しい事だ。日本人の打算的な醜い半面を露骨にあらはしてゐるのがあの長い碑の行列である。

山から見た讃岐富士の姿は美しかつた。山には蜩が鳴いてゐたが、鳥の聲一つ聽かなかつた。

日が暮れるころ青い田を隔てゝ善通寺の塔を見た。西行もそこいらの草の中を歩いたであらう。牛車を曳く人の姿も繪卷物の中の人たちのやうに古風である。

「出て見れば我のみならず初旅寝」一茶の句が生まれたのもこの附近であつたらう。

一茶は「看飯富山」といふ題で「人はみな今を春邊と飯比古の山のしら雪霞たなびく」と歌つてゐるところから見れば一茶がこのあたりを旅したのは冬から春にかけてゞあつたらう。

「十三日槌口村などいへる所を過ぎて七里となん風早難波茶來を尋ね訪ひ侍りけるに已に十五年後に死にきとかや後住西明寺に宿りを乞ふに不許

前路三百里只彼を力に來つるなればたよるべきよすがもなく野もせ庭もせをたどりて、

朧々小室はれなり迷ひ道」

飯富山といふのは讃岐富士のことであらう。ともかくこのあたりの旅に悲しい絶望を抱かせられたであらう一茶の心持ちが思ひやられる。

今年は十年來にないほどの旱魃である。

日が暮れると共に高い山々で雨乞ひの火が焚かれる。

汽車の窓から暗い天空に焚かれた遠い山の火を見れば、むしろ悲壯な感に打たれる。

×

四國の旅の疲れを一日京都に養うて、翌日法隆寺近くに富本憲吉氏の窯（かまど）を見せてもらふことにした。

東山にはまだ朝の影がほの白く漂うてゐるころ宿を出て、本願寺の前の廣い通りに車を走らせた。

いつ來ても京都は落ちついたところである。街の並木に吹く風すらも懐かしい。

　京都ではアカシヤの木も秋の風

旅に來て秋を迎へるのは嬉しいことである。旅ほど心から秋をありがたくあはれに感じるものはない。一所不住の生活を選んだ芭蕉の心持ちが想像せられる。

宇治の茶畑、桐の畑、柿の畑、そこいらには秋の風がいちめんに吹いてゐた。

木津川の鐵橋では汽車が吹き飛ばされはしないかと思ふほど強い風が吹きつけて來た。

空を見れば黒い雲が亂れ飛んでゆく。

今朝京都を出る時、暴風を警戒すといふ掲示があつたことを思ひ出す。

木津川の土堤の下に小ひさな寺があり、そこに竹藪にかこまれて苔むした輪塔がある。平重衡（たひらのしげひら）の墓である。

今朝も草の中に塚が見える。

奈良までは三里の秋や風の中

重衡の墓を悼みながら奈良に入る。

次の汽車までは一時間しかないので、驛近くの佛を賣る店に立ち寄つて聖德太子の首、童子などを買つて、新聞紙に包む。

汽車の中でも新聞紙をひろげては佛像を並べて樂しむ。芭蕉の「菊の香」の句などを思ひ泛かべつゝ大和の山を見る。こゝでも地は裂け、稻は枯れかゝつてゐる。池といふ池は水門を切つてしまつて、白い池の底には靑い草が生えてゐる。いつ雨が降るとも思へぬ。

法隆寺で下りて丹波市ゆきの輕便を待つ考へであつたが、二時間も待たなければならぬので、俥を雇ふことにした。川といふ川はすつかり干乾びてしまつて、一滴の水もない。十坪ばかりの水溜りが殘つてゐたが、そこでは二人の女が洗濯をしてゐた。傍に五六人の子供たちがしきりに魚を捕へてゐた。

私は大和の家が好きである。白堊の壁、行儀よく仕切られた土の塀、ゴシツク風な急勾配の草屋根、さらに草の屋根を受けたゆるやかな勾配の瓦の簷、いかにも藝術的な線の美

を盡してゐる。變化と均齊、單純さと古典美、いろ〳〵な藝術上の要素が取り容れられてゐる。

柔かい山につゝまれ、山には古い時代の伽藍を持つ大和の平原は最も惠まれた鄕土である。

白い磧に沿うて低い櫟の木立があり、瓢の皮を乾した家がある。一顧の中に法隆寺から奈良、畝傍、飛鳥朝の跡が見わたされる。

大和は愛すべき平和の地である。

俥は村外れの田の中に止められた。そこからは道が狹くなつて俥をやることができないのである。二三町歩の田の眞ん中に一本の低い煙突が立ち、窯が見えた。垣根の外の小ひさな納屋の横には瓢が二つころがつてゐた。

奥さんや二人の子供さんたちは志摩の海岸に行かれた留守だつたので、富本氏のおつ母さんとお妹さんが、母屋の方から御馳走を運んで來られた。

富本氏の釣の師匠株である大工さんも見えた。九州から丹波市へ仕事にやつて來たのだがたうとう大和に居附いてしまつて、怠けては大和川に行つて魚ばかり釣つてゐるといふ

風がはりな男である。どんなに金がなくつても釣さへしてゐれば氣のすむといふ凝り方である。

その大和川も今では一滴の水もないまでに干乾びてしまつてゐる。雲が時々畝傍山の上をかすめて大和平原を生駒の方へ走つてゆくが、一滴の雨をも惠んではくれぬ。

大和の平原をまん丸く取り圍んだ遠い山の中心點が、恰度富本氏の窯のある家になつてゐるやうに思はれる。それほど富本氏の家は廣い平原の、一物も遮るものもない秋の風の中に建てられてゐる。

釣りに夢中になつてゐる旅の大工、赤繪の燒物を窯の前に据ゑて夢中になつてゐる陶工。二人の男が大和の平原の恰度眞ん中に秋の風を浴びてゐる。

世界のどこにも心の美しい人たちが住んでゐる。世界のどこにも尊い自分の生活を生きつゝある人々がある。

私たちは北海道に行つてモリスの理想とした世界を切り拓かうとしてゐる三人のH氏兄弟のことを語り合つた。牝牛(めうし)が仔を生んだこと、二十頭の羊を飼つたこと、服地を織る手機ができたこと、種子を播いたこと、いろ〳〵なたよりが北海道からあつた。

愛すべき北海道の平原。愛すべき大和の平原。そこに默々として働きつゝある、生きつゝある尊ぶべき人々。

奈良でもとめた佛を富本氏に見て貰うたが、贋物といふことで大笑ひになつた。奈良では贋物を作るのを專門にしてゐる佛師があるといふことだ。それでも贋佛を賣るにしても買ふにしても、奈良であるだけにいかにも佛の商ひといふことが面白く、腹も立たぬ。

奈良の秋にせの佛も尊かり

東大寺をはじめ奈良の寺々の尊い古佛を拜んで歩くのは元よりうれしいことであるが、あるかなしかの靜かな初秋の風に吹かれながら、佛を賣る奈良の町の店から店へと飾窓を覗いて歩くのも面白い。

富本氏の家を辭して、古い氣持ちのいゝ大和の小ひさな町を歩きながら田圃の眞ん中の輕便の停車場へ出たころは、日は生駒に落ちてしまつて法隆寺の塔がかすかに夕靄の中に見えた。夕燒の空は半天を焦くほどに燃えて、今にも大あらしが襲うて來るかと思はれるまでに雲はちぎれ〳〵に飛ばされてゐた。

酸漿の實も、百日紅の花も地に叩きつけられるまでに風は吼えながら大和の平原を吹い

て行つた。

汽車が動いてからも、富本氏と可愛らしい富本氏の姪御といふお孃さんの小ひさな影だけが、久しいこと薄暗の大和平原の眞ん中に見えてゐた。

日が暮れてしまつたと同時にあらしにつれて雨が降つて來た。大和をめぐる山の巓々では今夜も雨乞ひの火が焚かれた。天に對して雨を乞ふ人々の祈念の叫びが炎となつて闇のなかに燃えたけつてゐるのだと思ふと、むしろ凄いやうな氣がする。

奈良から乘つた五十ばかりの色の赤黑い、背の高い、逞しい男。腕にも胸にも一面に文身が見える。伴れの女といふのはまだ二十にもなるまい。それとも二十一二か。

「兩親にも隱れて出て來たんですから」と女は言つてゐる。女は小ひさな風呂敷包みを一つ抱へてゐる。二人とも人目を避けるやうにしてゐる。

若い女をたばかつて、つひに一生を闇の中に葬らせてしまふやうな恐ろしい職業の男でもあらうか。私の頭には伊豫の新居濱の宿で逢つた不幸な女のことが泛かんで來た。

雨がどしや降りに降つて來た。あらしが窓の硝子を小石でも叩きつけるやうな音を立てて打つた。女は男の後から部屋を出て行つた。木津川の驛に着いた時二人は下りて行つた。

男は恐ろしいあらしの中に、暗いカンテラの下に突つ立つてゐた。若い女はベンチに腰を卸して風呂敷包みに半身を凭せかけて俯向いたまゝになつてゐた。恐らく自分の無謀な、向う見ずな計畫を後悔しはじめたのであらう。明日の運命に恐れをのゝきはじめたのであらう。

「復活」の女主人公カチウシヤが戰場にゆく主人公を汽車の中に探したのも雨のひどい夜であつた。戰場へゆく汽車は動き出した。かの女の處女性を破つた男、孕ませた男は酒を飲みトランプを打ちながら、カチウシヤには一瞥をも與へないで、否、カチウシヤがその驛にゐることすら忘れてしまつて、戰場へと立つてしまつた。我がまゝな男性に對する無垢な女性の絶望、反感、自暴、自棄。そして最後にかの女自身を滅すところの穽(おとしあな)は、かの女等を待つてゐる。

雨はます／＼ひどくなつて來た。

今朝木津川の鐵橋をわたつた時と同じやうに、夜もまた鐵橋にかゝるころはひどいあらしが窓を叩きつけた。

闇の中に木津川の白い磧がかすかにそれと見えた。重衡の塚を圍む竹藪も寺もたゞ一抹

の闇の中に、あらしの中につゝまれてしまつた。

　このあたり塚あり木津の螢草

　私は無理に硝子窓を明けてそれらしい物の姿を見出さうとつとめたが駄目であつた。冷い雨が容赦もなく顔を叩きつけるのであつた。

×

　私は京都に來て十日ばかりになる。

　日中はまだ暑いので、夕方になると三條の橋の上に行つて夕涼みの人々を見る。

　旅だと思つて見ると何も彼も珍らしい。心を撃つ。

　古い格子戸の前に縁臺を出して涼んでゐる人も、子供をあやしながら東山の方へわたつて行く若い母親の姿も言葉もなつかしい。

　永く京都に住んでゐる人にはさうでもあるまいが、旅人にとつては磧を吹いて來る風までが懷かしい。薄暗い店の暖簾までが近松の世話物の舞臺を思はせる。京都に來て三條大橋の欄干にもたれて星を眺めてゐると、山につゝまれた都市といふものゝいかに愛すべきものであるかといふことをしみ〴〵と考へさせられる。大阪でも山を見ることができる

が、京都くらゐ高くもなく低くもなく、しかもやさしい美しい山につゝまれた都市は外にはない。山を四方に控へながらいかにものんびりとしてゐる。山には塔があり、伽藍がある。夜になれば町をめぐつて山の燭がかゞやく。周圍に美しい山を持つた京都に來ると、疲れた魂が柔かな手で撫でられるやうな落ち着きを見出す。

このころではどこも雨乞ひの火を焚くので、三條大橋の上に佇(たゝず)んでをれば西の方の高い山の嶺に毎晩火を焚くのが見られる。夜の高い山の火を見るのがうれしいので、夕方になれば橋の上に出かける。

昨日は南禪寺前まで電車に乘つて、八日ごろの月を仰ぎながら疏水(そすゐ)に沿うて歩いて歸つて來た。

朝早く、東山の蔭がまだ京の町半分をつゝんでゐるころ、三條大橋の上に立つてゐると建仁寺の托鉢僧(たくはつそう)が四五人おう〳〵と呼びながら、初秋の風に吹かれて橋をわたつて來るのに出逢ふ。花籠を頭にいたゞいた大原女(おほはらめ)にも會ふ。そのやうなことでも旅の者には嬉しい。

京都の町を歩いてゐると幾年振りかでほんたうな虚無僧に出逢ふ。虚無僧の魂はすでに失はれてゐるかも知れない。しかしどうせ何にせよ魂といふものがさうながく維持される

筈はない。宗教にしてもその開祖を除いては誰がほんたうな魂を持つてゐるやうぞ。俳諧にしても芭蕉の他、幾人の人が魂を持つてゐるか。形だけでも見ることができるのはうれしいことである。

人間の仕事に、ほんたうな魂だけのものがどれだけあり得よう。形だけだと見えても、少し寛容な心で見れば形のなかに魂は存外生きてゐることもある。すべてのいゝことは形だけでも保存して置きたい。

おう〳〵と京都の朝の町を呼んでゆく建仁寺の托鉢僧たちの聲を聽いただけでも悟る人は悟るであらう。よし悟道といふやうなむつかしいことは駄目だとしても、あの姿を見、聲を聽いたゞけでも、一箇の正覺、一刻の正覺は見出し得らるべき筈だ。三條の大橋を尺八を吹きながら秋風に吹墓れてゆく虚無僧を見たゞけでも、尺八の音を聽いたゞけでも、無常の覺りだけは感じ得べき筈だ。

何事もありのまゝに受け容れてゆきたい。

そんなことは幻覺だといふ人があるかも知れない。幻覺でもいゝ。そのまゝに受け容れてゆきたい。幻覺の中にも救ひはある筈だ。人生のことすべてが元々幻覺でないと誰が言

ふことができようぞ。

私は三條大橋の上に立つてたしかに昨日秋風の聲を聽いた。建仁寺の托鉢僧を見た。天蓋を眼深く冠つた白衣の虛無僧を見た。星の落つるのを見た。人間のいのちの刹那々々に削られてゆくのを感じた。

箱根を越ゆるころはまだ合歡（ねむ）の花が咲いてゐた。日暮れ方の近江では初嵐の聲を聽いた。四國では山の上の雨乞ひの火を見た。すべてのこれらのものを私は心からうれしく受け容れた。さらに私をめぐつて集まつて來た誰れ彼れの心を、そして人生を喜び、人生を寂しく思つた。

雲、鳥、秋の風、合歡の花、草、水の色、夕燒の空、夜の町の燭、美しい人の心、これ等のものを除いてどこに人生があらう。

もしこの世界から銀河が失はれたとしたら、もし夕燒と、空と、水と、草と、秋の風が失はれたとしたら、美しい人間の心が失はれたとしたら、私は生きてゐる價値を見出すことはできない。

草原に秋が來た。
子供らは夕燒の空の下で眞つ赤に燃えた顔をして蜻蛉を呼ぶ。
子供らは素つ裸である。
遠い山をめがけて
高い空をめがけて
吹いて行く秋の風を追つかけて
子供らは蜻蛉を呼ぶ
今大地は子供らを秋の眞ん中に置いて、暮れようとしてゐる。
大地は子供らのために日暮れようとしてゐる。
秋は子供らのために日暮れようとしてゐる。
素つ裸の子供らは秋の世界の眞ん中に立つてゐる。

×

旅人はたゞ一人夜の草原を歩む。
見よ地平線も、銀河も、白い湖の面もみんなかれのものである。

森には小鳥の夢あり、露あり、蔭あり、葉摺れのさゝやきあり、流れあり、すべて旅人のものである。

秋の風は夜明けの畑にさゝやく。
菱の花は夜明けの水に。
空はすでに青く
ひたきは木に啼く
旅人はたゞ一人草原を歩む
すべてのものたゞかれ一人のものである。

×

旅人はたゞ一人草原を歩む。
道は無限に白く。空はつゞく。
かれはたゞかれ一人の世界をのみ思ふ。
そこには時間もなく、空間もない。
かれはかれ一人の生を思ふ。死を思ふ。悠久(いうきう)を思ふ。

かれはかつて逢ひし美しき女を思ふ。寂しき思ひ出を道に捨てつゝ歩む。
草あり、草の花あり、思ひ出の夢を捨つ。

×

旅人はたゞ一人で歩む
秋の風あり
女よ、死せし者よ、
草あり、草の花あり。
別るゝこと、死ぬること、愛すること、憎むこと
人間の行きつくべき世界の白き門あり
聲なし、光りなし、色なし、墓なし、思ふことなし
たゞ虚無の世界といふ。
女よ、かつて愛せし者よ
思ひ出を捨つ
草あり、草の花あり。

×

東の風吹け
かの女の家へ
西の風吹け
かの女の扉へ
思ひ出を捨つれば思ふことなし。
雲を見、山を見、歩む日は尊し
忘れたる思ひ出を思ひ
忘れたる俤（おもかげ）を思ひ
思ひ出を捨てゝ靜かに草を歩む
草あり、草の花あり。

×

南の風吹け
かの女の子供らの上に

北の風吹け
かの女の白き墓の上に
草原を歩むことゝ死の世界を歩むことゝ
神の他誰か知らん。
悲しみの面を靜かに凝視すべく旅を歩む日を愛す。
草あり、草の花あり。

憂鬱なる日よ

憂鬱なる日よ、かくても人はなほ生くべきか
地は暗き影を吸ひ、海は喘ぐ
薄曇りの空を見れば鉛の如き憂ひ湧く
防風は砂に這ひ
蟲は土を抱きつゝ生きてあり
日の暮るゝまで人は思ひ人は惱む

かの日地にうづくまりて泣きぬ
地に落ちぬ、涙
たゞ一人地を見つめて泣きし日は尊かりき
かの日懷かし

川原の砂を踏みて歩みぬ
水草はかなしき夢をつゝみぬ
千鳥海へ鳴きぬ
かの日一人泣きぬ

潮風は草の葉を吹きぬ
一人海に立ちて
孤獨なる日の影を見つめぬ
かの日一人泣きぬ

一人にて生くることは寂し
されど生まれざりしならばさらに寂しかるべし
かの俤も見ざるべし

木に凭りて

かの靜かなるまなざしも

砂を踏みてこの寂しさを思ふ
草を踏みてかのまなざしを思ふ
樹の影のごとく靜かに人を思ふは苦し
かの日一日泣きし

×

小鳥らよ寂しからずや
汝と梢と
汝と木の葉と
汝と汝の唄と何のかゝはりありや
小鳥らよ寂しからずや

汝と空と
汝と海と
汝と日の光りと何のかゝはりありや

小鳥らよ寂しからずや
汝と五月の微風と
汝と雛罌粟（ひなげし）の花と
汝と柔かき草に落つる汝自身の影と何のかゝはりありや

汝を哺（はぐゝ）み懐かしき巣すら
汝と何のかゝはりありや
空はやがて空に
海はやがて海に
微風はやがて無限に

巣はやがて地に
小鳥らよ寂しからずや

×

旅人よ寂しからずや
海は白き過去の夢に
地はかすかなるすゝり泣きに
疲れたる脚をとゞむれば
胸の疼く
忘れたるさゝやきの響く
小鳥らは鳴くに
微風は流れ行くに

旅人よ寂しからずや

木に凭るに木はもの言はず
地にうづくまるに地はもの言はず

芭蕉の墓に詣づる記

菊の香に奈良の古き佛たちを訪ふにはまだ秋は淺かつた。けれども嫩草山(わかくさやま)に腹這ひになつて奈良の町を見、郡山、法隆寺、木津川と點綴(てんてつ)せられたる伽藍の屋根に舊都の俤をたどつてゐれば、いつ來ても奈良は古き佛たちの懷かしまるゝ町だといふ感じがしみ〲と湧いて來るのであつた。

「春なれや名もなき山のうすかすみ」

といふ翁の句が、奈良の山を見る時、一番胸につよく應へて來る。芭蕉がうたつたのも奈良への旅の途中であつた。

山を下れば大佛の鐘を撞(つ)く旅の人々が、大きな鐘を見上げてゐた。

私は奈良の大佛の鐘の音が好きだ。京都にも、三井寺にも、石山寺にも旅人に撞かせる鐘はあるが、奈良の大佛の鐘が一番ありがたいやうな落ちついた心持ちを抱かせる。

京都ではどこのお寺も商ひをしてゐるやうな氣がする。本願寺を見ても智恩院を見て

も、清水を見てもさうである。奈良では私はほとんどそんな氣分を感じない。三笠山を下り、二月堂に出で、大佛のあたりを歩いてゐる間に、私たち自身が昔の大宮人たちののどかな生活を享樂しつゝあるやうな氣持ちになる。

奈良で感ずる佛教は、冷たい超人間的なものでなく、どこまでも柔かな、ふくよかな若い女性の美をわすれ得ない現世享樂の至境を眼のあたりに具現したものである。

あの大佛の鐘を撞いてゐる旅の人々を見てゐるとほんたうにのんびりした氣になる。一つの鐘の音は奈良の舊都をつゝむ深い山から、さらに町へと響く。

鐘つけば山にしみけり奈良の秋

×

奈良の町を歩いてゐる間に私は久しい間考へてゐて果さなかつた粟津の義仲寺詣でのことを思ひ出した。その夜は京都に泊り、翌日の朝近江にゆくことにした。

奈良を出て間もなく、木津川の左岸、竹藪に掩はれた堤防の下に小ひさな寺がある。そこに平重衡の首塚がある。汽車の窓から小ひさな輪塔が見える。かれはそこの木津川のほとりで殺されたのであつた。

義朝の死を悼むべくばまた重衡の死も悼むべきである。

宇治の町に着いたころは日が傾きかゝつてゐた。さすがに茶の香が町中をこめてゐる。宇治川の流れは碧落のやうに美しい。橋をわたりながら上手の平等院を眺める。

二停留場ばかり行つたところに黄檗山がある。普茶料理といふ名だけは聽いてゐたが、寺の前の店ではじめて蘭の花の吸物などを吸うたが、すこぶる風雅なものであつた。山門をくぐつて廣い境内の砂を踏んだころは、日がほとんど暮れてしまつてゐた。死のやうな靜寂につゝまれた廻廊を二人の若僧が小急ぎに急いで行つた。

×

日はまだ夏のやうに暑かつた。

三條大橋の停留場から大津行きの電車に乘つた。

疏水の傍を通りぬけて山と山の間を電車はひた走りに走つた。山城と近江の境であらう。蟬丸の故跡などを眺めてゐる間に、白い湖が繪のやうに展げられて來た。

電車を棄てゝから、軒別に鮒だの、鰉だの、湖の魚を賣つた狹い店の通りを長いこと步かなければならなかつた。

のそくさと大きな牛が空車を挽きながら歩いてゐるのも、滋賀の都時代の悠長な感じを湧かさせた。

町は湖の方へだらだら坂に沿うて下りて行くのであつた。湖の直ぐちかくで、石山行の電車に乘らなければならなかつた。

電車が動き出すと間もなく左手の窓から琵琶湖が一眸の下に眺められるのであつた。矢走の沖には白い雲の影が落ちてゐた。

馬場といふ停留場で電車を下りた。すく〳〵と伸びた稻田の中の停留場では、三人の驛員たちが將棋をさしてゐた。

「義仲寺はどちらです？」

「この道を眞直ぐにいんで右です。」

私は湖の方へ坂道を下つて行つた。

粟津、瀬田、矢走、比良、唐崎、比叡、白い湖の面、柔かな稻の穗、沖を走る舟、道ばたの木槿（むくげ）、すべてが私の眼の前に輝いてゐる。

私はいかに芭蕉がこの土地を愛し、いかにこの風景を賞（め）でたであらうかなどと想像しな

がら歩いてゐた。日でりがつゞいたので、道は歩くたんびにひどい砂埃を立てた。木槿の葉も道の埃で白くなつてゐた。

藻を刈る舟の男の背に、九月の日がのびやかに照つてゐた。黒い水鳥が藻棹の先に水の輪を作つて姿を隱した。どことからともなく水鳥の寂しい聲が聞えて來た。

湖に沿うた道路の片方に小ひさな庵寺があつた。義仲寺といふ小ひさな標木が建てられてあつた。ほんたうに小ひさな庵寺であつた。

芭蕉翁の碑は、三尺にも足らぬほどの小ひさな自然石であつた。石で築き上げた臺の上に碑が載せられてあつた。

翁の墓にぬかづいた時、私は久しくあこがれてゐた翁に逢ふことのできたやうなうれしさと同時に、わけもない涙が落ちて來るのを覺えた。

あまりに尊い墓であつた。あまりに寂しい墓であつた。

芭蕉の墓と隣り合つた木曾義仲の墓があつた。これもあまりに小ひさな墓であつた。

芭蕉は實際木曾殿と背中合せの寒い夢を見てゐるのであつた。

私は義仲寺を守つてゐる老翁と語つた。

數年前この寺が縣の役人たちの手によつて毀たれようとしたことと、老翁がこの寺に住むまでは御堂には毎夜乞丐の徒が焚火をしては定住の宿としてゐたことなどを聞いた。

芭蕉はよくこの寺に來ては弟子たちと俳諧をやつたし、恐らく冬の夜寒を幾度となくここに泊つたことであらう。そのころも無緣の廢寺でこそなかつたとしても、湖に騷ぐ葦の間の波音に夜もおち〳〵夢さへ結ばれぬほどの荒れ果てた庵寺であつたであらう。

襖の繪は全部蕪村が書いたものになつてゐるが、よく破かれもせず、焚かれもしなかつたものである。

私は義仲寺でも芭蕉の書を見たが、芭蕉の句から受くる感じに比べて、芭蕉の書は一層力強い感じと共にインテレクチュアルだといふ感じを抱かせられた。すくなくともかれは底知れぬ深さの人であると共に明知の人であるといふ感じを抱かせられた。かれは世を捨てたやうな悟りを持つてゐた一方では、どこまでも強い人間的な意欲、意志に取り憑かれてゐたところがあつたやうな氣がしてならぬ。ともかくかれはぼんやりした人ではなかつた。自分自身に對しても、弟子たちに對しても、世間に對してもしつかりと把持したところのある人であつた。その若い日にはさぞかし覇氣滿々たるものがあつたやうに思はれる。

非常に強い情の人であつたと共に、強い意志の人であり、明知の人であつたやうに思はれる。

墓の前に立つてゐる間に、私の頭には芭蕉臨終のことや、そのをりの葬ひのことなどがいろ／＼と泛かんで來るのであつた。

「卽刻不淨を淸め白木の長櫃に納めまゐらせその夜直ちに川船にて伏見まで御供し奉るその人々には其角去來丈草正秀木節惟然支考之道呑舟次郎兵衞以上十一人花屋仁左衞門が京へ荷物を送る體にて長櫃の前後左右を取りまき念佛誦經おもひ／＼に供奉し奉る。八幡を過ぐる頃夜もしら／＼と明けはなれけるに僧李由の下りたまへる舟に行き逢ひければいざとて乘移り、相共に果敢なき物語して程なく京橋に着く。

それより狼谷通りにかゝり急ぎに急ぎしほどに十三日巳の時過ぎには大津の乙州が宅に入れ奉りけり」（花屋日記）

元祿七甲戌十月十二日申の中刻かれが最後の呼吸を引き取つてから、翌十三日の巳の刻大津の町にかれの遺骸が運ばれるまでの弟子たちの心持ちはどうであつたらう。さらにかれの死を聞き傳へた人々の悲しみは。

かれほど一生を通じて人々に愛せられ、かれほど死して後多くの人々に慕はれた文學者がかつて世界の歴史にあつたらうか。

「此狀十二日の暮頃に上野に屆きけり土芳、卓袋ひらき見るより大に驚き取物も取あへず松尾氏に參りたれば是も同時に書狀着せりと云ふより兩人はしたゝめそこ〳〵にして子の刻より兼て案內知りたる近道にかゝり大和の帶解までたゞいそぎに急ぎけれど月入ての事なればくらさは暗し小路の事故提灯も消へぬれば其夜の明方に帶解に著く。…………………………兩人共に殘念申ばかりなくさらば葬送に成とも逢ひ奉らんとて又引返し八間屋にかけ行幸ひ出船ありければそのまゝ飛乘り伏見京橋に着しは夜明なり、直に飛下り狼谷にかゝり義仲寺につきしは未だ入棺し給はざる前なりければ諸子に斷りて死顏のうるはしきを拜しまゐらせ……」(花屋日記)

こゝにも芭蕉の死を聞いて伊賀から駈けつけた土芳、卓袋の二人の師を思ふ心持ちがうかゞはれるが、近江、京、大阪、美濃、尾張、伊勢その他諸國の人々でどんなにかあわてふためいて義仲寺へ駈けつけた人々があつたことであらう。

「……諸國の人々、三世値遇（ぜちぐう）の緣を悅びわれ〳〵もと香手向（たむ）け奉るその數幾百人といふ數

しれず境内狹ければ表より入りたる人は裏へ拔け出るやうにしつらへ置き田の刈跡に道を附けゝれば燒香の人々はすべて裏へ拔けるゝにぞさして騷がしきこともなく……」（花屋日記）

今は義仲寺の裏には他所(よそ)の家立ち並びて、拔け通ることはできなくなつてゐる。少しはなれたところには工場などが立つてゐる。

私は葬ひの日に集まつた人々のことなどを考へながら寺を出た。丈草が庵を結んで師の冥福を祈つた丈草庵の跡も、東海道線に近い方にある筈だが、時間の都合で立ち寄らなかつた。

たゞ當時の師弟の美しい情誼を思うては淚ぐましい心にもなるのであつた。

ふたゝび馬場に引きかへした。道傍の木槿の下で桶の輪を入れてゐた男が何に怒つたのかたゞ一人で狂人のやうに罵りわめいてゐた。

稻の穗をわけて電車は石山へ走つた。秋の山が湖に對して明るく璧珠のやうに輝いてゐた。

石山の麓で湖水の魚をつけて晝食をとつた。

加賀に旅した折の「石山の石より白し秋の風」の句は石山の石を見てはじめてその味を知ることができた。時間がなかつたので幻住庵の跡をたづねることはできなかつた。

歸りには湖水の遊覽船に乘つて、瀨田の唐橋をくゞつて湖に出た。

かつて芭蕉が歩いたであらう山、詩腸を痛めたであらう湖邊も、一樣に秋の夕陽を浴びて暮れかゝつてゐた。

膳所あたりであらうか。

松列樹の間からかすかな煙が稻田を這ふやうにして漂うてゐた。

私はふたゝび芭蕉の葬ひの日を思ひ出した。そこになほ人々は集まつて火を焚き、師の亡き骸を埋めつゝあるやうな氣がしてならなかつた。

膳所、粟津、大津、轉々としてかれは湖の周圍を移り住んだであらう。

山一つ越ゆればそこはかれの故鄕の伊賀であつた。

かれは故鄕を出奔した。しかもその多くの年を故鄕の山と背中合せに住んでゐた。

世を捨てたかれはいつも世と背中合せに生きてゐた。かれはいつも故鄕のあたゝかさを忘れ得なかつた。世のあたゝかさを忘れ得なかつた。

京の歌舞伎を觀た歸りにかれは花やかな芝居のさま〴〵を描きながら、粟津へ歸つて來たことであらう。

なぜかれは故鄕を捨てたか。しかもなぜ度々故鄕をたづね、故鄕に近い町々を轉々として移り住んでゐたのか。かれの若い日につながれた故鄕の或るものへの悲しい執着が、かれが死ぬ日まで斷ち切られなかつたのではないか。

それにしても何故にかれは故鄕に屍を葬られなかつたのか。何故に湖畔を永住の地としたのか。

「此秋は何で年寄る雲に鳥」

湖をめぐりて秋の雲沈み、鳥は美しい水の輪を湖面に描いては鳴いた。

石山から一緒に船に乘つた二人づれの若い女は、いぎたなく甲板の茣蓙の上へ眠つてゐた。

聲なき土

聲なき土よ
お前の草原に立つて私は何を聽かうとしてゐるのだらう。
黒い土よ、武藏野の曠い原よ、煙つた木立よ
私は漂泊(さすらひ)の旅人の心をもつてお前のまへに立つてゐる。
聲なき土よ
お前は何を私に語らうとしてゐるのだ。
二十年前の私の思ひ出か？
Aの黒い瞳？
Tの白い柩？
亡母(はゝ)の墓？
すべては苦しかつた。悲しかつた。

けれども黒い武藏野の原よ
お前のまへに立つてゐれば
もつと苦しいこと、もつと悲しいことが明日の世界から近づきつゝある跫音を聽くやうな氣がする。

否、苦しいこと、悲しいこと以上の空虛さが黒い土の上を歩いて來つゝある。
苦しいこと、悲しいことは喜びに次いでのいゝことである。人間の生活にとつてなくてはならぬものである。人間の喜びに耐へ得ると同じやうに苦しみにも悲しみにも耐へ得る力を持つてゐる。
けれども人間は空虛さに對してはほんたうに脆い。

黒い土よ
お前のまへに立つてゐると私は自然の空虛さを感じないではをれない。
私の胸は壓しつけられさうだ。
私の肋骨は締めつけられさうだ。
お前のまへに立つてゐると私の過去の苦しい思ひ出なんていふことは何んでもないこと

になつてしまふ。

Ａは今では五人六人の子の母になつてゐるかも知れぬ。

そんなことはまるで私にとつて他人事のやうに思はれる。

今もし、Ａが私の前を通り過ぎたとしても、私は或ひは聲もかけないかも知れない。

Ｔの自殺、亡母（はゝ）の死、私にとつて悲しいことであつた。しかし私はそれにも耐へた。

黒い土よ

私はお前の空虚さを一番恐れる。

お前は何も語つてはゐない、お前は空虚だからだ。

お前は言葉を持たない。

お前は言葉以上のものだからだ、絶對だからだ、絶對の空虚だからだ。

黒い土よ

お前の空虚のまへに立つ時、私は魂の喜びと、慴（をのゝ）きとを感ずる。

お前は恐ろしい魅惑の力を持つてゐる。

お前は何を語つてゐるんだ。

私はそれを聴きたいためにぢいつと草の中に立つてゐる。
愛、憎、喜、呪、悲、生、死……そんなことが何んだ！
もつとそれ以上の何物かをお前は語つてゐるのだ。
七月の微風が吹いてゐる。
玉蜀黍がゆらぐ。

黑い土よ
私は玉蜀黍の葉音を愛する。
お前のさゝやきを聽くことができるからだ。
黑い土よ、玉蜀黍の葉よ
私はお前のまへに立つて何を聽かうとするのだ。
私は涙をもつて靜かに私の思ひ出をつゝむ。
黑い土を踏む時、玉蜀黍の葉音を聽く時。
私は涙をもつて靜かに私の魂をつゝむ。
さらに遠い明日の寂寞を思うて。

さらに遠い人生の漂泊を思うて。

×

私は槇有恒氏の「山行」を讀んだ。そして人間がいかに本然的に苦闘のために苦しみ、苦しみのうちに最高の生存意識を味はひつゝあるかといふことを考へさせられた。登山者はEnjoymentのためでなく、Sufferingのために山を攀ぢるのである。苦しむことのうちに愉悦以上の清福を見出すのである。イブセンの「ブランド」は何のためにあの雪の山にはいつて行つてしまつたか。「人生には幸福以上のものがある筈だ。」ブランドも、建築師ヒルダアもロスメルスホルムも幸福以上の或るものを覓めんがために生命を捨てたのであつた。

山に登ることは危險である。恐らく大アルペンの雪の中には、幾多の山の犧牲者の屍が年々靜かに埋められてゆくことであらう。しかも新たなる登山者は希望と生命を賭けて、アルペンの雪を攀ぢのぼる。何のためであるか？

愛する人々にとつて愛は必ずしも幸福ではない。ロスメルスホルムにとつて愛は死であつた。しかもそれは愛のなかに幸福以上の或るものを感じ得たのであつた。

生くることは尊いことである。最も尊いことである。しかも生を抛つてまで購はなければならぬ幸福以上の或るものがある。

幸福以上の或るものを目あてとする時、私たちの生活に光りが生まれ、踴躍が生まれる。哲人の生活、殉教者の生活、詩人の生活が生まれる。

幸福のみに囚はるゝ時、私たちの生活は俗人の生活に墮する。宗教はコンヴエンショナルな教義に死ぬ。

幸福を求めようとする人は植林の中をさ迷うたがいゝ。そこには木の實もあり、快樂もある。

生命を賭して高山を攀ぢて來た人々は木の實も發見せず、幸福も味はゝず、たゞ疲憊（ひはい）のみを持つて歸るであらう。

哲人とは何ものをも持たないで、空手、山を下つて來た男ではないか。

愛を得た者は愛に終り、富を得た者は富に滅びる。何ものをも得なかつた者こそ最高の人生意識を獲たのではないか。

人は火を追ふ蛾の愚を笑ふ。けれども、超人とは火を追ふ蛾の勇氣と本然性とを失はな

いところの人間の謂ではないか。

プロメシウスの傳說は畢竟、人間そのものが火をあこがるゝ蛾であることを象徵したものではないか。

火を追ふ者は火に死ぬ。けれども火を追はぬ者も死なゝければならぬ。

人生が倦怠くなるのは私たちの心から火の影を忘れてしまふからだ。冒險心に弛みが出來てくるからだ。所詮人生は「全か然らずんば無である。」すべてを投げ出してかゝる勇氣のないところに、ほんたうな人生意識は燃えて來ない。

私たちの心をして常に幸福以上の或るものを憧憬れしめよ。

私たちの心をして常に火を追ふ蛾の勇氣を忘れしめてはならぬ。

もと〳〵一厘の値をも拂ふことなしに與へられた生命である。この生命のすべてを賭けることによつて、人生のすべてを得ようとする大冒險を敢てする者は超人である。

打算的な、偸安的な自分の心を叱らなければならぬ。

人生は收穫ではない。人生は憧憬であり、希望である。

十羽の小鳥を獲たといふことゝ、一羽の小鳥を獲たといふこととは、その人の生の價値

問題に對しては、何の關係も持つてゐない。ブランドは一羽の小鳥をも獲なかつた。
死とは、幸福以上の或るものに對する憧憬の滅却である。
神を求むる者は、神を求むるがゆゑに死なない。神を求むる者はその憧憬の中に生きてゐる。神を求むる心を失ふと共に、かれの神は死し、かれ自身も死ぬ。

×

私は親切な心の足りないことを最も悲しく思ふ。人に對する思ひやりの足りないことである。

不注意といふことはたいてい親切心の不足から生まれて來る。

もすこし亡母の心に對して親切な見方をしたならばと後悔してゐる。亡母は私が故鄕を去つて一週間目に死んだ。あの時、もすこし私が亡母の病氣を親切に見ることをしたなら、或ひは私は亡母の臨終に亡母を喜ばせることができたかも知れなかつた。

妻の心持ちに對して私は時々あまりにラフな見方をする。デリカシイが足りない。ほんたうに人間のデリケートな心持ちを掬むことができない。そのために對手の心を傷つける。

惡意があつてゞはないが、親切な心の足りないために對手の心を傷つけるといふことは

悲しいことである。

沙翁が萬人の心を持つた人と言はれるのは、親切な心の人であつたといふ意味にもとられる。藝術とは要するに、親切な心の記錄ではないか。人生に對して親切な心を抱かないでどうして藝術が生まれよう。人を憎む時、人を呪ふ時、たいていは私たちは親切心を失つてゐる。

親切な心を持たない時、私たちの言葉は御座なりになる。私たちの見方はたゞ上つ面だけになる。そんな人の藝術は無理に飾り立てられてはゐるが、何の滋味をも持たぬ。風韻をも持たぬ。

人格とは親切な心のあらはれではないか。人を尊敬するといふことはいゝことである。しかし尊敬する心を起させるものは親切な心ではないか。親切な心によつて私たちは始めて人の美しさをも尊さをも知るのではないか。自分自身に最も責むべき物を見出すことによつて謙虛な念を抱かせるのも親切な心ではないか。

私たちは極めてラフな槪念によつて色々な議論をしたり、人生を救ふなどといふやうな大きなことを言つてゐる。こんなことは昔サドカイの徒がすでにくりかへしたことである。

小ひさくともいゝから、もつと〳〵親切な心、デリケートな心を自分のうちに培はなければならない。

たゞ一人の妻に對して、たゞ一人の友人に對して、もすこし親切でなければならぬ。

誰よりも私は不親切な自分の心を恥づかしく思ふ。

天城の春に居りて

伊豆の山と山との懷に抱かれた谿(たに)の村では軒に朝の日の光りが射して來ることも遲い。東に向いた窓の下には、この湯の町の眞ん中を貫いてゐる谿川がせゝらぎの音をなして流れてゐる。

私の窓と面した彼方の岸は崖になつてゐて、そこには二本の椿が咲いてゐる。竹があり、櫻があり、杉も欅もある。花にはまだ四五日、間(ま)があるやうに思はれる。

崖の上を新らしく切り拓かれた道が通つてゐる。天城(あまぎ)の密林地帶を經て、土肥(とひ)に通ずる道になつてゐる。

こゝの湯の町からさらにその道に沿うて二里ばかり奧の天城の懷に沿うて二つ三つ小ひさな部落があり、炭を燒く家もありするので、天氣のいゝ日は炭を背にした馬だの、行商人らしい男だの、獵師だのが一日に幾人となく川向うの山道を上り下りする。窓を明けては私はその人たちを眺めてゐる。三四日も窓から眺めてゐる間に、たいていそこを通る人

も馬も毎日同じ人であり馬であることに氣付く。馬は非常に小ひさな馬である。そして柔順である。山の枯草や、炭を積んだまゝ、こつ〳〵と自分一人で厩に歸つて行く。こゝらの山の中にもゴム靴がはいつて來てゐて、子供たちはゴムの靴を穿いてゐるのであるが、山から下つて來る男にはまだもんぺのやうなものを穿いてゐるものもある。

わづかに芽ざして來た春の草山を背にして立つたもんぺの男の姿は、いかにものどかである。

川をへだてゝ芝山がある。稚松の山がある。その間を菜花と麥の穗が點綴してゐる。山を歩む人、旅人、小學校通ひの子供らが或ひは菜花の間にかくれ、或ひは芝山の陰にかくれてしまふ。時としては思はぬところに旅人の影を見出すこともある。犬を連れた獵師の姿が嶺の上に、青空に投影してゐることもある。

夕暮になると天城にはいつも雲がかゝつてゐる。

×

山の懷に抱かれた湯の町では、夕暮の寂しい影が、平原の町より早く軒のあたりに迫つて來る。

町は暮れかゝつて、軒の下に薄暗が漂ふころも、岩ばかりの河の岸に立つて西の空を眺むれば、まだそこには天城のいたゞきに劃られた夕燒の色が取りのこされてゐる。

谿の湯の町のさゝやかな小川のほとりから、天城の上にのこされた夕燒の空を見る時、旅といふ心がしみ〴〵と湧く。

岫を出づる雲、岫に入る雲、山一つ越せば廣い海もあらうに、そこにはまだ日の光りものこされてあらうに、谿底の湯の町はすでに暮れてしまふ。

私は日暮れころになると湯の町を出はづれたたゞ一筋の道を歩む。ほとんど毎日のやうに。

村の出はづれには一軒の理髮床がある。若い男がいつも眞つ白な被ひを着て硝子窓の中に坐つてゐる。理髮床に隣つた廣場には山から伐り出されたばかりのまだ木の香の新らしい材木が積み重ねられてある。毎日大仁(おほひと)まで湯の町の客を運んでゆく乘合馬車が、いつも夕方になれば、馬を外してそこの廣場に置かれてある。五六人の子供たちが空馬車の中にはいつたり出たりして遊んでゐる。

他に何の遊び場所も持たず、また遊ぶべき方法も知らぬ山の子供らにとつては、夕暮れ

の廣場に集まつてたゞ一臺の空馬車に乘ることがどんなに樂しいことであらう。

夕暮れの闇が幼き者の影を包んでしまふまで、かれ等は空馬車の中で遊んでゐる。歌をうたふこともしないで。

たゞ折々かれ等の笑ひ聲のみが薄暗の中から轉げるやうに白い道の方へ傳はつて來る。白い一筋の道は山の裾をめぐつて、水車小屋の前から右に折れて下田街道へ結びつくのである。

そこには人つ子一人歩いてゐないことが多い。たゞ一軒の水車小屋が見える。三基(き)、四基の古い塚が枯れ草の中に輪塔の一部を見せてゐる他には、まだ冬枯れの寂しさを漂はせた幾重の芝山のみが五里十里と連なつてゐるばかりである。たま〳〵遠い芝山に春先きの野火を發見することもあるが、夕闇に空を舐めずる遠山の火はかへつて旅人の心に悠久な思ひを誘ひ喚ぶ。

終日囀つてゐた小鳥らも啼かず、天地すべてが夕暮れの眠りに落ちかけてゐる。

ほんたうにそこに立つてゐる自分一人が天地の間にたゞ一人友もなしに放り出されてゐる。もしそのまゝに永遠に自分一人が、そこに立つてゐなければならぬとしたらどんなに

か頼りないことであらう。同時にそれは羨ましい境界でもあり、尊い孤獨の世界でもあるやうに思はれる。强くあれ。孤獨に耐へよ。かう言つたさゝやきが聞えるやうにも思ふ。

野火がだん〳〵明るくなつて行く。空が暗くなつて行く。

天城、箱根、富士の脈々につゝまれた大自然の中にたゞ一人の旅人のみが思ひつゝ、惱みつゝあるやうな氣もする。

廣場の空馬車の中の子供らの影も見えなくなつた。

家々の戸はとざされてしまつた。

私は靜かな湯の町の夜を歩いてかへる。

私は花やかな都會生活と山の中のこの靜か過ぎるほど靜かな孤獨な生活とを比べて考へる。

公園を持ち、いろ〳〵な美しい玩具を持つてゐる都會の子供らと、みすぼらしい空馬車にたゞ一つの幸福な世界を見出してゐる山の中の子供らの生活を考へて見る。

山の子供らはもう眠つたであらう。かれ等の或るものはやがてまた天城から大仁への馬車を驅るであらう。そしてやがてこの靜かな山の中に一つの墓を殘すであらう。かれ等の

或るものは山に行つて、一生涯木を伐るであらう。そしてやがて山の中に一つの墓を殘すであらう。たゞそれだけの一生が言ひやうもなく尊いものゝやうにも思はれる。

×

私はまだこゝかしこに冬枯れの俤を殘した芝山を歩く。椿の下に、或ひは麥畑の中に盛り上つたわづかな雜草の中に墓らしい塚を見出すこともある。墓であるか、墓でないかさへはつきりとは分らぬ。恐らくそこの下にも、かつて一生涯をこの山の中に送つた人々の魂が眠つてゐるであらう。或ひは或る人々の魂はたゞ一つの墓さへも失つてしまつたであらう。

その人々がかつてこの地上に生きたといふこと、苦しんだといふこと、そのやうな記錄は永遠に人類の歷史から失はれてゐる。けれどもその人たちの生涯が何で無意味であつたと言へよう。

地上に殘された墓を見出さぬところに、私が何氣なく踏んでゐる土の下に、雜草の下にいかに多くの私たちの先人が眠つてゐることであらう。そこにこそほんたうに人間らしい愛憎の念になやみ、人間らしい苦しみを苦しんだ人たちが眠つてゐることであらう。

深い山の中に生まれ、哺まれ、生き、なやみ、やがてそこに名もなき塚を遺し、塚を失ふであらう子供らは村はづれの廣場でたゞ一臺の空馬車に餘念もなく夕暮れを遊んでゐる。

日は暮れてしまつた。

子供らの窓はとざされた。

子供らは眠つた。

山の子供らの眠りの上に惠みあれ。

×

昨日の夕方からひどい雨であつた。

夜なかになつて若い男たちが雨の中を川に沿うて山の方へ走つて行つたりした。

夜つぴてひどい雨が降りつゞいた。夜明け方になつて、湯の町から七八町も下の水車小屋の傍の水の中から一人の女の死骸が發見された。

一ケ月ばかり前から湯治に來てゐた女の死骸が、川に臨んだ一室に寢かされてあつた。縁端の眞つ赤な乙女椿には朝から春らしい小糠雨が降つてゐた。

その女は昨日同じ宿のお客たちと一緒に湯の町からは十町ばかりも離れた山の中の瀧を

見に行つた。

そこでもその女は羽織を脱ぎ捨てゝ、深い瀧壺を覗き込んだ。その刹那の顔は物凄いほどであつたと、同宿の女たちは語つてゐた。

「あたしは死にたくなつた。」とその女は道を歩きながらも、連れの人たちに語つたさうである。

「死ぬのはどうした方法が一番いゝでせう。」ともその女はたづねたさうである。

「首を縊つたがいゝでせう」「川に身を投げた方がいゝでせう」「ピストルがいゝでせう」連れの人たちは笑ひながらこんなことを答へたさうである。一人の男は「死ぬなら、川のこゝに來て身を投げるがいゝ」と冗談半分に言つたさうである。

その夜。女は、川のその點から身を投げて死んだのであつた。

そこは川といつても、水車を動かすために山の水を引いた溝といふほどの狹い淺い流れであつた。どんなに想像しても人が死ねさうにもない流れであつた。しかも女は敎へられた通りに、そこから身を投げて死んだ。

「ヒステリイだつたからこんなところから身を投げて死んだのだ。」と町の人々は語り合

つてゐた。

「夜なかにうなつてゐる聲がしたので、まさか人間とは思はなかつたが、家のまはりをまはつて見たが何も見つからなかつた。この淺い川のなかとは想像もしなかつた。」と、その流れの傍に住んでゐる獵師は語つてゐた。

翌日はすつかり空が晴れた。

山には小鳥が啼いてゐた。

女の死骸は山の火葬場へ運ばれて行つた。

×

川には河鹿が鳴きはじめた。

去年の夏霧島の大浪の池で聽いた河鹿は、オーケストラの中の笛の音を聯想させた。幾千年の水をたゝへたであらう高い山の上の湖水に聽くにふさはしい聲であつた。

この附近の伊豆の谿川で聽く河鹿は里に近いせゐか霧島で聽いたほど澄んだ聲を持つてゐない。悟つた聲を持つてゐない。悟りきれぬ聲である。なやましさを訴へるやうな聲である。麥笛を吹いて里の戀人を誘ひ出す若人を聯想させる聲である。やる瀨ない聲である。

夕方など一人で聽いてゐると、懶い世界へ引き摺られさうな聲である。

こゝではさま〴〵の小鳥が一時に春の迫つたことを知らせるやうに囀りはじめた。翅の裏の黄色な鶺鴒と、翅の白い、背の黒い鶺鴒は伊豆のどこの谿川にも見らるゝが、こゝにも夜が明けるころから鶺鴒が河原に來て鳴いてゐる。繡眼兒、頰白、ひたき、四十雀、何から何と名も知らぬ小鳥が梢から梢へと鳴きわたつてゐる。町の人たちに聽いてみても鳥の名も知れぬ。

朝、まだ夜が明けぬうちから眼をさまして耳を澄ましてゐると、いつも夜明けに眞つ先きに鳴きはじめる鳥の聲は同じものであることに氣がつく。ひたきや、四十雀の聲が鶯の聲より朝早くから聞えて來るやうに思ふ。

こゝでは川にゐる小鳥も、山にゐる小鳥も滅多に人を恐れない。五六尺の近さまで近づいても小鳥らは囀つてゐる。

今日私は雨の中にしばらく立ち止まつて頰白を見てゐた。頰白はその頰をしきりに雨に濡れた小枝でこすつてゐた。そして私が直ぐ傍まで近づいて行つても逃げないで囀つてゐた。

私はまた今をさかりに咲いてゐる咲き分けの乙女椿の花に埋まるやうにして、椿の甘い露を吸ひつゝある繡眼兒(めじろ)を眺めてゐた。

それはほんたうに美しい乙女椿であつた。私はいつもその椿の下を通るたんびにあまりに美しい八重の花瓣に見とれた。

三羽の繡眼兒はあの輕い華奢なからだを倒さにして椿の甘美な露を吸つてゐた。

それは人間が作つた王宮よりも美しい花であつた。私はその美しい世界にすべてを投げ出して、花につゝまれながら露を吸つてゐる小鳥の生活と、人間の生活と果して何れが幸福な生活であらうかなどと考へたりした。

時々はかいはせいみいが流れをかすめて鳴きわたることもある。

何といふ小鳥であらう。岩燕に似て岩燕よりやゝ大きな小鳥が、折々河心をかすめて矢のやうに迅く、川を下り、或ひは上つてゆくこともある。その小鳥だけがいつも鳴きもしないでたゞ一羽で光りを恐るゝやうに暗い岩の蔭を傳うて、一直線に水面をかすめて翔る。全身が墨のやうに黑く、いつも孤獨なのが、鳥の仲間の拗ね者のやうでいぢらしくもある。

×

今年は寒が遲れたせゐか、花はいつもよりおそいと山の人は言つてゐる。それでも狩野川に沿うた里のあたりでは、ちらほら櫻が咲きはじめた。東京では花の盛りだといふ新聞記事を見たが、こゝでは確かに十日ぐらゐ遲れたやうである。昨日天城の八丁池に仙人が住んでゐるといふので、見に行つたといふ一人の青年は、まだ池のあたりには三四寸の雪が積もつてゐたと話してゐた。仙人は留守であつたが、低い柴の小屋が池の畔に建てられてゐて、八幡大菩薩と書いた白い旗が立つてゐたなどと語つてゐた。

麥も伸び、菜の花も輝き、山の色も春めいて來たのに畑ではまだ雲雀が啼かないのが寂しい。

天城にかゝるまでの途中に下田街道に沿うてところ〴〵に山の懷や、川岸に沿うて小ひさな部落がある。どんな小ひさな家の屋根にも、屋根の眞ん中を切つて煙を出すやうにしつらへた小屋根がある。草葺き屋根の曲線、小屋根の恰好は立派な繪を形作つてゐる。腰高な裾を附けた草葺きの籾倉の形も面白い。櫻や、桃や、木蓮や、椿や、れんげさうや、小米櫻や、梨やいろ〳〵な花につゝまれた一と構への農家は、美しい繪をなしてゐる。厩の小窓からは馬が首を往來の方へ突き出して、珍しげに旅人をながめてゐることもある。

葺き替へた古い屋根の萱を田圃にはこんで、人々は火を焚いてゐることもある。子供らは街道の緣にしやがんで火を眺めてゐる。

何といふ無心な子供らの顏であらう。赤ちやけた髮、黑く日に焦けた顏、不思議さうに旅人を見る眼。

子供等は柔かな草にしやがんで、何を語つてゐるのであらう。旅人が近づけば一度に物語りをやめてしまふ。そして一樣にかれらの無心な眼を旅人にそゝぐ。かれ等は笑ひもしない。けれどもそこには人を懷しむ可憐な目なざしが、草の中にまたゝいてゐる。旅人が行き過ぎた刹那に、かれ等はまた何かを語り始める。

街道からそれて小川に沿うて芝山の懷に入れば、そこに段々になつた田がある。田には今恰度れんげさうが咲いてゐる。若い夫婦の男女が土を打つてゐる。畦には二人の子供らが、赤い毛糸の襟卷につゝまれたまゝ旅人を見てゐる。

たゞ一人默々として田を打ちつゝある Solitary Reaper を見出すこともある。

また思ひがけもない山峽に、靜かな小舍を見出すこともある。そこでは一人の老人が孫を對手に兎の箱を拵へてゐる。

その老人は夕方になるとよく草を積んだ馬を曳いて、私の窓から見える川向うの岸を下つてゆく。背には小ひさな孫が可憐な兩手で眼を塞ぎながら、眠らうとしてゐる。

×

"Man was made to mourn" といふバアンズの詩趣は、人間の住むところ、どのやうな深い山中を歩いても見出される。

こゝの湯の町の一人の娘は、去年八月の二十五日に東京へ奉公に出て行つた。そして九月一日のあの地震で竈の前にしやがんだまゝ、他の二人の友達と一緒に燒死してゐた。

私の窓から見える川向うの百姓家の娘は去年横濱に嫁に行つたが、それも死骸すら見えなくなつてしまつたといふことである。

昨日雨の中を私はその百姓家の庭を通りぬけた。美しい唉分けの椿が三本庭にあつて、いつもその椿には繡眼兒が花の露を吸ひに來てゐる。

奥を覗いて見たが一人のお婆さんが暗い爐のはたにぽつねんとしやがんでゐた。

×

今日は村の入り口の理髪床の若い男の家に嫁さんが來るといふので、近所のおかみさん

たちは仕事を休んで朝から雨の中を髮を結つたり、菜畑の傍で野菜を洗つたりしてゐる。
鏡の直ぐ後ろの部屋にはもう十人ばかりの村の人たちが集まつて酒を飮んでゐる。
山はすつかり雨雲にとざされてしまつた。
山の花が雲のなかにほの赤く燃えて來た。

×

夕方村はづれの駐在所の前を通つて見たが、めづらしく人だかりがしてゐる。五十ばかりの一人の男が眞つ靑な顏をして巡査の前に立つてゐる。
「一生、監獄から出られないやうにしてやるぞ。」
巡査の聲が往來まで聞えて來た。いつも空馬車の中で遊んでゐる子供たちが、駐在所の板塀の下に首を突つ込んで、こはさうに窓硝子の奧を覗いてゐる。
今日も終日山は雨にとざされてしまつた。

×

山の寺に詣る。
昨日雨の中を若い和尙さんが乙女椿の枝を伐つてゐたが、今日は小ひさな花御堂が飾ら

れてある。

菜の花とれんげさうと乙女椿と結香の花で花御堂の屋根が葺かれてゐる。いつも夕方になれば空馬車で遊んでゐる子供らが、今日は御堂に集まつて甘茶をいたゞいてゐる。花御堂の中の薄闇に立つてゐる釋尊の姿は尊く思はれる。

キリストの降誕祭が年々都會の冬の夜を賑はすに對して、釋尊の降誕が山の子供らによつてわづかに喜ばれ、祝はれてゐるといふことは面白い對照である。

釋尊はまことにいゝ時に生まれた人であると思ふ。花が咲きみだれ、小鳥が啼き、子供らがうたふ春の光りの眞ん中に釋尊は生まれた。無常寂滅の大宗教が、このうるはしい春光の眞ん中から生まれたのであつた。

涅槃(ねはん)にはあらゆる鳥も集まり、獸も泣いてゐる。釋迦は子供らの友達であり、小鳥らの友達であつたことを考へると今日菜隴麥圃(さいろうばくほ)の間に子供らの手によつて灌佛會(くわんぶつゑ)が營まれ、花御堂の中に眞つ黑な裸童子が立つてゐるのは面白い。

×

東京からやつて來た大工さんたちがずゐぶん前から、川の岸で木を刻んだり、鉋をかけ

たりしてゐた。

湯で一緒になつたり、往來で逢つたり、仕事場の近くを散歩するたんびに顏を合はせたりするので、いつとなしに道で逢つても默禮をしたり、「雨で困りますね」くらゐの挨拶は交はすやうになつた。そのうちでも、棟梁の直ぐ次の大工さんといふのが一番面白い。年は五十に近いであらうが、酒が大好きで、いつも夕方になると一杯機嫌で湯の町を歩いてゐる。どうかすると晝の飯時に一杯やつて棟梁に叱られてゐることもある。

いつであつたか醉つたまゝに、橋の上で一疋の黑犬の首を摑へて、振つて步いてゐるところを私に見つけられた。恰度晝飯の時であつた。

その日の夕方私はその大工さんと橋の上で逢つた。今度はすつかり醉がさめてゐたので、私の顏を見るなり、首をすくめて、さも〳〵きまり惡さうにお世辭笑ひをして逃げてしまつた。

二三日前の晩は、私は十二時ころ湯に行つたが、その大工さんは酒に醉つて快ささうに湯の中に眠つてゐた。

それからなほ二時間も大工さんは風呂場に眠つてゐたさうで、夜中に若い弟子がゆりお

こして宿につれて行つたといふことであつた。

今日は建て前だといふので朝早くから、その大工さんも若い男たちを指圖しながら、仕事場を駈けまはつてゐた。

一つの新らしい家が建つといふものは、はたで見てゐても氣持ちのいゝものである。私は小半日建て前を見てゐた。

今日はうんと飲めるだらうと思ふと、その大工さんの顏を見るごとに笑ひがこみ上げて來るのであつた。大工さんは私を見てはうれしさうに笑つてゐた。

旅から旅と一生その大工さんは家を建てゝ歩くのであらう。そして立派な家が建てられてしまつたころは、またさらに新らしい家を建てるために、どこかに旅しなければならないのであらう。大工さん自身は一生自分の家も持たないで、たゞ幾らかの酒に生活の幸福といふ幸福を見出し得てゐるやうに思はれる。

午後になつて急に山の中の溫泉町の靜寂を破るやうな陽氣な唄の聲が聞えたので、私は障子を明けて見た。

建て前の振舞酒に醉つた男たちが、てんでに一升德利だの、重箱だのを提げて前の山を

登つて行くのであつた。例の大工さんが眞つ先きに、さも〳〵うれしさうに酒德利を抱へこんで山を駈けのぼつて行つた。

花は滿山を埋めるばかりに咲いてゐた。大工さんが手を振つて踊りながら、花の下を上つてゆく姿がいつ迄も見えてゐた。

仕事と生活の幸福の一致、創作卽幸福、Joy を伴つた Work、私はウイリアム・モリスの藝術論を考へて見たり、或ひは人間の幸福はどこに在るのか、幸福とは何ぞや、などと色々のことを考へながら、山をつゝんでしまつた雲のやうな櫻をながめてゐた。

×

數日前までは普通の雜木だくらゐに思はれてゐた山の梢といふ梢、枝といふ枝には花が咲いた。

この春は吉野の花を見たいと思つてゐたが、こゝの名もない山の花を見て今年は自分を慰めることにした。

花の山は朝と夕暮れがいゝ。殊に小鳥らの聲もひつそりと絕えた夕暮れの薄暗の中に雲のごとく湧いた花を眺めてゐると、旅といふもののうれしさも寂しさも犇々(ひしひし)と迫つて來る。

眺めても、見ても、眺め飽かぬ花の山は、かへつて無常寂滅の感を深くせしめる。如月の花の下で死なんことを冀うた西行の心持ちは靜かな夕暮れの花を見る人々には幾分理解せらるゝことであらう。

寂寞を愛する詩人は花を愛する。

「吉野にて櫻見せうぞ檜木笠」（芭蕉）

櫻ほど美しく、櫻ほどあはれなる花はないといふ感じは、旅の春において一層強く胸に響いて來る。

十代、二十代のころ見た櫻は懶さや、甘美な憂愁を誘うて來た。今日見る櫻は人生そのものについての無常感を喚びさまして來る。

蜜蜂は一つの花瓣からさらに一つの花瓣へと蜜をあさつてゐる。小鳥は花から花へと梢をかへ、枝をかへて轉つてゐる。「身を分けて見ぬ梢なくつくさばや」といふ西行の心も、花瓣から花瓣へ、花から花へと春の山を駈けめぐる蜜蜂や、小鳥の心ではないか。小鳥らは人間より幸福でないと斷言することはできない。

「野の百合を見よ」といふ言葉は譬喩ではない。人間のすべての智慧を盡した生活よりも

小鳥の自然の生活の方がどれほど幸福であるか知れない。

×

またひどい雨が朝から降りつゞいてゐる。二三日夕燒の空を見ることもできない。

河鹿だけがしつきりなしに崖の下で鳴いてゐる。

夜具を冠つて寢て見たが、流れの音がはげしくなつたので、どうしても眠れない。枕を替へて見たが、やつぱり水の音が氣になつて眠れない。

机の上から繪葉書を出して旅のたよりを書く。

小學に通ふ以前からの幼友達の長崎のUへ。たよりを書いてゐると、三十年前の故郷の春のことがはつきりと浮かんで來る。

對馬(つしま)の兵營生活で一緒になつた大村のMへ。丹後のMへ。大井川の友Yへ。

明りを消してもどうしても眠れない。

再び明りをつける。

大隅のI先生に手紙を書く。

球摩川(くまがは)のほとりの奥さんやお子さんと別れて、大隅の寒村に或る一人の女と寂しい生活

を送つてゐる詩人らしいI先生のことがいろ〳〵に思ひ出される。
教會の反逆者であり、異端者であるI先生は私にとつて一番忘れられぬ人である。
去年私が霧島に行つた時、I先生はわざ〳〵大隅から山まで逢ひに來てくだすつた。私たちは二十年振りで逢つた。私たちは霧にとざされた處女林の中を歩きながら語つた。先生は昔のまゝの詩人であつた。
私は自殺をしたTの叔父のことを思ひ出した。世を厭うて種子島に隠れてしまつたのであつたが、今ではもう恐らく地下の人になつてゐるかも知れない。
妻の祖母のことを思ふ。かの女も行方知れず世を捨てゝしまつた。
人間が住んでゐるかぎり、そこには屹度寂しい詩人が生きてゐるであらう。Tの叔父のやうな心の美しい人が生きてゐるであらう。どのやうな深い山にも、寂しい村にも。

×

かつて私の周圍に集まつて來た若い人々のことを思ふ。
いつの間にか私はたゞ一人で立つてゐる自分自身を見出さなければならなかつた。
かつて私は、ほとんど私のすべてを投げ捨てゝまで或る人々のために働かうと考へたこ

ともあつた。しかし私は今ではその人々とすらまるで敵のやうに別れてしまはなければならなくなつた。

人間の愛憎の念ほど不確かなものはない。

兄と弟とすら明日は争はなければならぬ。戀人と戀人とすら明日は呪ひ合はなければならぬ。友と友とすら明日は憎まなければならぬ。

かつて愛することの深ければ深いほど、かつて信ずることの强ければ强いほど友はその友を强く憎まなければならぬ。

私たちは、いつたい、誰を信ずればいゝのだ。誰を賴ればいゝのだ。このやうな歎聲も洩らしたくなる。

結局自分一人だ。自分一人を强くするより他に途はないのだ。弱くなつてはいけない。自分の途を塞がうとする者の殖えるごとに、自分は一層力强くならなければならぬ。

人を憎むことは恐らく人を愛することと以上に苦しいことであらう。けれども自分は敗けてはならぬ。妥協に落ちてはならぬ。

なまじつかな愛よりは、ぢつと淚をこらへた憎みの方が、どれほどかれを生かし、自分

を生かしてくれるか知れない。

×

或る人にとつてAはたしかに善人であるにちがひない。
或る人にとつてAはたしかに惡人であるにちがひない。
人間であるかぎりはAはたしかに善人であり、惡人である筈だ。
或る人にとつてAはたしかに正直な男であるに違ひない。
或る人にとつてAはたしかに嘘つきであるに違ひない。
人間であるかぎりAはたしかに正直な男であり、同時に嘘つきであるにちがひない。
或る男はすべての人の前に惡人であつたかも知れない。けれどもかれは神の前と、その妻や子供の前だけでは善人であつたかも知れない。
人は何故に人を憎まなければならぬか。
憎まるゝことは心寂しいことである。けれども時としては憎まるゝといふことはその人にとつて名譽なことである。イブセンの作にあらはれて來る主人公はたいてい世俗の憎まれ者であり「人民の敵」であつた。

自分一人の力で生きて行かうとする人間、自分自身を誰にも奴隷となすまいと思ふ人間、いつも自分を自分の主として生きて行かうとする人間、自分で自分を辱しめることをしない人間、自分で自分を僞ることをしない人間は、世間の人たちからはストツクマン博士の立場に置かれなければならぬ。

幸福は「人民の敵」のある印刷屋のやうな日和見の人たちのみが持つことのできるものである。ストツクマン博士に與へらるゝものは生活の脅威や、忘恩的な町の人々の石のみである。

憎まるゝもの丶生活、敵視せらるゝもの丶生活のうちにのみ眞理を愛するもの丶生活がある。一人の力で生きて行かうとする強い人間の生活がある。

×

こなひだ橋の上で酒好きの大工さんに首を摑まれてゐた黑い犬のことを、湯の町の人たちは黑と呼んでゐる。

黑はちよつと風がはりの犬である。こゝの町には家の數に比べて犬の數が多い。いろいろの犬が旅の人たちに馴れては菓子を貰つたり、牛肉を貰つたりしてゐる。

黑は拗ね者とでもいふのか、誰を見ても尾を一つ振ることもしない。無愛嬌な犬である。そんな風で自然誰にも可愛がられない。人間に對してのみならず、同じ犬仲間でも受けがよくないのか、よく大きな犬に嚙まれてゐる。無論宿無し犬である。

けれども黑にも時折は味方ができる。かつては、こゝの町に働きに來てゐた大工さんの群が、黑びいきになつて、どこかの犬を咬ませたといふので問題になつたこともあるといふ話である。またいつかは東京から養生に來てゐた鳳の弟子の何とかいふ力士が、黑を可愛がつたといふ話である。この頃では黑は每日のやうに私たちが散步をしてゐるのを見つけてはうしろからついて來る。少しも菓子を喰べない犬だから、せつかく家までついて來ても喰べさせるものがないので困ることがある。肉なんどをやつても、別に尾を一つ振ることもしない。可愛がりばえのしない犬である。

それでも夜遲くなつてから、私たちの玄關で吠えてゐることがある。自分ではいつぱし忠勤をはげんでゐるつもりであらう。

からだは無論のこと、爪の先まで眞つ黑な犬で、ちよつと見たところでは穴熊のやうな日本犬である。

町には非常に悧巧な洋犬もゐる。人間で言へば、人の眼顔を見ることの上手な方であらう。媚態を巧みにする犬である。そしてどこの家へ行つても尾を振つてゐる。しかし私はそんな犬よりか無表情な黑が好きである。

このころは洋犬のやうな感じのする才人が多くなつて、黑のやうな無表情ではあるが、どこかに節操を持ち、情味を持つた人間がすくなくなつたやうに思ふ。

×

天城の御料地が直ぐ川の向うに横たはつてゐるやうな土地だから、たいていの犬は獵期になれば思ふ存分に野山を走らせられるのであらう。とても獵には役立たぬやうな犬までもが獵師の先に立つて山を上つて行く。

町に遊んでゐる時は、いかにものそくさして、自分自身のからだ一つを持てあつかつてゐるやうな犬までが、一度山道にかゝるといかにも嬉々として草を分けて走つてゐる。

私はよく雜木林や草山を步くが、そのやうな時、溫泉町の犬の仲間が林の中や草の中をいかにも樂しさうに遊びまはつてゐるのを見ることがある。太古、かれ等が山に住んでゐたころの自由さが、ふたゝびかれ等の血管の中によみがへつて來るからであるかも知れな

い。まつたく、山を遊んでゐる犬の群は愉快さうである。

私は或る日、山の中に遊んでゐる犬の群を見てバアンズの“Twa Dogs”を思ひ出したことがあつた。

“Twa Dogs”は大地主の飼犬と、貧乏な小作人の飼犬とがたま〳〵連れ立つて小山に上つて行つて、大地主の專横さや、贅澤な生活や、代議士といふもの〻だらしなさや、小作人の氣の毒な生活やについて語り合ふ。どゞのつまり、われ〳〵は人間に生まれなかつたことを喜ばなければならぬといふ結論になつて、二匹の犬は樂しい一日を山上で遊んで再會を約して家に歸るといふ筋の詩であるが、こ〻の山に遊んでゐると犬の仲間を發見するたんびに私は“Twa Dogs”を思ひ出す。バアンズの詩はユウモラスな味を含ませて書かれてあるが、實際山で遊んでゐる犬を見てはじめて“Twa Dogs”の詩の味がわかるやうな氣がする。

×

山の子供たちは半里、一里、時としては二里も歩いて學校にゆかなければならぬ。ちよつと見たところではいかにもぼんやりしたやうに見えるが、それでも實際は夜明け方の水

のやうな空の色に對しても、かけすや、鶯の鳴き聲に對しても、消え殘つた山の雪に對しても、かれ等の歸路を照らしてゐる夕燒に對しても細かな感受性を持つてゐる。かれ等はいかにもそれ等の自然の恩惠の一つ一つを靜かに感受してゆくかのやうに、道傍の可憐な草花を摘み、天城の空を流れた鰯雲を仰ぎながら、山を上つて行く。いかにもゆつたりとした足どりで、歌もうたはないで。

都會のあわたゞしい渦卷のなかに生きてゐる子供たちにとつては、學校生活はむしろ少年の生活そのものではなくして、オブリゲーションであるやうに思はれる。子供たち自身が中學に入るため、大學に入るための不可避的なコースであると覺悟してゐるやうに思はれる。

山の子供たちにとつては一里歩み、二里歩いてゆかねばならぬ學校は、少年時代の自然生活そのものであるやうに見える。言ひ換ゆれば、學校生活はかれ等にとつて灌佛會にお寺に甘茶を貰ひにゆくと同樣なよろこびを與へてゐるやうに思はれる。

學校生活ばかりではない。ほとんどすべての生活行爲が都會ではほんたうの生活でなくして、オブリゲーションになつてゐる。都會人の生活は、生活の滋味を失つてゐるものが

多い。したがつて都會では生活そのものが、よろこびでなくして、苦痛である場合がすくなくない。

村はづれの若い理髮師が花嫁を迎へたゝめに村の人たちは二日間といふものはほとんど仕事を休んで、花嫁と花婿のために駈けずり廻り、飮み、うたつてゐた。

その翌日は、去年產後間もなく桑を摘みに行つて死んだ若い女のために、村の女たちは法事の支度をした。

夕方私はその不幸な女の家の前を步いてゐた。ほとんど村中の女たちが薄暗い明りの下に集まつて、たゞ一人の坊さまの讀經を聽いてゐるのを見た。

都會では仕事の能率といふことがやかましく言はれる。人は生活を享樂し、生活の味を嚙みしめるために生まれた筈であるに、都會では仕事の能率が第一に算へられて、生活そのものは第二義第三義的のものゝやうに見做されてゐる。

こゝでは人々は隣人と共に生きるために生き、隣人と共に人間の生活を享樂するために生きてゐるやうに思はれる。

「花が咲きました。」
「もう雲雀(ひばり)が鳴きました。」
「美しい夕燒です。」
「早蕨が出ましたよ。」
「まだ雪が天城には殘つてゐます。」
かう言つた自然の移り變りに對するきはめて平凡ではあるが、かれ等の人間生活にとつて最も本質的な關係を持つてゐる筈の自然現象に對して、山の人々の神經は銳敏に働いてゐる。

ともかく山の人々は自然が與ふる生活のよろこびをそのまゝに受け容れ、自然が與ふる生活の悲しみをそのまゝに嚙みしめてゐる。かれ等は都會人のやうに、仕事のために、能率のために、人間の生活の味を鵜呑みにするやうなことをしない。

hosp tality といふ心が山の人の生活には生きて働いてゐる。久しい間の都會生活の渦の中に硬化しかゝつてゐた私たちの魂も、少しく氣をつけて山の人々の生活に浸されてゐる間に柔められ、素直(すなほ)さを取り戻す。

かりそめの生活表現をも、無關心では pass over させないといふ生活に對する丹念な注意力をまとめて把持してゐることは大切な事である。

然るに私たちの過度に煩雜な都會生活の結果は、私たちをしてともすれば一つ一つの生活表現に對して、きはめて稀薄な注意力しか持たせなくなる。

人は隣人との共助的生活によつて勵まされ、強くせられなければならぬ筈であるに、私たちの都會生活では私たちは隣人との生活によつて根氣を痲痺せられてゐる。だから私たちは隣人を待つべきであるに、隣人を避けようとつとめてゐる。隣人を避けることによつてわづかに生活の休息を見出さうとしてゐる。都會では生活は苦痛そのものとなつてしまつた。

山の人々の生活を見てゐると、生活に對して丁寧であることに氣付く。たとへば一枚の葉書すら、すくなくとも一里或ひは二里の山道を運んで來る男の手によつて傳へられなければならぬやうな山の生活に於いては、一枚の葉書を讀むことに對しても、書くことに對してもとても都會の人たちが想像もしえないほどの感謝なり、よろこびなりが潛んでゐる。わづか一合か二合の振舞酒に招かれるといふことに對してもいひやう

もない感謝が湧く。

一つ一つの生活表現が、生活の諸相が、山の人々の心には丹念に受け容れられ、咀嚼せられてゐる。

人間の生活を丁寧に、丹念に噛みしめてゆくことのできる生活は羨ましいと思ふ。

×

今日あたりは山の花は滿開であらうと思つてゐたのに、生憎の雨が朝からぽつり〳〵と降つて來た。

午後からは嵐を誘うて大粒の雨が地を叩きつけた。刻々と河の水量は增して行つた。河原の石が隱れ、崖がくづれ、水は濁つて、物凄いほどに石を打つ音が聞える。村の人々は橋が危いといふ。

私たちが住んでゐるところは別莊風の家がたゞ八九軒あるばかりで、そこには一軒の店もない。卵一つ買ふにも橋をわたつて向う岸まで行かなければならぬ。もし今夜にも橋が落ちるとすれば、まつたく村とは交通が杜絕えてしまはなければならぬ。食糧にも困らなければならぬ。

雨も風も刻々に勢を増すばかりである。つい十間ばかり先きの家も見えなくなるほど激しい雨の脚が、花を叩きつけ、土を蹴上げては、草山を斜に奔馬のやうに駈けてゆく。
私は外套を引つかけて風呂敷を抱へて橋をわたつて湯の町の方へ出かけて行つた。町には人つ子一人見えない。犬の影すら見えない。宿屋といふ宿屋は深く戸をとざしてしまつて、風呂場を覗いて見ても誰もゐない。
私は店の戸を叩いて、卵だの罐詰だのを買つて歸る。幾度か傘を風にとられさうである。山を叩きつけて、さらに次の山へと走つて行く雨嵐の脚を見てゐると恐ろしいやうである。天城も、裾の山も雨につゝまれてしまつて眞つ暗である。今にも山が崩れ、山つなみがこの湯の町を一と流しに押し流してしまふのではあるまいかなどと考へる。
もし橋が落ちて、食ふ物もなくなつたらどうしよう。私はどしや降りの雨の中を歩みながら、こんなことを考へた。不圖去年の大地震の折のあの不安な日夜のことが思ひ出された。同時に今まで疲れてゐたやうな私の心が急に引き緊つて來るのであつた。
あの數日夜だけは私たちの心はほんたうに生といふことに對して眞劍に燃えてゐた。はげしい搖りかへしの最中に色々な流言が傳へられた。二千の囚人が監獄を破つて出

た。三百の暴漢隊が次の部落まで襲つて來た。一方に於いては恐怖に囚へられながらも、一方に於いては自分の力に對して、或ひは弱い女や子供たちを保護するといふ勇氣に對して或る涙ぐましい感激を持つことができた。

あの恐ろしい震災の日夜に感じた悲壯な感激に似た或る心持ちが、橋を渡つて行く私の心に再び燃えた。

橋を渡りつくした袂のところで、私は不圖或る一人の男が崖の下の水溜りに吐き口を拵へて、道を壞すまいとしてゐるのを見た。私は何だか見覺えのある男だと思つて立ち止まつてその男を眺めてゐた。

こなひだ駐在所で、「一生監獄から出られないやうにしてやるぞ」と叱られてゐた男であつた。

×

日が暮るゝにつれて、嵐はます〳〵烈しくなつた。いまにも屋根は叩き潰されはしまいかと思はれた。嵐はうなりながら、雨を叩きつけて行つた。崖を落ちる石の音が雷のやうに響いた。

その凄まじい嵐の中に、私は悲しさうな犬の聲を聽いた。私は戸を明けて見た。

黑が玄關に飛び込んで來た。そしていかにも嵐を恐るゝかのやうにくん〳〵と鼻の先きで泣くやうな聲をした。かれはわな〳〵と顫へてゐた。そして吼ゆるやうな嵐が家を叩きつけるたびにくん〳〵と訴へるやうな聲を絞つた。

夜の二時ごろであつた。どうしても眠れないので私は玄關に出て見た。黑は玄關の硝子戸の中にはいつて、板張りの上に丸くなつて寢てゐた。

「黑ツ！」と私は聲をかけた。黑は私の顏をぢつと見てゐた。が、急に左の前脚を突き出して、私の膝に投げかけるやうなことをした。恰度仔犬がふざけるやうな可憐な態で。あまりその態が可笑しかつたので、私はつい笑ひ出してしまつた。

黑は今度は右の前脚をによきんとまた私の膝の上に投げかけた。

戸外では崖の石の落ちる音が絕えず雷のやうに響いてゐた。

恐ろしい嵐のうなり聲の下から、河鹿の聲がかすかに聞えてゐた。

荒都の中

S兄、H兄。

昨日は不在中に立退き先をお訪ね下され、まことに失禮いたしました。

實は一日の大地震以來行方不明になつてゐます家内の母が、負傷をして何處かの病院に收容されてゐるらしいといふ消息を、昨朝或る人から傳へて來ましたので、急に勇氣を奮つて神田佐久間町から上野、飛鳥山方面をたづねまはりまして、夜になつてまたいつものやうに絕望と疲勞を抱いて歸つて來ました。

S兄、H兄。

原稿を送れとの仰せでございましたが、とても、左樣な次第でこの際何も書く元氣はありません。

一日以來十餘日、私たちはたゞ一人の老母を探すために、全身の精力といふ精力を盡してゐたのですが、のみならず、突然、家を追はれた爲に母を探す一方では、雨露をしのぐ

べき家を探さねばならず、一粒の米をも持たずに家を出た私たち夫婦は、その當座は一食一食ごとに街をさ迷うて、路傍に十錢のうどん一杯を分ち食はなければならぬ有様でした。

朝、假の家を出て、終日本所、向島あたりをさ迷ひ、日が暮るれば疲れ切つた妻を叱りつゝ一つの風呂敷包みをかゝへて（その中には買ひ集めた梨子だの野菜だの五六箇の鷄卵などを入れてあります）あたかも放浪者のやうに戒嚴令の布かれた町をさ迷ふのでした。「何處に行つて泊らう？　母はどこに行つて死んだのだらう？」私たち夫婦の頭にはたゞこの暗い二つの思ひのみがこびりついてゐるのでした。

妻は往來に立ち止つては時々すゝり上げて泣くのでした。

一枚の襦袢だに洗ふことは今では不可能です。私はいつもたゞ一枚のシャツと、ズボンだけで燒土と化した荒都の中を、さがしもとめて歩いてゐます。妻はいつもたゞ一枚の浴衣だけでのろい足を引き摺りながら私に叱られつゝ歩いてゐます。

もう今日で十一日になるんです。母は恐らく死んだでありませう。しかし今日も探しに出ます。妻は被服廠の跡をたづねたいと言つてゐます。しかしどうしてあの三萬幾千といふ凄慘な死骸の山を妻に見せられませう。

私はいやといふほど人間のあさましい心を見せつけられました。殊に富める人々の醜い心を。

同時に貧しい人々の美しい心を見ました。一つの握飯を二つに分け、三つに分けてゐる貧しい人々を見ました。罹災者たちは、自分等の苦しみを忘れて人のためにつくしてゐます。飢ゑ疲れて燒地の上に寢てゐた男は、がばと起き上つて傍にゐた人の荷車の火を消してゐます。

S兄、H兄。

今日も今から妻をつれて母をたづねに龜戸の方へ出かけますので、不在、失禮をします。死んでゐるにちがひありませんが、まだあきらめられませんので。

そのやうなわけですから今度は原稿のことは御免し下さい。

いづれ家を探して、決定次第お知らせいたします。

私は昨夜はじめて母の夢を見ました。母が一人で暗い町を歩いてゐるのでした。

庭の隅の小ひさな花

ほとゝぎすが鳴いた
男は女を起した
靜かな夜が雨戸の外に、暗い部屋の内に。
女のかすかな眠りの聲が。
今地上には二つの魂が相擁しつゝ眠つてゐる。
男はふたゝび眠さめた。
ほとゝぎすが鳴いた。
男は女の柔かな息づかひに聽きとれた。
かれは考へた。
「二十年の後、十年の後、或ひは明日、妻はその夫から、夫はその妻から永遠に別れなければならぬかも知れない。」

「二十年の後、或ひは十年の後、妻も、夫もこの地上から永遠に失はれなければならぬかも知れぬ。」

女はなほ眠つてゐた。

「二十年の後、三十年の後、たしかに二人とも永遠に別れなければならぬのだ。」

男はどうしても眠れなくなつてしまつた。

×

輜重輸卒に召集されたために女と別るゝのがつらくて、女を殺して、自殺をした思慮を缺いた男がある。

こんな新聞の記事を讀んだら、教育ある男や都會の賢い女たちは恐らく笑ふだらうが！

×

Aよ、君は僕があの時以來君を憎んでゐると思ふか。

時として僕はどこかで君とたゞ二人だけで打ち解けて語つて見たいと思ふことがある。

しかし君が、僕をたづねて來ない以上、恐らく僕は君を一生たづねてゆくことはあるまいと思ふ。

僕は少しも君を憎んではをらぬ。
君ほど美しい心の人間がこの世界にさうざらにあらうとは思はぬ。
しかし僕はこのまゝ或ひは一生君と打ち解けて逢ふ機會はないかも知れない。
こなひだも實は君が川向うを歩いてゐたのを見つけたんだよ。僕はよつぽど聲をかけようかと思つた。しかし僕は自分の弱い心を叱つてそのまゝ傍を向いて行き過ぎてしまつた。
僕は一町ばかりも歩いてから振りかへつて見たが、もうその時は君はゐなかつた。
僕の心のうちではまつたくすまないと思つた。そして頭を下げた。
君のやうな美しい人間と、憎み合つたまゝ死ぬのは寂しい氣もする。
けれど、それがまたばかに英雄的なことであるやうな氣もする。
僕を憎んでくれ。僕も憎まう。

×

いゝ加減なおつきあひくらゐいやなものはない。
ほんたうにお互が心から自分を投げ出すほどの接觸でないならば、人は孤獨を守つてゐた方がいゝ。

人と人との接觸のうちで、人を利用せんための接觸ほど不愉快なものはない。
人間の心の泉は一つである。
或る人はその心に萬人の影を映すであらう。
或る人はその心にわづかに一人か二人の影をのみ映すであらう。
孤獨を守る者の心は後者に屬する。
いゝ加減なおつきあひの萬人を得んよりは、たゞ一人の心友を見出し得んことを冀ふ。

×

所謂天才は多い。才氣ある人は多い。
愚なるが如き君子の出現は今の世に望むべからずとしても、せめて愚なるが如き人間がもすこし多く世にあらはれてもいゝと思ふ。あらゆる社會の方面に。
天才教育といふことも結構であらう。しかし果して人間が人間を作り得るか、大きな疑問である。人間によつて作らるゝ人間がどんなものであるかといふことは、都會の子供たちを見る時一番よく考へさせられる。

×

かつてあれほど信じ合つたものが、幾年かの後にはこれほどまで憎み合はなければならぬのか、憤らなければならぬのかといふことを考へるたんびに、「いつたい私たちは誰を信じればいゝのだ」と喚きたくなつて來る。

一生懸命に人のためを思ふのが馬鹿だといふ人もある。けれどもいゝ加減ではどうしてもすまされない場合がある。もしいゝ加減ですまされなければならぬのが人生の常軌であるとするならば、人生くらゐくだらない世界はないであらう。

自分のすべてを投げ出してかゝつた結果が、いゝ馬鹿を見たといふことになれば、まつたく人生に對して失望したくなることもある。

人間はだん〳〵年をとるにつれてごまかされなくなるが、それは一面から見ればかれがそれだけ人生に對して最初から眞劍になることができなくなつたといふ證據である。かつてかれが抱いてゐた人生の光りが薄らいで來たといふ悲しむべき證據である。

一生、ごまかされても、裏切られても人生に對して何等かの光りを持つことのできる人は仕合せである。キリストだの、釋迦だのといふえらい人々は、恐らくそんな種類の人たちであつたのであらう。しかし私たちのやうな凡夫にはなか〳〵それができない。一日一

日と自分の心の殼が堅くなつてゆくのが意識せられる。外部から來る意識の一つ一つを素直に受け容れることがすくなくなつて、先づ疑ひ、先づ批判してかゝるやうになつてしまつた。

悲しいことであると思ふが、元々の素直さに立ち還りさうにもない。

×

敵を持つことのできない人間はお人善しではあるかも知れない。けれど、味方として賴もしい人ではない。

不正直な人間、卑劣な人間、噓をつく人間、殘忍な人間に對しては私たちはどこまでも敵でなければならぬ。そのやうな俗人に對してはどこまでも敵でありえなければならぬ。

生ぬるい愛といふことよりも、鐵のやうな憎み、火のやうな鬪ひといふことが、ずつと英雄的な場合がある。

眞劍になつて人を憎み、人と鬪ふことの如何に苦しいかといふことが、そしてそこに生きてゆくことのうちにいたましい唯一つの眞實の道があるといふことが、このごろ、かすかながらも意識されて來たやうに思ふ。

×

ほとんど忘れてゐたに、いつの間にか庭の隅から月見草が咲き出した。

夏が來ても、夏が來ても、かれ等は同じ庭の隅から、何の不平もなく同じ花を開き、同じ柔かな色を見せてくれる。

朝早くまだ庭には露がしつとりと眠つてゐるころ、不平もなく、憎みもなく咲いてゐる花を見るとおのづから頭が下るやうな氣がする。

かれ等には不安はないのか。不平はないのか。人間のみが夜も晝も妄執の炎に心を燒かなければならぬのか。

朝の微風が、朝の露が、憎みに燃えた私の心を大地そのものゝ、冷たさと靜寂さとにもどしてくれる時、私は憎み、憤りつゝ生きてゆかねばならぬ自分の生活をいたましく思ふ。

庭の隅の小ひさな花は今朝も不平なく憤りなく咲いてゐる。

落葉を聽け

この數年來はつきりとした形は捕へられなかつたが、いまにも何か知ら大きな社會的變革が來るであらうといふ不安はたいていの人々の胸に兆してゐたことであらうと思ふ。はたして恐ろしい社會的變動が突發した。ほとんど豫期しなかつた形で、しかも豫想さへゆるさないほどの悲慘さ、殘忍さをもつて。

私たちはあの華やかであつた都市の中にあのいたましくも燒けたゞれたる幾萬の死屍を見、炎に追はれたる幾十萬の人々を見ようなどと何うして想像することが出來よう。

九月二日の午後であつた。私は駿河臺の燒跡に立つて、なほ燃えつゝある東京を見てゐた。くづれた崖に沿うて二人の女が二三枚の燒けたトタン板を運んで小屋を作つてゐた。一人は老人であつた。老人は口汚く若い女を叱りつけてゐた。老人はすでに發狂してゐたのであつた。

日は暮れかゝつた。お茶の水橋は燃えつゝあつた。私は振りかへりながら滅びゆく東京

を見た。芝から京橋、日本橋、神田はすでに燃えてしまつてゐた。聖堂の下や、柳原附近ではまだ盛に餘燼の間から時々爆音と共に黒い煙が噴き上げられてゐた。深川や本所は煙にさへぎられて見えなかつた。藏前や下谷方面はさかんに燃えつゝあつた。

ボール紙で足を包んだ上をぎり〳〵と藁繩で結んだ女たちが、男に扶けられつゝこの世の人とも思へぬほどの顏色をして、喘ぎ喘ぎ本郷の方へ燒跡の道をたどつて行つた。十五六歳の女が私の直ぐ前に倒れたかと思ふと、もうすでに死んでしまつてゐた。荷車の上には荷と一緒に二人の子供が顫へながら寢てゐた。東京の山の手の燒けのこつた道といふ道へは踵を接して、火に追はれ、死に脅かされた人々が潮のやうな群をなしてまるで痴呆のやうな眼を瞠いたまゝ機械的に歩いてゐるのであつた。

ゆりかへしは頻繁に襲つて來て私たちの心臓を衝くのであつた。親を失つた者、子を失つた者、妻を失つた者、殊に甚だしいのは三十幾人の家族を失つた人すらあつた。そのやうな人々が、あのやうな場合に人間の心に頭を擡げて來るあきらめといふ最も悲しむべき一念にせめてもの心のやりどころを見出して、焦土の中に路をたどつてゆくのであつた。

馬も死んでゐた。人も死んでゐた。人々は醜く焦げ黒ずんだ人間の死屍を橋の袂にも、

川の中にも見飽くほど見なければならなかつた。たいていは幾百といふ死體がトタン板一つかけられないで一緒にかためられたまゝ、あすこにもこゝにも虚空を摑んで倒れてゐた。

空には恐ろしい炎が私たちの視野を埋め、地には死屍の間を縫うて、死におびえた大群衆が恐怖に追はれつゝ歩いてゐた。煉獄とはこんなところであらうか。恐らくこれは地獄以上のあさましさであらうなどと考へながら私は立つてゐた。

狂人と狂人でない人との差別はほとんどつかなかつた。たれもが比較的落着いてゐたと、同時にたれもがほとんど痴呆のやうな眼を瞠いたまゝ歩いてゐた。何かしら人間力以上の或る偉大な力の前に、すべての人間が一つとなつて引き摺られ、鞭打たれつゝあるのだといふやうな考へが、私たちの胸に抱かれてゐた。

人生の同勞者といふ考へがあの時ほど強く私たちの胸を打つたことはないであらう。そこには道徳はなかつた。かうすることが善いことだといふやうな概念から出發した行爲はなかつた。そこには道德以上のものが生きてゐた。人々は三日二夜の絶食と恐怖と戰慄(せんりつ)とに疲れ果てゝ、すでに歩くことすら容易ではなかつた。それでも人々は同勞者のために人間のなし能ふかぎりの力を盡し、犧牲をはらつてゐた。たゞ人々は生きてさへゐればよか

つたのであつた。お互ひが生きてゆくことさへできれば、それだけでたくさんなのであつた。

そこには幾多の醜い、あさましい獸的な心のあらはれも生きてゐたであらう。私たちはたしかに多くの醜い實例を知つてゐる。けれどもまたそこには、それ以上の美しい人間の心のあらはれも生きてゐた。

一人の男は、その子の全身を（頭だけを出して）土に埋め、その上に妻を這はせ、夜を徹して土を妻の上にかけて燒死を免れさした。男の爪はそのために落ちてしまつてゐた。

私の知人の家の或る忠實な乳母は、二人の少年を抱いて火の中に倒れつゝもなほ少年等を救うて被服廠から兩國まで走つた。かの女は全身を燒かれて間もなく死んだが、二人の少年は微傷一つ受けないで助かつた。

人間が本來、利己的な一面を持つてゐることも眞實である。同時に人間は自己を殺して人を救ふ美しい心をも持つてゐる。たとへ千人萬人の人が醜い心をあらはにしたとしても、一人或ひは二人、或ひは三人の人がこのやうに美しい心をあらはしてくれたゞけでも、私たちは人間であることのほこりを感ずる。

このたびの大震災で最も端的に私たちの胸を打つたものは、人間の生死に對する觀念であるべき筈であるが、何故かは知らぬがそれよりも先きに人間同志、人間同勞といふ觀念の方が強く私たちの心を動かしてゐるやうな氣がする。

見も知らぬ人々が被服廠の跡に行つて香華をさゝげて涙を流してゐる心の底にも、すでに人間同勞といふ感じが動いてゐる。さらに生き殘つた人と人との間に交流してゐるところの仲間或ひは苦しみを共にする人といふ感じが、今日ほど強く實感として私たちの心を刺戟することは、かつてなかつたであらう。

今まで私たち、ひとりひとりの心の殼のなかに生きてゐた自分といふものが、自分ひとりの世界にのみ住んでゐようとするためには、何等かの良心の叱責を感じないではをれなくなつたといふことは事實である。

極端に言へば、人間が自分ひとりで生き、自分ひとりの世界に住むといふことは正しいことではないといふ感じが、私たちの心に今日ほど強く實感的に動いて來たことはないであらう。

私たちはやゝもすれば、自分は自分ひとりで生きてゐると考へることがある。よし一歩

をすゝめて、私たちがかつて個人は全社會のアトモスフイヤなしには作られないといふ概念は持ち得たとしても、或ひは多少のさう言つた風な感じは持つてゐたとしても、今日ほど直接に明かに、顫動的に、個人は人類なしでは存在し得ないといふ實感が動いたことはかつてなかつた。

自分ひとりでいゝのではない。隣りの人を考へのうちに容れないでは生きて行かれないのだ。ほんたうの生活はないのだ。たとへ自分ひとりで生きて行かうとしても、私たちの周圍には私たちを惹きつけないでは置かぬところの或る叫び聲がある。呻きがある。人間全體の苦しみがある。壓しつぶされた屋根の下から私たちの救ひを求める人間の呻き聲がある。妻を失つた男の號泣がある。歔欷がある。

人間の心と心が今日ほど強く有機的に結び付いて何等かの形で人間全體のために新しい世界を創造しようとした時代がかつて存在し得たであらうか？

無論そこには、個人々々の意識がいつもより強く、はつきりと動いてゐることも事實である。同時に個人々々の忍耐、獻身、努力といふものが全人間と有機的に結びついてゐるのだといふ意識、希望、憧憬、信念があやふやのものでなく、實感として燃えつゝあること

とも亦事實である。

×

私はロシヤ人の長い間の民族的苦惱について、今日までよりは一層はつきりと想像することができるやうになつた。恐らくロシヤ人は民族として十八世紀に於いても、私たちの想像もゆるさないほどの幾多の人間的な苦惱を一様に經驗したことであらう。私たちが自然の暴力によつて嘗めさせられた苦惱以上の苦惱をば過去幾百年の間に嘗めつゞけて來たのであらう。殊にその被支配階級の人々、農奴の群に於いては父子相傳へて苦惱、忍辱の裡に悲しきあきらめの生活に生くるより他に途はなかつたのであらう。

斷頭臺に追はるゝ死刑囚の群、シベリヤに追はるゝ不運なる囚人の群、過去幾世紀のロシヤ民衆は絕えず城塞の牢獄と、シベリヤの荒野に脅かされつゝ生きて來たのであつた。脅かさるゝ人々の群から同勞同愛の人道的な思想が生まれて來たのはきはめて自然なことである。

トルストイに於いて、ドストイエフスキイに於いて、ツルゲーネフに於いてゴルキイに於いて、私たちは人間全體の意識の上に築きあげられた同勞者的な藝術を見出す。私の狹

い讀書の範圍から覗かれた近代ロシヤの作家の作品に見出される最も明かな、最も太い線を描いてゐるものは、同じ苦惱の下になやめる人々の心と心とを結びつける仲間の觀念である。

無限に廣いロシヤの草原を横切る荷馬車の群は、十日或ひは二十日と草原に起き草原に寢ては自然と鬪ひ、掠奪者から自分等を防禦しなければならぬ。草原を旅するロシヤの民衆にとつて頼るべきはその隣人のみである。人間のみである。

またその傲岸、殘虐な支配者に對して、頼るべきは被支配者の仲間のみである。人間のみである。

ロシヤの自然、ロシヤの政治、ロシヤの地理の影響が主なるものであつたでもあらうが、ロシヤ人くらゐ永く共に苦しみ、共に虐げられ、共に歩み來つた民族は他にないであらう。たとへばゴルキイの「夜の宿」を見、或ひはチエホフの「國道で」を讀んで見て、私たちが第一に感ずることは、そこに出て來る人たちが二言目にはお互ひを罵つてゐる。冷笑してゐる。疑ひ合つてゐる。しかもかれ等はお互ひの不運に對して無關心でをれない。

そこに集まつてゐる人々はどんなに藻掻いても、あせつても一生救はれることのできな

いどん底に落ちこんでゐる。親から子、子から孫へと、かれ等は幸福の世界の光りから遠ざかるのみである。

「日は上り、日は落ちても
こゝぢや日の目も見えやせぬ」

「夜の宿」の門番のクリヴオイ・ヅオバや、帽子屋のブブノフばかりではない。そこにゐるすべての人々が日の光りをあこがれたまゝ、一生日の目を見ないで死ぬのである。首を縊つて死んだあの俳優でも世界のどこかには、かれの狂つた頭を癒すことのできる病院のあることを信じてゐた。世界のどこかにさへ行けば「新しい生活」がかれ等を待つてゐるにちがひないことを信じてゐた。

かれ等はまつ暗などん底の生活にゐても、明るい新生の世界を忘れ得なかつた。自暴自棄の生活に落魄(らくはく)してゐても更生の春を忘れ得なかつた。シベリヤの牢獄の鐘を聽きながらも、復活祭の歌を忘れ得なかつた。

かつて不運なるロシヤの數世紀間の民衆はみなあの首を縊つて死んだ俳優の絶望と憧憬とを抱いて同じやうに日の光りも見ないで死んだのであつた。どんなに沈んでも、落ちて

も一面に大まかな、子供らしい夢を描いてゐたのがかれ等であつた。かれ等はいたましいドン・キホーテであつた。

「國道で」を讀んでも私たちはそこに集まつたところの落ちぶれた地主や、老巡禮や、勞働者や、旅人などの間に釀(かも)されてゐる自暴自棄的な空氣、同時に人のいゝドン・キホーテ式のユーモラスなあたゝかさを見出すことができる。

何十年といふ長い月日の間、かつて自分を棄てゝ行つた女を忘れ得ないでゐる地主や、その不運な落ちぶれた地主のために同情を寄せないではをれぬ周圍の貧しい人々の間では、お互ひの罵り合ひ、お互ひの冷笑し合ふ言葉の底に苦しめる仲間(コムラッド)といふ意識が燃えてゐる。

最初はたゞコップ一杯の酒でも貸さなかつたいつこくな旅籠屋の主人や、盗人のやうに思はれてゐた旅人までが、捨てられた地主に對して心からの同情を寄せて行くといふ心持ちは仲間なればこそ生まれて來るのである。

×

九月の二日三日と、私は兩國橋の袂で幾百といふいたましい人間の屍を見たのを手はじ

めに、龜澤町から江東橋の電車道では、一臺々々のボギー車に滿員のまゝ燒け死んでゐる人々を見た。さらに被服廠の跡で幾萬の死體を見なければならなかつた時、私は神の存在を疑はずにはをれなかつた。「何處に神がある？」私は焦土の上に立つたまゝから叫ばないではをれなかつた。

人々は犬の如く、猿の如く、醜く死んでゐた。蒸され、焦され、打ち碎かれて死んでゐた。幾萬坪の廣場は人間の醜い屍で掩はれてゐた。あの悲慘な光景を見て誰が泣かないでをられよう。誰が神に對してプロテストしないでをれよう。

「神は愛であるかも知れない。けれども神は同時に殘忍であり、憎みである。」私はかうも思つた。

賴るべきものは人間ばかりなのだ。よし、人間の力がどんなに弱いものであるとしても、仲間が集まり、一緒になつて働く時、それは神の力以上の力をあらはし、神の愛以上の愛を持つことができるのだ。私はかうも考へた。

「何のために生きてゐるのだ？」「生とは？」……「夜の宿」の巡禮ばかりではない。この問題は私たちの頭から一刹那も離れることはできない。

色々な科學、色々な哲學、色々な宗教によつて證明せられた人生がある。しかしそれはすべての人生を捉へたものではない。人間は永久に人生のすべてを捉へることはできない。人生は捉へるにはあまりに無邊際である。私たちは何も言はないで人生の前に頭を下げるより他に途はない。

神についても私はやはり同じ考へ方を持つてゐる。神は愛かも知れない。神は憎みであるかも知れない。神は私たちにあまりに美しい人間の心を作つてくれた。同時に神は私たちの手からあまりに無雜作に愛する妻を奪ひ、愛する子を奪ひ、愛する友人を奪ふ。

私は唯物論者の立場からして、全然神を否定することもできない。神が何であるかは知らない。時としては神の存在をすら否定しようとすることもある。

けれどもたゞ一莖の草花にすら神の聲を聽くことができるのではないか。一片の落葉にすら神のさゝやきを聽くことができるではないか。

「地獄とは人を愛し得ざるの苦しみである」といふ言葉は、さらに押しひろげて、「地獄とは神によりて作られたる何物をも愛し得ざる苦しみ」と解することもできるであらう。

有緣といふ言葉は非常に面白い言葉であるやうに思ふ。

私はつい地震ごろまで寄寓してゐた郊外の庭に、この秋ばかりはと思つてコスモスだの、ダリヤだの、菊だのを植ゑて暇さへあれば妻と二人で面倒を見てゐた。地震後急に郊外の家を出なければならなくなつたので何も彼もそのまゝにして出て來たのであつたが、家を出た翌日、私は雨の中を郊外の故の庭に行つて見た。そこには新しい主が住んでゐたが、籬に這はせて置いた夕顔がはじめて花を持つてゐた。しかもそれが心なくも無殘に折られて地の上に落されてゐた。このやうな場合に、花を愛したことのある人々は誰でも經驗するであらうが實際私は泣きたくなつた。

人と人との間に仲間の感激が湧いて來るのは言ふまでもないことであるが、草に對しても、木に對しても、時としては空に對しても、雨に對しても私たちは仲間の感激を持ち得る筈である。

詩人はよく歌ふ。かすかな夜明け方の物の香、ほの暗き野の道、ゆらめく燭、黄昏の街、白日の都市、落葉、新綠、微風、暴風、工場、鐵を斷つ音、死、生、愛、憎、歡喜、悲哀、苦惱、草の葉、小鳥の聲すべてが詩人にとりては有緣の仲間であるからだ。

キリストはよく、子供や、雀や、小羊や、駱駝や、野の百合や麥のたとへを引いて說敎

をした。ルナンが說いてゐるやうに、キリストの生活が最も美しい自然にめぐまれてゐた結果として、ひとりでに自然物を譬喩として持つて來たのでもあらうが、キリスト自身がまた實際に子供を愛し、駱駝や、雀や、雜草にまでも有緣感を持つことができたからであらう。

キリストが最後にヱルサレムの城門をくゞつた時、人々は相競うてかれのために橄欖や棕梠の葉を道に布いたといふのは面白いことである。名譽によつて迎へられず、黃金によつて迎へられず、貧しき人々のホザナと呼ぶ聲と、橄欖の葉を投ぐることによつて迎へられたことは、何といふ美しい劇的な、童話的な事實であらう。

たゞコスモスの一片を愛して見るがいゝ。そこにはソニヤの瞳の美しさもある。そこにはバルバラの不運なる生涯もある。そこには神の愛もある。そこには神の囁きもある。そこには神自身の姿もある。

落葉を踏んで森を步いて見るがいゝ。

そこにはトルストイの深い惱みに刻まれた額がある。あの獅子のやうな眼がある。

そこには「生けるものみな死す！」といふ神の嚴かな聲がある。死！　死！　へと落葉

は落ちる。靜かな死。懷かしい死。すべてのものを愛し、生き、惱み、やがて死なねばならぬ靜かなるあきらめが、靜かにして嚴かなる事實が、私たちの前に展げられてゐる。

森を步いて見るがいゝ。落葉を踏んで私たちは泣くべきか、考ふべきか、叫ぶべきか、祈るべきかを知らない。たゞそこに立ちどまつて落葉を見るがいゝ。

落葉と私。そこにも有緣の紲がある。

私たちは禮拜堂(らいはいだう)に立つて、祈る言葉を知らない。私たちはたゞ神の前にぬかづけばいゝのだ。最も美しい心の嬰兒は言葉を持たぬ。

私たちは森を步む時、言葉を忘れなければならぬ。有緣の實在の世界は言葉を絕したる境にのみ存在する。

私たちは森に入つてたゞ頭を垂るればいゝのだ。

×

愛とは有緣の我が有緣のかれを直覺し得た刹那の歡喜そのものではないか。

愛は歡喜である。愛は歡喜の獻欷(すゝりなき)である。愛はすべての我を、有緣のかれに捧ぐることによつて全くせらるゝ。

ニキタも、ラスコルニコフもドミトリイもソニヤも、私たちにとつて有縁のかれではないか。自暴自棄的な冷笑と狐疑とに充ちた「國道」傍の旅籠屋の陰鬱な空氣も、一人の不運な、意氣地なしの地主に對する仲間の感激が同宿の人々の胸に燃えた刹那に、明るい、溫かいものと變つてしまつた。

有緣の仲間を見出すことの出來ない間は、私たちの世界は冷笑と自卑と絶望とに充たされた牢獄に過ぎない。

私は父を與へられたこと、母を與へられたこと、妻を與へられたこと、兄弟を與へられたこと、友を與へられたことをありがたく思ふ。私はその人々の間に尊い有緣をめぐまれたからである。そこから人生についての斷影を實感することをゆるされたからである。

無論、人間と人間とが相知り、相接するといふことの半面には、私たちが夢想だにしなかつた醜いもの、苦しいもの、切ないものが潛んでゐる。

かつて相愛したるもの、かつて相信じたるものもやがて相憎み、相疑はなければならなくなるといふことは、ほんたうに苦しいことである。しかも憎んだまゝに、呪つたまゝにしてお互が死んでしまはなければならぬといふことは耐らなく苦しいことである。

どんなに努力して見ても、一度傷つけられ、疑ひによつて壞られた心は容易に繕ふことはできない。自分自身の弱い心を叱つて見てもどうすることもできない。

弱い心の人にとつては人生そのものが暗くされて來る。

けれども私は思ふ。かつてかれを信じ、かつてかれのためにすべてをさゝげたといふことだけで、私たちは自分自身を慰め得られる筈だ。

さらに、今日なほかれのために、自分自身の足らざるを責め、力弱きを叱ることによつて救はるべき筈だ。

かつて私たちがかれのためにさゝげた眞愛が正直でさへあつたなら、純なものでさへあつたなら、もうたゞそれだけでたくさんではないか。偶然の結果として負はなければならなくなつた苦痛の裡にすら救はあるべき筈だ。

信も愛も、人生そのものすら刹那的ではないか。人を信ずることのために生まれて來る悲しい明日の結果を恐れたところで、それが何のたしになろう。

私たちは僞らぬ心、僞らぬ自分をさゝげてさへゆけばいゝのだ。

信も、愛も、生くることも、死ぬることすらが眞劍なのだ。捨て身なのだ。人生には遊

戯はない。人生はいつも生一本なのだ。

×

信ずるの心を失ふことは人生に對する光りを失ふことである。人生そのものを失ふことである。何物をも信じないといふことは決してその人の名譽でもなく、その人を大きくするものでもない。

何物をも信じ得ないといふ人々のうちには性格的に氣の毒な人もある。けれども信じ得ないことが決してその人を尊敬する理由にはなり得ない。

よし一歩を讓つて何物をも信じ得ないとしても、その人が立派な人間でさへあるならばその人は必ず私たちの仲間としての涙を持ち、愛を持ち、あたゝかさを持つてゐる筈だ。かれは自分の涙を、自分の愛を疑ふことはできない。

「人間は生まれ、生き、戀し、苦しみ、やがて死んでゆくものだ」と考へたあの虛無的なチエホフの作品を讀んだ人々は必ずやこのことを氣付くにちがひない。

×

話は元にもどる。

私たちは今度の震災のために或ひは一時的であるかも知れないが、ともかく人間全體が死に脅かされつゝ一緒に生き、一緒に苦み、一緒に助け合ふといふことの經驗をば、實感として持つことができたのであつた。

それは最も突きつめた實感であつた。一歩間違へば生命を捨てなければならぬといふクライマックスに於いて經驗し得たところの尊い體驗であつた。

九月一日、二日、三日、四日ころの私たちはほとんど生命の保證さへ與へられてゐなかつた。往來を歩いてゐても、何時、私たちは誤り殺されたかも知れない。日が暮るゝにつれて恐ろしい不安が私たちの心を脅かすのであつた。嵐のやうな叫び聲が町から町へ、村から村へと夜を徹して響いた。月光の下に銃聲が聞えた。

あのやうな數日の間に私たちの隣人に對する心持ちはすつかり淨化されてゐた。温かにされてゐた。お互ひの家と家との間に横たへられてゐた塀も垣根も取り除かれて、みんなが一つの家の人となつて數日を暮らすことができた。所有に對する欲望も非常に純化せられてゐた。必要以上の物を所有することの愚を知つた。必要以上の物を食ふことのわづらはしさを知つた。キリストの所謂「今日は今日にて足れり」の生活の心易さを知つた。

生命の不安があればあるほど、一日生きることのいかに尊きかを知ることができた。
あの數日間の突きつめた心持ちこそ、私たちが一生を通じて育て上げてゆかねばならぬ純一無碍の信念ではなかつたのか。
そこには富める者もなく、貧しき人もなく、みんなが同じ時、同じ町に苦しみつゝある仲間だといふ感じのうちに生きてゐたのであつた。
そこには虛榮も虛飾もなかつた。私たちはシャツ一枚と、ズボン一着と、水筒(すゐとう)一つだけで何處にもゆくことができた。そこはイヴンの王國であつた。住むに心易い王國であつた。

×

地震からわづか二ケ月經(た)つたばかりであるが、私たちの周圍はあの日以前とあまりちがはなくなつた。或る者はあの日以前よりももつと露骨に獸的なあさましい心をあらはにしてゐる。
地震後五六日すぎてからであつた。私は三四人の人々が、地震後如何にして金を作るべきかといふ相談をしてゐるのを聽いた。商人としてそれは極めて自然のことであるかも知れないが、私は不愉快でならなかつた。みんながいかにして不運なる仲間(コムラッド)を救ふべきかと

いふことを考へてゐる間に、かれ等はいかにして金を作るべきかといふ問題に夢中になつてゐるのであつた。

私は商人といふものがつく〴〵いやになつた。イヴンの王國には軍人もなければ、商人もなかつた。そこに住んでゐる人々は無智の人であり、勞働する人だけであつた。

大地震と天啓とを結びつけて考へるやうなやり方は、今日の私たちには受け容れられない。けれども私たちがこの天災に面して幾多の尊い體驗なり、信念なりを見出し得たことは動かすことのできぬ事實である。その尊い幾多の體驗や信念を失つてしまふといふことは、私たちの一生にとりて償ひがたき損失である。

私たちはまだあの恐ろしい日を忘れてはならない。私たちは靜かにあの恐ろしかつた日夜のことを考へて見なければならぬ。今は一時を糊塗して自ちを忘るべき時ではない。今は最も哲學的に人生を究めなければならぬ時である。今はわづかな物慾に心眼を暗くする時ではない。今は靜かに自己の内界に沈潛して悠久を思ふべき時である。

あの恐ろしかつた日の影を、私たち自身の心に深く刻みつけねばならぬ。あの恐ろしかつた日の影がもし上滑りに私たちの心の上を滑つて行つたとしたら、私たちは恐らく永久

に救はれないであらう。

怠惰なのんきな私たちの心はともすればあの恐しかつた日をすら忘れようとしてゐる。私たちは自分の心を責めなければならぬ。自分の心を眞諦の底に沈ませなければならぬ。

生きてゐるから苦しまなければならぬ。苦しめばこそ深くされる。生きるといふことは自分の心をさらに責めることだ。さらに嚴肅にすることだ。

西行の心も、芭蕉の心も今の私たちにはわからなければならぬ筈である。

×

「砧うつてわれにきかせよ坊が妻」

「秋深きとなりは何をする人ぞ」、

二十代に讀んだ折のこの句の味と、三十代に讀んだ折のこの句の味の間には、まるでちがつた深さなり、しみ〴〵さといふものが附いて來た。四十となり、五十となつたなら、またどんなにかその味や深さがちがつて來ることであらう。

芭蕉の藝の深さほど、芭蕉その人の生活なり、人格なりの底を剔り出してゐるものはない。短い一句のうしろに芭蕉その人の寂しい瞳がまたゝいてゐる。芭蕉その人の恬淡さ、

親切さが動いてゐる。

「子供らのなすところを見よ」と敎へた芭蕉の句そのものが子供の句ではないか。秋の山に泊つて月を眺めながら、坊が妻に砧を打てとねだる心は子供の心ではないか。

時雨日の病床に見もせぬ隣り人を不圖思ひ出づるまゝにうたつた心の靜寂さ、自然さ、子供なればこそと思はれる。

東海道の旅一つしたことのない人に俳諧はわからぬと言つた芭蕉の言葉は、何も彼も捨てた人でなければといふ意味ではないか。

旅に出た時のみ私たちは何物をも所有せぬ境涯に住むことができる。家もなければ、或る程度以上の貯へもない。知る人もない。ほんたうの孤獨者である。心細いことである。けれどもその心細い境涯、賴りない境涯ほど私たちに自由を與へ、澄める心を與へる世界はない。

そのやうな折に、自分ひとりで靜かに、「奧の細道」を讀んで見るがいゝ。キリストの山上の垂訓を讀んで見るがいゝ。何物をも持たぬものゝ寂しさと共に尊さが感じられるであらう。

子供らにとつては富が何であらう。土地が何であらう。人間の手によつて作られたものが何であらう。

子供らは夕燒けの空を持つ。子供らは藪の雀を持つ。風を持つ。雪も、雨も、旅人の姿も、野火も、山も、川も、雲も、日も、月もことごとく子供らのものである。

いつから人々は夕燒けの空を忘れ、雀を失ふやうになるのか。何故に人々は子供の持つ世界を持つことができなくなるのか？

×

生きよ。靜かに、しかし強く、苦しめ。一つ一つの淚を嚙みつゝ生きよ。

私は自分の心にから叫ぶ。ともすれば生をすら避けんとする弱い心を叱して。

生きることはうれしいといふことは眞實である。しかし生きることは苦しいといふことはさらに眞實である。

眞面目に人生を考ふれば考ふるほど人は幾度か自殺についてすら胸をなやまさなければならぬであらう。

眞率に人生を生きようとする人にとつては、生きるといふことは大きな冒險である。い

つも命がけである。命を投げ出して生きる人にのみ人生そのものゝ深さも、味も實感せらるゝであらう。

自分自身の安全を保證しつゝ生きて行くやうな小悧巧な生活には人生はない筈だ。イブセンの「ブランド」は眞理を索めるためには雪山の中に子を失ひ、妻を亡ひ、すべてのものを失つでなほ雪の山深くはいつてゆかなければならなかつた。命を投げ棄てゝ生きて行くところに、ほんたうな生き方があるのではないか。命以外のものを投げ捨てることにすら躊躇して何うしてほんたうな生き方が得られよう。死の後には恐らく苦しみはないであらう。苦しみは生のみに與へられた神のたまものである。

一莖の草花でも見落してはならぬと同樣に、私の心をして、たとへ一滴の涙といへども見失はせてはならぬ。

×

人がやがて人から別れなければならぬことは苦しいことである。

人がやがて人を憎まなければならぬことは悲しいことである。

けれども、もし私たちの世界にお互を尊敬し、お互の幸福を祈る友といふものがなかつたとしたら、どんなにか寂しいことであらう。

宇宙は無邊大である。けれども私たち自身の世界といふものが、果してどれほどのひろがりを持つてゐるであらうか。

恐らく人は時としてあまりに寂寞な孤獨の影を踏みて生きつゝあることに氣付くであらう。

けれども友を持つことによつて私たちは無邊際の宇宙に一つの星を見出し、二つの星を見出し、三つの星を見出す。

世界は永劫に闇につゝまれてゐるかも知れない。たゞ私たちが友を見出すことによつて、闇のなかに幾つかの星がまたゝき始める。

子を愛する者、妻を愛する者、友を尊敬する者の世界は幾つかの星を持つ。

釋迦の愛、キリストの愛、アシシのフランシスの愛は全宇宙の空に星を撒き散らした。

×

もしAが死んだとしたら

もしTが死んだとしたら
もしKが死んだとしたら
私の星は失はれる。
だが私は感謝する。
私は孤獨でなかつたことを。
かつてAとTとK……とを持ち得たことを。
私の人生はほんたうに貧しいものではあつた。
けれども私は貧しいながらも幾つかの星を持つことができた
私は星を持つことのできた私自身の人生を感謝せずにはをれぬ。

×

妻よ。
手を止めよ、靴下を編む。
夜が更けた。木の葉を吹く風を聽け。
昨夜別れたあの若い人たちは今夜も恐らく夜を徹して北見の山の話をくりかへしてゐる

ことであらう。

石狩の高原のことを、網走の漁場のことを。馬橇のことを。黒い海のことを。

昨夜あの人たちと別盃を酌んだ時、あの人たちの眼は輝いてゐた。

あの人たちは北海道のことを話しては感激の聲を洩らした。

妻よ。

私たちも行かうではないか。北海道にでも、さらに樺太にでも。

恐らく、そこの雪の中では、もう恐ろしい人の憎みもないであらう。

私は白樺の林のために北海道に行かうと思ふのではない。石狩の高原を思ふがゆゑでもない。

私はたゞ北海道にさへゆけばいゝのだ。

あの若い人たちは未知の世界にあこがれて魂を躍らせつゝ雪の國へゆくのだ。

私はかつて私たちの生活を掩うて、そして現在なほ私たちの心を暗くしてゐる人間の憎みを恐るゝがゆゑに雪の國を索めようとしてゐるのだ。

妻よ。

あの若い人たちのために美しい靴下を編むにふさはしい夜ではないか。
ごらん、星が降るやうだ。
あの人たちはあの恐ろしい大震災の最中に、何も彼も捨てゝ三階の窓に懸けてあつた小鳥だけを救ひ出して逃げたんだよ。
そして森までつれて行つて小鳥をはなしてやつたのだよ。
あの若い人たちの美しい心を思ふとありがたくなつて來る。あの三人の若い兄弟たちは東京を捨てゝ雪の國へ飛んで行つた。
妻よ、あの心の美しい人たちのことを夜つぴて語りながら
あの人たちの幸福を祈らうぢやないか。
妻よ。さあ、スコツチを巻いて上げよう。
あの人たちの靴下を編みながら、あの人たちの話をしよう。

悲しき玩具

秋の彼岸過ぎに植ゑて置いたクロツカースが、二三日前霜除けの下の藁をはねのけて、可憐な頭を一二寸黑い土の上に擡げて來た。

妻の母が地震でひどい怪我をして、そのころは本鄕の大學病院にはいつてゐたので病院に通ふ途中で買つて來た球根を植ゑつけて置いたのだつた。今日は妻の亡母の二七日にあたる。

私の母は數年前に死んだ。

私も妻も母といふものを世界に持たなくなつた。

雪と空をあてもなく飛んでゐる二羽の小鳥のやうな氣がしてならぬ。

親はその子がどんなに大きくなつても、いつまでも子供のやうに思つてゐるが、子もまた親がどんなに年をとつても、老衰をしても、生きてさへゐてくれゝば賴りどころがあるやうな氣がする。親に對する時だけは子供の心にかへることができる。

下の關の海峡を門司にわたつて九州の地を汽車で二三時間も走つてゐると、しみ〴〵と自分の故郷に歸つたといふ感じがするが、あの雪につゝまれた國境の山を見てゐる間に、不圖もうそこには母がゐないのだと思ひ出す刹那に、雪をいたゞいた山も、遠い麥の平野も私にとつては空洞のやうな寂しさを持つて來るのみである。

汽車の窓の方を向いたまゝ私は幾度涙を隱したであらう。

人は何のために生まれたか？　生きてゐるか？　それは永遠に解かれない謎である。けれども私はかつて母を持ち得たことを自分の生に對して感謝せずにはをれない。

母は田舍育ちの無學な人であつた。たゞ私を盲目的に愛してくれた。溺愛してくれた。私は無學な、そしてその子を溺愛することのできた母を持ち得たことを心からありがたく思ふ。

母は無暗と私に厚着をさせた。そのためか私はちよつとした寒さにも風邪をひくやうな子供として育て上げられた。でも私はそのやうな母を持ち得たことをありがたく思ふ。

母は烈婦でも賢母でもなく最も平凡な農夫の娘であつた。だから戰爭の噂が立つごとに私が戰爭に行かなければならぬことのみを心配してゐた。

いつもおづ〳〵としてゐた氣の弱い母の眼がまだ私の心に刻みつけられてゐる。
私はかつてあのやうな母を持ち得たことだけに對しても、この世界に生まれて來たことをありがたく思ふ。

汽車は九州の平原を走つてゐた。
ゆるやかなスロープの櫨畑には人々が働いてゐた。
靜かな秋の日の光りが土を打つ鍬の刃に反射することもあつた。
そこには若い無智な母親たちが櫨の下の草にしやがんで嬰兒を抱いてゐた。
また或る時は箒草の畑の中の乳母車に眠らされた嬰兒もあつた。
地のつゞくかぎり、畑のひろがるかぎり、そこには無智な若い農夫の妻が、若い母が草の上に働いてゐた。
そこには溺愛する若い農村の母の柔和な眼が、遠い地平線の雲を見てゐた。
私は農村の無智なる若い母を愛する。
かつて私の母がかの女等の一人であつたことを思ふが故に。

×

朝起きて見ると毎朝のやうに木の下に雀の羽根が落ちてゐる。

時としては小鳥の頭だけが落ちてゐることもある。

毎晩のやうに梟が飛んで來て塒の小鳥を襲ふのである。

私は梟を憎む。

どうかして捕へてやらうと思ふこともある。

けれども晝間の梟を見ればどこにも憎むべきところがない。

小鳥らは夜の殘虐な征服者をあざけるやうに、梟をめぐつて囀り集まつてゐる、梟は好好爺然として薄暗い梢に眠つてゐる。

私はあの羽音一つ立てないで巧みに小鳥を殺す夜の梟を憎む。

けれども小鳥らにからかはれながら眠つてゐる晝の梟を見ると微笑みたくなる。

なぜ神は夜の梟を作つたのか？

なぜ神は小鳥を襲はなければならぬやうに梟を作つたのか？

小鳥は生きなければならぬ。　梟も生きなければならぬ。

梟は生きるためには小鳥を襲はなければならぬ。

私はすべての運命を悲しむ。
人間の運命を。梟に襲はれなければならぬ小鳥の運命を。
さらに小鳥の塒を襲はなければならぬ梟の運命を悲しむ。
神はすべての悲しき矛盾を、いたましき運命に背負はせて生ける物を作つたか？

×

子供らは玩具をもてあそぶ。
汽車を。金魚を。軍艦を。
子供らは終日玩具を弄ぶ。
その枕頭にすら玩具を。
玩具のない生活はどんなに子供らにとつて寂しいことであらう。
玩具は子供らにとつて喜びであり、光りであり、いのちである。
しかし乍ら人間は所詮(しよせん)終生何らかの玩具なしには生きてをれない。
戀愛、名譽、地位、所有……すべて玩具ではないか。
大人たちは生命をかけてかれ等の玩具をもてあそんでゐる。

私たちは城のやうな巨きな邸を玩具にしてゐる大人を見る。
立派な自動車を。大きな會社を。大きな工場を。
しかし大人の玩具には、いかにたくさんの悲劇が潜んでゐることであらう。
一人の肥え太つたブルジョアが大人の玩具に微笑んでゐる時、
幾萬の貧しい男や女たちが工場の暗い車輪の前で、刻々に生命の鎖を刻みつゝあることであらう。
夕方の汽笛が鳴る時、工場の門に立つて見よ。
そこには終日一つの玩具をも見出すことのできなかつた不幸な人たちが、青白い顔をして油にしみた黒い手をして、
黄昏の寒い街に吸ひ込まれてゆく。
私は藝術の水甕を作る。
それは私の生命なのだ。私の玩具なのだ。
玩具なしにどうして生きてをれよう！
人生はあまりに頼りない。

私は玩具を作る。私は生の不安を忘れる。私は死の恐怖を忘れる。
私は藝術の水甕を作る。
私はどんな水甕を作り上げ得るか。それは私にもわからない。私はたゞ土をこねてさへゐればいゝのだ。
何のためだか知らぬ。
たゞ働いてさへゐればいゝのだ。
やがて私はその玩具にさへ飽くかも知れない。
私はその水甕を地に叩きつけて、やがて死んでゆくかも知れない。
それだけなのだ。私の一生は。それでたくさんではないか。
私の死後また誰かゞ生まれて來るであらう。
私に捨てられた玩具は土に還るであらう。
私の後に生まれて來た男は再びその土を捏ね上げて水甕を作るであらう。
かれも亦やがて水甕を叩きつけて死ぬであらう。
それでいゝのだ。

地は永遠に殘るであらう。
土を捏ねる人間は永遠に生まれ來るであらう。
私たちの人生は悲しき水甕の玩具にのみ存在する。

×

私は冬の夜を歩いてゐた。
私は地平線の上に幾つかの燭の群を發見した。
そこには幾つかの町があるのだ。
私はそこに幾千の人たちが、私と同じやうに悲しき大人の玩具を作りつゝあることを想像せずにはをられなかつた。
そこでは恐らくその刹那に悲しき玩具を地に叩きつけて、寂しく死んで行つた男もあつたであらう。
地のつゞくかぎり、人間が住んでゐるかぎり、そこには悲しき大人の玩具を人々は作りつゝ求めつゝあるであらう。
私はさらに大空を仰いだ。

そこには無數の星があつた。

私は思つた。

「恐らく、あの一つ一つの星にも無數の人類が悲しい大人の玩具を作りつゝあるのかも知れない。

夜も、晝も、そして永遠に！」

師と弟子

「時雨ふれ笠松へつく日なりけり」

或ひはこの句は私の記憶がまちがつてゐるかも知れぬが、ともかく芭蕉は木曾川を下る時こんな句を作つてゐる。

誰と木曾川を下つたか、いつであつたか、それも私は記憶してゐない。

私自身二年前に木曾川を下つて、日暮れころに笠松へ上つたことがあるので、この句は一層私に懐かしく思はれる。反古のなかにあつたのを、芭蕉の死後發表されたものであつたかと記憶してゐる。この句について語ることは芭蕉にとつて迷惑かも知れぬが、私はこの句を見るごとに犬山の丈艸を思ふ。

「風俗文選」には丈艸の事を記して「僧丈艸者。尾州犬山產也。壯年辭武出家。隱松本山上蕉門之騷客也。能詩。後三年閉關而終不出病死。常讀法華經。年四十四」としてある。

何ゆゑ丈艸が武を捨てゝ出家をしたか、いろ〳〵な傳說もあるやうだが、ともかくかれが

尋常一様の出家でなかつたことだけはこの短い記事からだけでも推察することができる。

義仲寺に芭蕉の墓をたづねた日、直ぐ裏の山に丈艸が庵をむすんでゐたことをきいて、師弟の間の美しい情誼に泣かされたことがあつた。

「うづくまる薬の下の寒さ哉」

この句を病床の芭蕉に褒められた時、丈艸は恐らくありがたさの涙に咽んだことであらう。

四十四年の生涯は長くはなかつた。しかしかれは、まことにありがたい生涯を見出し得た。芭蕉はよき弟子を持ち、丈艸はよき師を見出し得たのであつた。かれ等はよき日に生まれた。

芭蕉は貧乏であり、一嚢一笠の旅を愛してはゐたが、無下に人の施しを贅澤だとして辭退することはなかつたやうである。芭蕉はほど〳〵にせよといふことを人にも教へた。强ひて人の親切心を無にするやうな野狐禪的乞丐の生活はしなかつた。馬にも乘り籠にも乘つたことはあつた。たゞいつも乞丐行脚の生活を心に描いて忘れなかつた。

丈艸は身を持することすこぶる嚴であつたやうに思はれる。

「丈艸法師の臥具のかい破れてしかも寒げに見えければ新しき夜具一具をおくりけるに、即時にかへし申されける。その仔細を問ひければ、丈艸曰去るころ智月尼よりさもきよげなる蒲團を贈りたまひけるにその夜被りてこゝろよくあたゝまりいねたりけるに誰とは知らず引めくりていにけり。その後正秀よりおくらんと申されけれど辭して受けず。盗まれて惜きと思ふは着心なり持たざれば取らるゝ氣遣ひなし。とられざればをしき心も起こらず、惜き心なければ罪もなし。古紙衾は取られてもをしき心なし、この執情のおそろしければ辭して返す也。」

これは肥後八代の僧文曉の「芭蕉談」に蒐められたものであるが、文曉の談のうちにはともすれば事實をやゝ誇大にしたり、小說化したりしたやうな點がほの見えるので、どこまで信じていゝかわからぬが、丈艸がともかく一念精進の徒であつたことは、その他のいろいろな記事から推し測られる。

×

「今日幻住庵に訪ひたりしに屛風襖等または四壁悉く書寫したりしものにて張捨たりと見えて、やぶれたるありまためくれたるもありて紙員百五十牒もあらんかと見えけれど連續

したるはまれなり大體つゞりてよみくだし見るに何を寫したりともしれねどめでたき道の記なり和文の簡古なる今の世に誰あるべき共おもはず。よみつゞらんとすれば心ゆかず。扨も惜き事也……丈艸云……是はどこの記是はそこの景色也人に見せて益あるものにもあらず又祕すべきものにもあらず册にして世に殘し置くべき書にもあらざれば秋も時代に夜寒の時しなれば讀經靜座の間々さびしく茶をきつする晝の寢ざめかく四方に張り置きてよみはべればその國そこに再び杖を向けし心地して……更々惜しき事なし。師にわかれまゐらせしよりこの方口を閉ぢはべれば風詠もなし。日々一石一字は先師翁の追福し奉るまでなり。この志しとげなば一蓮託生を待つ計りに候とて……」

これは醫師の木節から去來におくつた手紙になつてゐるが、日々、、、一石、、、一字、、、といふのは川からひろつて來た小石に法華經の文字を一石に一字づゝ書きつゞけてゐたのであつた。芭蕉も幻住庵にこもつてからは小石に經文を寫すのを日課の一つとしてゐた。

自分の一生に書いたものをすつかり壁に張りつけて、暇々に讀みかへしては曾遊の地を忍ぶ無慾な俳人の高風が慕はれるではないか。

芭蕉は子供たちに最初は錢をやつて川から小石をひろつて來てもらつたが、子供たちは

錢を餘りよろこばなかつたので、後には菓子を買つてやつた。丈艸は芭蕉よりも貧乏であつたから子供に菓子を買つてやることもできなかつたかも知れぬ。

さらに丈艸がどれほど眞劍に最後まで乞丐行脚の生活を忍び得たかについては、かれの「贈新道心辭」を讀むがいゝ。

「世をのがれて道を求むるほどの人は皆一かどのこゝろざしを發してまことしきつとめともしあへれど、年を重ぬれば、またかれこれにひかるゝ緣おほく、事繁くなりて更にはじめの人ともおもほへぬふるまひのみぞおほかる。古人もこの事をいましめて出家以後の出家を遂ぐべきよしすゝめはげましぬ。……」（風俗文選）

今日救はれたもの、明日必ずしも救はれはしない。今日の救ひは今日きりである。明日はまた明日の救ひを見出だすために苦まなければならぬ。

ホーマーの作品もほろびるであらう。ダンテも沙翁も近松もいつかはほろびるであらう。すべての藝術はほろびるであらう。

自己の藝術を壁に張り捨てゝ、自己の藝術にかれ一人あそぶことのできた丈艸は羨むべき詩人であつた。

丈艸ばかりではない。もし杜國がいきながらへてゐたなら、かれ等師弟の間にもつともつと美しい挿話が殘されたことであらう。

夢に杜國を見て泣いた芭蕉の師の心のたふとさ。

「すてはてゝ身はなきものとおもへども雪のふる日はさふくこそあれ。花のふる日はうかれこそすれ。」

花下に狂ふ人あれば、かれは靜かにそれを觀ずるだけのゆとりを持つてゐた。

「誰人か菰きておはす花の春」

ともかくかれは丈艸とおなじく道を求めて道の中へ入つたが、さらに道を出ることのできた寛かさを持つてゐた。

「杜國は俳諧をわれに學びてわれよりもさとし、一を聞いて十をさとる。われまた神學を杜國に聞いて杜國より鈍し。十を聞いて一もさとらず」恐らく芭蕉が杜國についてから語つたのは事實であつたらう。

芭蕉の多くの弟子たちのうちには、或ひは芭蕉以上の才を持つた人もゐたであらう。ただ芭蕉はその人間たる點において誰よりも深く、誰よりもあたゝかであつた。

無論蕉門にも路通の如き人もあり、凡兆の如く終に行く方も不明な人もある。一人の師をめぐりていろ〳〵な嫉視も排擠も或ひはあつたであらう。しかしながら最後まで大多數の弟子たちが、かれを神のごとくうやまひ、父のごとくなつかしんでゐたことを考へると、これは恐らく世界の文學史上、類のない美しい事實である。

×

俳諧といふ文學形式、或ひは俳諧の本質そのものがもと〳〵人と人と相親み、隣人と共に相樂しみ、相苦しむといふ獨自性を持つてゐる關係からして、あれほどの多くの人が結びつくことができたと言へるかも知れないが、俳諧といふ文學形式をあのやうな最も溫かな隣人相依の創作藝術とせしめた芭蕉の人間としての大きさ、廣さは驚歎すべきものであらねばならぬ。

芭蕉はすくなくとも今日の詩歌壇の人々のやうに神經質ではなかつた。自分を無理にも押し立てゝ行かうとすることはなかつた。だから或る批評家に言はしむれば「埒もなき男」であつた。

「文學は人間と人間との交通の手段である」といふ言葉はたしかに一面の眞理をふくんでゐる。日本の俳諧はその點において見事にその目的を達してゐた。

「俳諧のかたちたるや、蓑笠竹杖草鞋しめつけて朝立ちしたるがごとし。京田舍去りきらひせず、一所にあなまとひせず、雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり、あるは山寺の小料理になぐさみ、士亭に逗留をあかれたるも一段の笑ひなるをや。月ほとゝぎすの曉を木の根岩ばなに寢さめて、また見ぬ方にあゆみをすゝむ。はてかぎりなき津々浦々。薩摩潟、蝦夷が千島の門背戸までもさらばいへ殘すものあるかは。これ吾道の廣みにしてわがあそび所といふべし……」（風俗文選。丈艸。詩歌俳諧辨）

和歌が高踏的となり、貴族的となつた際に俳諧は最も打ちくだけた市井の言葉を以て、最も庶民的な、隣人と相偕に樂しむべき藝術として生まれて來たのであつた。

私たちの今日の藝術はあまりに「京、田舍を去り嫌ふ」傾向がおほくなつてゐる。あまりに差別的である。朋黨的である。打算的である。左顧右眄である。

私たちの藝術はなほ一度一番低い、一番廣い世界から出發しなければならぬ。それは芭蕉の深さと、寛さとを持つた人の手に委ねられなければならぬ。

杜國も生まれなければならぬ。丈艸も生まれなければならぬ。すべての民衆が藝術によつて實際に人を信頼し、人を愛し、人のために涙をそゝぐだけの暢然たる世界が生まれて來なければならぬ。師と弟子とが一つになるやうなアトモスフイヤをもつた藝術が生まれなければならぬ。眞實に隣人と隣人とが藝術の至境において相扶け、相慰むることのできる藝術環境が生まれなければならぬ。

怠惰なる秋

私は怠惰なる日を愛する。怠惰なる秋の朝を愛する。
かすかなる物の影は冷たき地に這ひ、縁に這ひ、私の心に這ふ。
高い木で百舌が啼く、草の下にこほろぎが鳴く。
何でもないたゞこれだけの月並な秋の聲、秋のシインに觸れたゞけでも私の心は動く。
微風が吹く、葉がゆらぎ、網の目を作つた地上の影が顫く。窪みの行潦が搖れる。
二尺ばかりの水煙が地を這ふ。
何でもない、こんな庭の秋の色を、秋の動めきを見つめてゐるだけでも私の心は踊る。
私は秋の怠惰なる日を愛する。
秋の怠惰なる日を悦ぶ心を賦へた神に感謝する。
秋の怠惰なる日、空を見れば私の心は澄む。私の心の奥の奥に眠つてゐたいろ〳〵な思ひ出が、いろ〳〵な思ひが、いろ〳〵な影が動く。

その思ひ出、その思ひ、その影は、私にとつて世界の何物よりも尊いものである。

私は本を讀まない秋の日を、悔みはしない。私は何一つ作り出さなかつた怠惰な日を悲しみはしない。

私は怠惰であつた。けれども私は忘れかけてゐた思ひ出を見出した。雜念の靄につゝまれようとしてゐたいろ〳〵な思ひを、いろ〳〵な影を、磨き上げた玻瓈に映すことができた。

それは私にとつて哲學を思惟するよりも尊い經驗であつた。それは私にとつてパンのための藝術を作り出すことよりも尊い精進であつた。

哲學も藝術もそれが私たちの心に、靜かな影となつて、心影となつて再び三度生きかへつて來るのでなければ眞實な相は摑まれないであらう。

すべての自然の相といひ、すべての人間生活の意欲といひ、執着といひ、哀愁といひ、歡喜といひ、私達は果して現實在として一つのものでも持つ事ができるか。すべては過ぎ去つた心影ではないか。現在の世界に現實在はない。現在の世界では私たちはたゞ過去の心影を靜かに、できるだけ靜かにたしかに思ひ出すより他に方法はない。

怠惰なる秋の日は私に王侯以上の富を與へる。私は秋の日を怠惰なるがゆゑに、すべての空を持ち、微風を持ち、行潦（にはたづみ）に映る雲を持ち、私の心の表を撫でて行くあらゆる過去の心影をさながらに持つことができる。

×

秋の風が吹く。青空が漂ふ。
怠惰なるがゆゑに、私の心は秋の風を聽き、青空を仰ぐ。
いたましき過去の心影は重い鎖につながれつゝ私の心を撫でてゆく。
いたましき過去の心影の行列
秋の朝をいたましき心影の行列が歩む。
とざされたる扉、空虚なる鋪道。鈴懸の葉は落ち、野良犬は眠る。
鎖の音は死の町の秋に響く。
死んだ女、死んだ男、かの友。いたましき心影の行列は歩む。
心影の世界に於いては人は永遠に生きる。
秋の風が吹く。かけすが鳴く。

いたましき心影の鎖は斷たれる。
地上から失はれた人々。
すべての美しき人々の上に冷たき土。幾何の墓。
靜かなる行潦は動く。
老いんとする我。

×

この靜かなる心
紙を喰む蟲のごとく一つ一つの心影が私の心臟に
靜かなる心影の音
靜かなる心影の跫音
秋は沈む、草叢（くさむら）に眠る蟲のごとく靜かに。
たゞ秋の一日の怠惰、たゞ秋の數日の怠惰。
墓の下の人々生き、來り、我が心遠くに住み、惱み、思ふ。
この靜かなる心の奥に死の國のさゝやき

この靜かなる心の奧に實在そのもの〻寂しき永遠の影
死の國のさゝやきを聽かんがために
實在そのもの〻寂しき聲を聽かんがために今日も怠惰なる秋の日を過した。
何もせず、何も思はず、たゞ心の奧の秋の扉を見つめたま〻。

×

怠惰な秋の日の午後
草の中にしやがんで山を見る。廣い川を見る。汽車は幾度か長い鐵橋をわたつて往き、來る。
更に往く旅人、西に往く旅人。
秋の風は川の眞つ白な磧（かはら）を奧の山へ吹く。
それはほんたうに廣い磧である。
磧をへだてた向う岸の町がかすむほどに廣い磧である。
私は廣い磧の一つ一つの礫（こいし）を見つめる。
一つ一つの礫が、一つ一つの悲しみを持つてゐるやうに思はれる。

私は廣い流れを見つめる。
一つ一つのさゞなみが一つ一つの憂鬱さを持つてゐるやうに思はれる。何と名づくべき悲しみでもない。何と名づくべき憂ひでもない。たゞ一つ一つの礫は喘ぎ、一つ一つの波は秋の憂鬱さを射かへしてゐる。
長い鐵橋を旅人は西し、旅人は東する。
私は廣い磧を見つめてゐる。私自身が旅人であることを忘れて。
永劫の時を通して、私はこの刹那だけそこの草の中にしやがんで、そこの磧を見たのであつた。恐らく永劫を通じて私はふたたびこの草の中を歩むこともあるまい。
私は磧の礫に對してほんたうに永遠のさよならを言はなければならぬ。遠い山に對しても、水に對しても、そこに立つてゐた人々に對しても、鐵橋を吹く秋の風に對しても。

×

私は廣い川の畔の草の中に立つてゐる。
草を吹く秋の風を聽いてゐる。
旅人は西し、旅人は東する。

風は一つの草から一つの草へと永遠のさよならをさゝやいてゆく。
旅人は一つの山から一つの山へと永遠のさよならを投げかけてゆく。
時とは永遠のさよならではないか。
刹那とは永遠のさよならの一つ一つではないか。
秋の風は過ぎゆく
一つ一つの永遠のさよならではないか
人は現實に生きることはできない
人はいつも永遠のさよならのなかにのみ生きてゐる。

×

音、一つ一つの音、音なき音
光りに溶け來る音、いづこより流れ來るか音なき音
秋の朝の冷たき木蔭に凭り立つ音
青空に流れゆく音なき音
いづこへ

すゝり泣き、木の葉の落つる寂しき笑ひ
いづこより
地を踏みて朝の街に思ひつゝ歩む
昨日歩みし街
住み馴れし街
秋の朝の光り
旅人のこゝろを我に見出す。

×

秋の曇り日の光りを一つ一つペンの背に負うて私の詩が白い紙の上を歩む
小鳥らは木にありて
草は地にありて
私の血は脈管に遠し
かれらこの心と何のかゝはりもなし
ペンを走らせる我、思ふ我、憂鬱な心、

神は遠し
ペンは走る。空しき心の足跡を曇り日の光りは照らす。

×

廣い草原に立つて思ふ存分笑つて見たい
何もかも忘れて、忘るゝまで笑つて見たい
かれは笑つた、ほんたうに笑つた
笑つてしまつたらかれはきよとんとしてゐた
胸が痛いと言つてゐた
頭が痛いと言つてゐた
たまらなくなつたと言つてゐた
かれは地にうづくまつてしまつた
かれは泣いてゐた
傍で見てゐた神は笑つた
かれはすゝり上げて泣いた。

×

何も彼も忘れて、忘るゝまで笑つて見た
かれは笑つた、ほんたうに笑つた
そしてきよとんとしてゐた
秋の風が吹いてゐた
たまらなくなつたと言つてかれはまた笑ひ出した
笑ひこけた、泣きながら笑つた
横つ腹が痛むと言つて笑つてゐた
ぽろ〳〵と草の中に涙を落した、手の甲で拭いた、そして笑つた
かれはきよとんとして草の中に立つてゐた
かれはたうとう氣が狂つてしまつた
秋の風がかれの汚れた髭面を吹く
かれは今日も街を歩きながら笑つてゐた。

×

歩いて歩いて歩き通しに歩いて見よう
疲れ切つて何も彼も忘れてしまうまで
惟然坊は歩きに歩いた
西行(さいぎやう)も歩きに歩いた
何も彼も忘るゝために
歩きに歩いて魂を摩り減らしてしまふことができたらどんなにうれしからう
秋の風が吹く
惟然坊を吹いた風が、西行を吹いた風が
惟然坊が一生歩いても、西行が一生歩いても
地は一寸も減りはしなかつた
秋の風は一尺も短くはならなかつた
秋の風が吹いてゐる
惟然坊も、西行も死んでしまつた。

×

なぜ踊ることができないのだ
誰か笛を吹いてくれ
踊つて踊りぬけたら人間の世界がどんなにか面白からう、人間の世界がどんなにばかばかしからう。
誰かゞ踊つてゐる
誰かゞ笛を吹いてゐる
たつた一人だ
街の男や女たちが笑つてゐる、冷笑してゐる
でも、たつた一人の男が踊つてゐる、たまらなく愉快さうに
たつた一人の男が笛を吹いてゐる、たまらなく面白さうに
世界で一番幸福さうな顔をしてたつた一人の男が踊つてゐる
たつた一人の男が笛を吹いてゐる
みんなはなぜ踊らないのか、笛を吹かないのか
狂人だ！　狂人だ！　とみんなが言つてゐる、笑つてゐる

けれども男は踊つてゐる、男は笛を吹いてゐる
秋の日が踊る男と、笛を吹く男の上のみにかゞやいてゐる。

×

プロメシウスが神に罰せられなければならなかつたなら、酒を作つた男も鷹に腸を裂かれなければならぬ。
なぜなら酒を作つた男もプロメシウスと同じやうに人間に至上の幸福を持つて來てくれたからである。
プロメシウスの炬火(たいまつ)、酒を作つた男の酒甕！
人間は酒を飲むことによつて神の世界の扉を覗きこむ
酒に狂うた男は神の鞭を忘れてしまふ
狂人になるといふことはめぐまれることだ。
コスモスのやうに痩せこけた赤い鷄頭が庭の隅にある
狂人の眼で見ればそれはたゞの鷄頭ではない
そこには王冠がある、雪の中のたとへばクレムリンの大伽藍が見える、燒けさかるモス

クワの街がある
一片の葉がゆらぐ
狂人の眼には
或るものゝさゝやきが動く、遠い世界の人々の俤が映る、悠久が流れる。

×

狂人でなくてどうして貧しき者は幸なりと說くことができよう
狂人でなくてどうして草の上に神の炎を見ることができよう
狂人でなくてどうして五千人の聽衆をたゞ幾片かのパンと魚だけで滿腹せしむることができよう
狂人でなくてどうして十字架に上ることができよう
狂人でなくてどうしてイヴンの馬鹿の王國の實現を想像することができよう
狂人でなくてどうしてガンヂの言葉が語られよう
自然はいつも狂人に似てゐる
自然は平氣で幾十萬の人を殺す、狂人だからだ、だから自然はまた全く無報酬で幾億の

人々を生かす
秋の風は狂人だ、だから世界のどこまでも考へなしに走つてゆく
そこに生きとし生けるものゝ心を打つて寂寞に狂死せしむべく
狂人である秋の風に吹かれて狂人西行が生まれ、惟然坊が生まれ、芭蕉が死んで行つた。

×

一生を壺を作る男
一生を繪絹の前に坐る男
一生を草を植ゑ、草を刈る男
それが狂人でなくて何であらう
何かに狂つて現實を忘るゝのでなければ、生きてをれないのだ。空虚といふ脅迫のために寂寞そのものゝ聲音のために
偉大なる狂人ミケランゼロの玩具が美術館に飾られてある
孤獨な狂人ベートウヱンの手すさびが高い丸天井（まるてんじやう）の窓から流れて來る
しかし、かつてありし偉大なる狂人等のすべての事業もいつかはすつかりこの地上から

滅びてしまふであらう

しかし人間が生きてゐるかぎり、狂人等は壺を作り、詩を作り、繪を描くであらう

絶えず人間を脅かし、忍び寄る或るものゝ跫音を恐れつゝ。

雨の日

雨が降つて來た。
空をのみ見てゐた私の心は雨に濡れた地上を見る。
柔かな草の葉を。冷たい石の上を。
雨の日に下つた木曾川を思ひ、大井川を思ふ。今もその川のほとりにゐる友たちを思ふ。
草の葉を打つかすかな雨の音は、深きよりさらに深きに遠きよりさらに遠きに私の心を誘ふ。
草の葉もうなだれ、すべての嫩葉(わかば)もうなだれる。靜かな雨の音を聽くごとに、柔かな雨の絲を見まもるごとに、矯(おご)れる私の心がうなだれる。
雨は森を眠らせ、草原をまどろませ、町を休息の靄につゝむ。靜かな、處しき搖籃。
雨は私の魂に悠久をよみがへらせ、過去をよみがへらせる。
雨は私に隣人の吐息を聽かしめ、隣人の笑ひを聽かせる。雨は地にあるすべてのものを

一つにつゝむ。生ける者すべてが兄弟であるといふ實感が、雨の日ほど深く感じられる日はないであらう。

馬車を驅れる男、道を歩いてゐる男、草の中を走る犬、すべてがうなだれてゐる。生けるものすべてが負はなければならぬ運命を思ひつゝあるかのやうに。

さゝやかなる雨を聽く時、私の心から憎みを去れ。

さゝやかなる雨を聽く時、私の心から呪ひを去れ。

町も、森も、一樣に靜かな雨に暮れてゆく時、どうして人が人を憎むことができよう！

×

雨の日ぬかるみの道を歩きながら不圖人を思ふ。

野茨は雨にぬれ、穗麥は靑い波を打つて白壁の町までつゞいてゐた。

私はそこに立ち止まつて野茨を見た。穗麥を見た。中學時代の少年のやうに。

思ひ出！　人の俤！

夢を追ふ心を人は笑ふであらう。

けれども私はこのかたくなゝ心の底になほ夢を追ふ念の失はれてゐなかつた事をありが

たく思ふ。

思ひ出。それはたれにも束縛せらるゝことのない私のたゞ一つの自由な世界ではないか。

儚(はかな)い思ひ出と人は笑ふかも知れぬ。

しかし、それでたくさんではないか。

雨にぬれながら、野茨を見、穂麥を見、眞晝間に思ひ出の夢をたどる時、たれが私が生きて悩みつゝあることを知らう。

しかし、それでたくさんではないか。

Aも幸福であれ！　Bも幸福であれ！　Cも！

二十年の時が過ぎた。

なほ一人雨の中に立ちつくして少年の夢を追ふ自分自身をあはれにも思ひ、ありがたくも思ふ。

×

夢みることは悲しい。

夢みることは苦しい。

夢みることは懐かしい。

詩は人生の夢ではないか。すべての藝術は人生の夢ではないか。大きな革命も人生の夢ではないか、大きな事業も夢ではないか。

人はさらに大なる夢を求めんがために天文を學ぶのではないか。博物を研究するのではないか。すべての科學は夢の所産ではないか。

ソクラテスはさらに大きな夢を見んがために毒盃を仰いだのではないか。

キリストは偉大なる夢遊病者ではなかつたか。かれは最も大なる夢の代償として十字架を擔つた。

嬰兒は何故に天國に入ることを得るか。

かれは夢を見るがゆゑである。

天上の星を見てたゞ鑛物質のかたまりのみを感ずる人は星を見ても救はれない。

天上の星に、寶石のさゝやきを見、無限なるものゝ神祕を感ずる者でなければ救はれない。

ヂオコンダの脣(くちびる)に神祕を見出したレオナルド・ダ・ギンチは救はれた。

女の唇に、女の眼に何等の神祕をも見出すことのできぬ人間はフイリスティンである。
フイリスティンは神祕を見出し得ないがゆゑに救はれない。
ドストイエフスキイは殺人者の眼に神の世界を見出し得た。トルストイはニキタの唇に神の言葉を見出し得た。
ニキタはどこまでも嬰兒を壓殺した罪人である。しかもニキタの唇に神の言葉を聽き得たと信じたのはトルストイの夢ではないか。
マグダラのマリヤはどこまでも汚れたる女であつた。しかもかの女を友人として恥ぢなかつたのはキリストが夢遊病者であつたからではないか。
夢を追ふキリストにとつて、神の國の救ひはあまりに偉大であつた。それに比べてマグダラのマリヤの罪はあまりに小ひさなものであつた。
神の無限なる愛に比べて、人間の罪はあまりに小ひさい。殺人者も、放蕩者も、娼婦もすべて神の作つたものとして神の愛につゝまるべきものである。
どのやうな惡も、神の愛を曇らすほど大きな惡はない。
どのやうな善も、神の善に比ぶればあまりに小ひさ過ぎる。

人間がもし、善によつて救はれなければならぬとしたら、恐らく一人も救はれないであらう。

人間は決して善によつて救はれない。

コロレンコーの「マカアの夢」を讀んだ人はこのことについて思ふであらう。

マカアは神のさばきの前に立つた。

かれは一生を通じて幾萬本の木を盜み伐つた。かれは地獄に落ちなければならなかつた。かれは生涯を通じて、一つの善をもなさなかつた。しかもかれは救はれた。

神はマカアをあはれんだ。神は一滴の涙を落した。神の一滴の涙は、マカアの生涯の惡の重さよりも重かつた。

×

私は或る日、教壇の上で不用意に「そんなことをしても豪くはない」と言つたことがあつた。一人の學生が卽座に「いつたい豪いといふのはどんなことです？」と訊ねた。

私は何だか恥づかしい氣持ちになつた。

まつたく私たちは豪い人、豪くなるといふやうな概念に、ともすれば、取り憑かれ易い。

人類がほんたうに要求してゐるものは豪い人であらうか。頭のいゝ人、天才的な人、てきぱきと仕事のさばけてゆく人、そんな人も必要である。

けれどももつと私たちの周圍にあつて欲しい人、親しんで見たい人がありはしないか。

ワルト・ホイツトマンを想像して見るがいゝ。渡し船のお客とも、船員とも、郵便配達夫とも、子供たちとも、誰とでも心からの「ハロー……」を投げかけることのできた凡人らしい詩人の俤を描いて見るがいゝ。

良寛を、白隱を、芭蕉を、大雅堂を想像して見るがいゝ。もしこんな人たちが私たちの周圍から失はれてしまつたとしたら、どんなにか人生は物足りなく思はれることであらう。

芭蕉も白隱もホイツトマンも豪い人といふにはあまりに子供らしい人たちであつた。あまりに人間らしい人たちであつた。豪いといふやうな差別的な言葉を用ふるにはあまりに醇であり、あまりに深かつた。

すべての人々が白隱になり、ホイツトマンになることはできない。けれどもあの人たちが歩いて行つた道だけは心がけ一つで歩ける筈である。最も親切な、子供のやうな心を持つて行く人でさへあるならば。

都會に生きてゐる人たちはたいていは田舍に生きてゐる人たちよりは自分自身を豪いと思つてゐる。世間的に名のある人は、名のない人たちよりは、自分自身を豪いと思つてゐる。眼に見ゆる藝術を作る人は、眼に見ゆる藝術を作らぬ人よりは、自分自身を豪いと考へてゐる。

私たちは本も捨て、繪筆も捨て、田舍に行つて見るがいゝ。私たちは名もないほどの山間の小ひさな村にも眞面目(まじめ)な聖書の研究者があり、眞理への精進者があることを見出すであらう。そこにはいろ〳〵な美しい人間の心のあらはれがある。尊い犧牲があり、忍苦があり、愛がある。その人たちは恐らく誰にも知られないで、かれ等が生まれた土地に生き、信じ、愛し、苦しみつゝ靜かに元の土に還り、眠つてしまふであらう。一つの詩も、一つの藝術も作らないで。

けれどもその人たちの生活がどうして都會の人たちや、所謂思想家や藝術家たちの生活に比べて劣つてゐるといふことができよう。かれ等の生活こそ星や草木のそれの如く自然であり、尊くあるのではないか。

私たちが第一に持たなければならぬ人は自然の人である。最も人間の仲間らしい仲間で

ある。

かれが眞實にどれだけ人間の仲間となり得たかといふことが、かれの生存の意義の深さを決定するものではないか。

木曾川緣の友の上に祝福あれ。

大井川緣の友の上に祝福あれ。

すべて私たちの善き仲間(コムラッド)の上に。

淺春賦

西行にしても、芭蕉にしてもなぜ生涯を旅で過したか。殊に西行には妻もあり子供もあつたやうであるが、その愛執の絆までも斷つて何故に漂泊の旅に出なければならなかつたのか。

人間である以上は、殊に多感の詩人である以上は、芭蕉にも西行にもLove-affairsもあつたであらう。しかしそれが家出の動機であつたとは私は考へたくない。

「いつのころよりか片雲の志云々」恐らく芭蕉自身すら、いつのころから漂泊の旅に身を委ぬべくなつたかはづきりとは記憶してゐないであらう。それほどはつきりした動機があつたとは思はれぬ。同時に何故に旅から旅へ經めぐり歩かなければならないのか、かれ自身答へることはできないであらう。

「兎角拙者浮雲無住の境界大望故如此漂泊いたし候」

「殘生いまだ漂泊やまず湖水のほとりに夏をいとひ候猶こち風に身をまかすべきやと秋立

つ頃を待かけ候」

一所にぢつと家を定めて住んでゐることは芭蕉にはできなかつた。

諸法從來常示寂滅相。「しばらく足のとどまる所は蜘蛛のあみの風の間にと存候へば」

人生そのものを風の間の蜘蛛の巣の運命に過ぎないと見た佛教的な思想の背景が、かれの漂泊の志念を一層固くしたことは爭はれない。西行も、芭蕉も佛教思想の背景なしには生まれ得なかつたといふことはできるであらう。が、もともと西行なり、芭蕉自身のうちに、いかに多くの漂泊者的な血が先天的に流れてゐたであらうといふことをも想像せられる。

かれ等は生まれながらの漂泊者であつた。それがたま〳〵老莊、或ひは佛教の思想と結びついたがために、あのやうな文學形式となつてあらはれ、あのやうな生活形式となつてあらはれて來たと見るが當然であらう。

私はこのごろパピニーの「きりすと傳」を讀んだ。その中にキリストは生まれながらにして罪を知らぬ人間であつた、最初から最後まで完き人間であつた、子供そのものであつたといふ意味の言葉が語られてゐるのを讀んだ。

福音派の人々に言はしむれば、この結論は當然の事實であつたにちがひない。しかしかのルナンの耶蘇傳を讀んだ私たちにとつては、パピニーのこの言葉は、全然新しい意義と力とを持つて訴へて來るのであつた。ルナンが說いたやうに、かつて荒野に於いて惡魔の誘惑を感じたキリストが、人間の達し得る最高の世界まで精進によつて達し得たといふ風に、キリストを見るのもまことに面白い見方である。しかしパピニーのやうにキリストは最初から最後まで完全な人間であつた、神の子であつたと見るのも面白い。そのやうな場合が實際に存在し得ないと斷言することはできない。

久しい間自然主義的な見方に馴らされてゐた私たちは、やゝもすればあまりに人間をあさましいもの、卑しいものに決めてしまひやすい。しかしながら、私たちは實際の人生に於いて私たちが想像してゐたより以上に醜いものや、呪ふべきものゝ存在してゐることを知ると同時に、私たちが想像もし得なかつたほど美しいものや尊いものゝ存在しつゝあることをも知る。

アシシのフランシスや、孔子や、釋迦といふやうな人々は恐らく、私たちの小ひさな、卑しい心では想像することもできないほど立派な人であつたにちがひない。かれ等は生ま

れながらの神の子であつたにちがひない。

トルストイは非常に偉大な人であつたにちがひない。しかしかれは生まれながらの神の子ではなかつた。ロマン・ローラン流に言へば、あの最も人間らしい弱點を持つたトルストイがあの神の完きを得ようとした苦しい修行のうちに私たちを勵ますものがあるにちがひないが、アシシのフランシスや、キリストのやうに最初から神の子であつた人の生活の尊さといふものがしみぐ\感じられる。

どのやうに深い信仰を持つてゐても、「どのやうな懊惱を持つてゐても」ヨブはヨブであつてキリストではあり得ない。トルストイはヨブではあり得るであらうが、キリストではあり得ない。かれは最初からヨブとして生まれたのであつてキリストとしては生まれなかつた。

バプテスマのヨハネはつひにキリストになり得なかつた。かれはキリストとして生まれなかつたからである。

アシシのフランシスは誤つていつまでも遊蕩兒の群にはいつてゐたとしても、かれはその人々の間に聖フランシスの愛を生かし得たであらう。キリストはたとへ賭博者の群に墮

ちて行つたとしても、神の子の愛を周圍の人々の間に成長させ得たであらう。かれ等は生まれながらの神の子であつたがゆゑに。

もし、トルストイが或ひはパウロが誤つて收稅吏や賭博者の群に墮落しつゞけたとしたら、その結果はどうであつたらう！

西行或ひは芭蕉のやうな人たちは、いづれにしてもあのやうな漂泊の生涯に入ることが最も自然的な人間として生まれたのではなかつたか。卽ち生まれながらの漂泊者ではなかつたか。

「生まれながらの」といふ言葉の尊さがおぼろげながら、このころ分つて來たやうな感じがする。

人間のいろ〳〵な外的な努力といふものが、その「生まれながらの」本質に對して、ほとんど何の力をも持つてゐないといふことをも感ずるやうになつた。

したがつて、外的な努力を加へる前に、先づ眞實に「生まれながらの」自分自身の姿を見出すことが何より大切なことであるといふことを考へずにはをれない。

どんなにあがいてもトルストイになれない人もあるし、そのやうな「生まれながらの」

人がトルストイの眞似をすればずゐぶん僞善者にもなりかねないし、西行や芭蕉に似通つた「生まれながら」を持つた人があるとしたら、その人はやつぱりかれ等の歩いた道を歩くより他に、ほんたうな生き方はないのではないかと思ふ。

萬人の人と偕に生きるのも、たゞ一人のうちにのみ生きるのも宿命であると思ふ。かれはかれ以外には歩き得ない。宿命である。

×

或る時は死といふものが非常に恐ろしく思はれることがある。生きてゐることがたまらなくうれしく思はれることがある。たいていそれは美しいのびやかな自然のなかに自分を見出し得た刹那である。漂泊の旅に於いてゞある。

或る時に死をさまで恐ろしく思はないことがある。生きてゐることをさまでありがたく思はなくなることがある。たいていは人間生活の渦中に呼吸しつゝある自分自身を見出し得た刹那に於いてゞある。

私は數日前戸山ケ原を通り拔けた。そして久し振りにあの櫟林の中に日向ぼつこをしてゐる青年たちを見た。まだ秩父あたりの山には白い雪が積つてゐた。まさに芽生えんとす

る武藏野の曠原をへだてゝ遠山の雪を見たゞけでも私の心は無性に躍るのであつた。空は文字通りに瑠璃のやうに輝いてゐた。それはこの十數年來見たことのないほどの美しい空であつた。地震以來東京の空はたしかに美しくなつた。

私は去年見た薩摩の空を思ひ出した。かつて見た對馬の空を想ひ出した。美しい空の下に生くることのいかに幸福であるかをつくづく感じさせられた。

人間は齡をとるにつれて星を見ることがすくなくなる。あわたゞしい生活に追はれ、人間的な生活の屈托に囚へられた私たちの眼は、いつも暗い地上を見つめがちになつてしまふ。生きてゆくために人は人といかに相憎み、相嫉み、相陷れなければならぬか。人はパンを奪ひ合ふところの犬を笑ふ。けれども人と人と集まるところには、それ以上の醜いパンの爭奪がある。人間の爭ひはお體裁を作つてゐるだけに一層醜い、一層陰險である。

小ひさいにせよ、大きいにせよ、いやしくも一つの集團生活のなかに生きてゆかなければならぬ以上、私たちはそこに愛よりも、より多くの憎みを苦しまなければならぬ。

この大きな都會の朝と夕暮れとに立つて見るがいゝ。

朝の電車に群がつてゐる人々の顏のあまりに蒼白いのに驚くであらう。かれ等は今日の

るのだ。

一日の仕事の苦痛を恐れてゐるのではない。今日の一日の人と人との憎惡にをのゝいてゐ

黃昏に見るかれ等の顏はさらに蒼白である。かれ等は一日の人と人との憎惡と陷穽に疲れ、喘ぎつゝ歸つてゆく。

學校の教師であれ、官吏であれ、會社員であれ、勞働者であれ、いやしくも人に使はれ、人と共に働かなければならぬ人であつたなら、そしてその人が正しい感受性を持つてゐる人であつたなら、正直であることを欲し、美しい心に生きることを欲する人であるならば、恐らく殆んど每日每夜のやうに、その集團生活の醜さから逃れんことのみを思ふであらう。

神は田園を作り、惡魔は都會を作つたといふ言葉は恐らく眞理であらう。神は孤獨を作り、惡魔は集團を作る。

黃昏の町を步いて見るがいゝ。

そこには俯向きがちに步いてゐる男を屹度見出すことができる。

黃昏の川端を步いて見るがいゝ。

そこにも靜かに流れを見つめつゝ步いてゐる男を發見する。

黄昏のバアに、黄昏の街路樹の下に。

かれ等は星を見ない。生活の屈託、生きるための人と人との憎みのためにかれ等の眼は重く涙に鎖されてゐる。

もし親がなかつたら、もし妻がなかつたら、恐らくかれ等はその夜かぎり再び集團の生活へは歸らなかつたであらう。

親を思ふがゆゑに、妻子を思ふがゆゑに、かれ等は憎みつゝも、呪ひつゝも、醜い集團生活の中へ歸つてゆかなければならぬ。小ひさい、しかしながら尊い殉教者たちが黄昏の電車の前に群がつてゐる。

星はいつもかれ等の群の上にさゝやいてゐる。しかしかつてかれ等のうちの一人の男も星を仰ぎ見ることもしない。

かれ等の不幸なる視線は暗い地上に冷たい土に縛られてしまつた。

まつたく、人間は一日一日と空を見ることをしなくなる。空の美しさをすら忘れてしまふ。

近代のあらゆる知識が生んだこの大きな都會の夜のすべてのアーク燈を持つことより

も、靜かな夜の一つの星をもつことがもつと幸福なことではないのか。
王宮の一室を持つことよりも、柔かな草の上に仰臥して天と地のすべてに抱かれることがもつと幸福なことではないのか。
私たちは青空のいかに尊きかをほんたうに考へたことがあるか。
私たちは太陽のいかに尊いかをほんたうに考へたことがあるか。
五月の朝の微風に涙ぐむほどの感謝をさゝげたことがあるか。
黑い土を破つて芽生えする一莖の草花に神祕なる大自然の愛のさゝやきを聽いたことがあるか。

「身を分けて見ぬ梢なく盡さばやよしのの山の花のさかりを」（西行）

私たちは春の花に對して、かほどまで、貪欲（どんよく）になり得たか。
太陽に對して、青空に對して、五月の微風に對して、一莖の草花に對して、私たちはあまりに無慾である。私たちは自然に對してもつと〳〵貪る心を持たなければならぬ。
芭蕉は雲と鳥に對して貪慾であつたがために一生を旅に送つた。

「佛には櫻のはなを奉れわが後の世を人とぶらはば」（西　行）

西行はその死後までも櫻の花と相別れんことを惜しんだ。かほどの自然に對する執着を持つたればこそ、かれは一生を旅に送り得たのであつた。

「花見ればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりけり」（西　行）

ほんたうに花を愛する人にしてはじめてこの心を掬むことができるであらう。ほんたうに人生の無情を觀ずる人にしてはじめてこの寂しさを感ずることができるであらう。

×

芭蕉に秋の句多く、また秋の句のすぐれたるもの多きに對して、西行に春の句多く、また春の句の人の心を惹くもの少からざるも面白い現象である。

このことについては私はかつて書いたことがあるが、芭蕉と西行と比べて芭蕉は秋の日の靜寂を思はせ、西行は春宵のものうき涙を想はしめる。芭蕉の句は時として釋迦を、西行の歌は、あまりに多く解脫し得ざる蕩兒の佛を聯想せしむる。しかもその子供らしさに

於いて、匠まざる句と歌に於いて相似たる神品の薫りを放つてゐる。

西行の歌には玉石相混じたる俤がある。芭蕉にはそれがすくない。芭蕉は西行以上に藝術に對して一層神經質的であつたやうだ。

西行は世を捨てたと云ふものゝどこまでも死を恐れたやうである。花を見るにつけても月を見るにつけても。

「花にそむ心のいかで殘りけん捨果ててきとおもふ我身に
わきてみむ老木は花もあはれなり今いく度か春にあふべき
いとふよも月すむ秋になりぬればながらへずばと思ふなるかな
捨ていにし浮世に月のすまであれなさらば心の止らざらまし」

老木をいたむ心のうちには、すべての生けるものゝ死をいたむ心が動いてゐる。かれは死の恐れをのがれんとして、つひにのがれることができなかつた。

世を捨てたと思ひながらも、かれは自然を捨てることはできなかつた。かれにとつて自然はあまりに美しかつた。あまりに蠱惑的であつた。かれは自然の享樂者であつた。

芭蕉を見る時、私たちは芭蕉が無常を凝視し、いかに靜かに無常の中に尊き日を、寂し

き自然を樂しみ得たかを感ずることができる。かれは寂寞を主(あるじ)とし、悲しみを主とし、孤獨を主(あるじ)として、なほこの靜かなる無常の中に悠久なるものを樂しみ得たやうに思はれる。

死はかれにとつて寂しいものではあつた。しかしかれは死を恐れなかつた。靜かに死を待つことができた。

「花にうき世我酒白く飯黑し
　世にさかる花にも念佛申けり
　奈良七重七堂伽藍八重ざくら
　花の山袈裟落されな坊主達
　初ざくら折しもけふはよき日なり
　さくら狩きとくや日々に五里六里」

そこには落花に對する悲しみよりは、さかりの花と偕(とも)に樂しみ、偕に醉はんとする世間なみの春の心が動いてゐる。あたゝかなユーモアさへ流れてゐる。あるがまゝの自然、無常そのものゝなかに自然を樂しむ心が動いてゐる。

「野ざらしを心に風のしむ身かな

秋かぜや藪もはたけも不破の關
猪もともに吹るゝのわきかな
死もせぬ旅寢の果よ秋の暮
馬かたはしらじ時雨の大井川」

最も寂しかるべき秋の自然の中にあつても、かれはその寂寞を主として靜かに寂寞を享樂してゐる。靜かに人生の無常を觀ずることによつて、さらに深く無常の悠久さを享樂してゐる。

かれは死に勝ち、無常に勝ち、寂寞に勝つた。
死も、無常も、寂寞もかれの生活内容の一部分として無くてはならぬものとなつた。
かれは死を、無常を、寂寞を稜りあつめてその魂の糧とした。
悲しみを知る者にとつて、悲しみなき世界はいかに空虛であらう。
寂寞を知れる者、無常を知れる者にとつて寂寞なき日、無常なき日はいかにブランクなものであらう。

×

故郷を思ふ日私の胸は傷む。
父がたゞ一人で夜具にくるまつて寢てゐるであらう。私が送つてやつた毛皮の帽子を眼深かに冠つて寢てゐるであらう。
子供らをみんな旅に出してしまつた父が、母の佛壇の前に夜も晝も眠つてゐるであらう。
眼がさむれば茶の間に來て酒を飲んでゐるであらう。
朝も晝も晩も、眞夜中も。父は起きて來ては酒を飲んでゐるであらう。
私は故郷に歸るたんびに酒を節することを父にすゝめた。そのたんびに父と喧嘩もした。
子供らを旅に出してしまつた父がどんなにか旅の娘らのことを案じてゐるであらう。
父よ、眠ることがあなたには救ひなのか。
醉ふことがあなたには救ひなのか。
父よ、子供らを育てゝしまつて、妻に別れて、たゞ一人で故郷の家に酒を飲むあなたの老年の心が、私に今幾分わかつて來た。
今度故郷に歸る時、私は灘の酒を買つて行かう。
父よ、そしてあなたと醉ひつぶれるまで飲まう。

×

備後の兄よ。
山陰境の山にはまだ雪が消えがてに残つてゐるであらう。
放牧の牛が枯草の上に眠つてゐるであらう。
あなたは小松山をあさつて雉を追うてゐるであらう。
あなたは今も自分自身に向つてかう言つてゐるであらう。
「青山を見い。白雲を見い！」
今はその青山もまだ冬枯れの中に眠つてゐるであらう。
今はその白雲もまだ雪の山に眠つてゐるであらう。
あなたが生涯の事業の第一着手として作つた大きな門だけが、冬枯れの草の中に青山白雲を背景として立つてゐるであらう。
蜜蜂の巣は雨にさらされ、葡萄畑は雑草の中に蕭條たる冬を眠つてゐるであらう。
双鬢すでに白きあなたはなほ美しい理想を描いて門の前に立つてをゐでゞせう。
遠い山が瀬戸内海の夕照を紫色に反射する時、あなたは泊夫藍の畑に立つて夕焼の空を

見ておゐでになるでせう。
破れたる白壁の倉が
煤けたる破風が
あなたの眼にどんなに映るでせう。
あなたは今日も恐らく半日をあの荒涼たる西の桑畑にたゝずんで、人生についてお考へになつたでせう。
あなたは恐らく今夜もあのお寺の庫裡のやうな廣い煤けた母屋の爐の傍で悠久について瞑想してをられるでせう。
姉が經濟上の問題で一人胸を痛めてゐる時も、あなたは自分ひとりの哲學を考へておいでになるのでせう。
恐らくあなたは今日の午後葡萄畑に山の兎が眠つてゐたことを姉にお話になるでせう。
姉が馬鈴薯(さんどいも)を爐の中で煮ながらあなたの哲學を聽いてゐるでせう。
村の人たちが、絲を繰つたり、藥草を刻んだり、町に出す米をごまかしたりしてゐる時に、あなた方だけが美しい夢を、永遠を、語つておゐでになるでせう。

村の人たちは恐らくこの夜中にも、今度はあなたの東の山が賣物に出される日を想像してゐるでせう。

或ひは沼の下の田が誰かの手に渡さるゝ日を。

あなたの畑がだん〳〵狹くなつて行つても

あなたの山がだん〳〵小ひさくなつて行つても

あなたは悠久を思ひ、人生を觀じながら、寂しい微笑を爐の火に映しておゐでになるでせう。

恐らくこの夜中に山陽線の汽車は旅人を載せて山一づ隔てた線路を走つてゐるでせう。よし窓を開いて星の下にあの山を見た旅人があつたとしても、かれはどうして山一つ彼方の草の中に美しい夢を追ふ老哲學者が住んでゐることを想像することができませう。

私は夜汽車の旅に、窓に映る山沿ひの孤燈を見るごとに、よくあなたを思ひ出します。燈のあるところ必ずあなたのやうな美しい夢を追ひつゝある哲學者を見出すでありませう。燈のあるところ必ず人間的の苦惱がありませう。同時に悠久を思ふ隱れたる哲學者が生きてゐるでありませう。

あなたを思ふ時、私の眼には冬枯れのすべての山も、町も尊く映つて來ます。
そこに隱れたる幾多の詩人や哲學者を思ふがゆゑに。

×

眞理の尊きことよ。
しかも眞理の名によつていかに多くの人々が自己を最も正しとし、いかに多くの人々を鞭打ち、いかに多くの人々を批評し、いかに多くの人々を殺しつゝあることよ。
眞理はさまで容易にすべての人々が所有し得るものであらうか。
キリストは眞理を見出し得たであらう。
釋迦は眞理を見出し得たであらう。
イブセンの「ブランド」は雪の山の中にたゞ一人の愛兒を亡ひ、妻を失ひ、しかもなほ眞理を見出し得なかつたかれは、かれ自身をさらに深く雪の山の中へ抛げ棄てなければならなかつた。
眞理を見出すことのいかに困難であるべきかを想像することができる。
眞理を口にすることのいかに恐るべきかを知らなければならぬ。

さらに眞理の名によつて人を裁斷することのいかに恐るべきかを。
春日遲々。人間と人間のみが相憎み、相爭ふ。

×

私は春の日の旅を愛する。
伊豆の山、久能山、奈良、法隆寺、近江の寺々を愛する。
京都の春の夜街を歩くことを愛する。
春の日に大井川を下ることを愛する。
春の日に木曾川を下ることを。
私は春雨の京都の街を歩くことを愛する。京都の町を歩む人の靜かな下駄の音を。
春雨の大和路の巡禮を愛する。
菜の花と麥の畑のところどころに罌粟（けし）の花の白き法隆寺への道を愛する。
私は旅の宿の孤獨を愛する。殊に雨の夜の宿を愛する。
そこでは私はほとんど絶對の孤獨と沈默とを持つことができる。
あわたゞしい生活のために忘れられてゐた過去の自分のなつかしい姿が私の心にしみじ

みとよみがへつて來るのも旅の宿である。

自分といふものをほんたうに考へさせられるのも旅の宿である。

春雨の夜の旅の宿は、嚴かな禮拜堂（らいはいだう）よりも、一層私の心を落ちつかせる。

電車もなく、自動車もない田舍の町を靜かに一人で歩む旅の夜は殊にうれしい。

低い軒の下に戸は鎖されて、奥のかすかな燭のまたゝきが雨に濡れた往來までさして來てゐることもある。

そのやうな時、私はかつて夢の中にそのやうな町を歩いたことを思ひ出すこともある。

たゞ一夜二夜のゆかりであつても、その宿の人々に對して、その靜かな町の人々に對して、何かの宿命的なゆかりでもあるやうな懷しさをしみ〴〵と感じさせられることがある。

たいていの町には靜かな川が流れてゐる。あてもなく夜の町を歩いて道を迷つてゐても、いつの間にか同じ川岸へ出て來る。輕い安堵（あんど）の心が湧いて來る。

橋欄によつて水の音を聽きながら來し方行く末の旅を思ふのもなつかしい。

雨上りの空にはおぼろな星の影が雲の切れ目から覗いてゐる。田舍の町の星の光りは殊に美しい。

このごろはたいていのステーションには乘合自動車があるが、旅にはまだ古風な乘合馬車の方が野趣があつていゝ。

雨上りの石ころ道を蹴つてゆく蹄の音も旅なれば興深く聽かれる。乘り合せた旅の人にもかりそめの親しみを抱く。麥畑から吹いて來る四月の柔かな風が旅人の頰を撫でゝ椿の列樹をくゞつて麥畑へと吹く。

「いざともに穗麥くらはん草枕」

芭蕉の句の思ひ出さるゝのもがた馬車で走る春の野である。

陽炎につゝまれ、春光に溶け、野火を望みつゝ走る旅は思ひ出すだけでも胸を轟ろかす。雲雀啼く青草原に立ちて、遠山の雪を見る時、一番に胸を打つものは「生きてありき」といふよろこびである。

もし私たちの世界に美しい人の心がなかつたなら、何で生きてゐることが嬉しかららう。

もし私たちの世界に春の微風がなかつたら、小鳥の唄がなかつたら、遠山の雪がなかつたら、春の山の野火がなかつたら、谿川のせゝらぎがなかつたら、何で生きてゐることがうれしかららう。

春！　生きる時は今だ！

私たちにめぐまれた命のよろこびに胸の血を波打たせる時は今だ。

義朝の墓も、小督の塚も、重衡の蘭塔も春の光りに供養せられてゐるであらう。蓮華草も咲いたであらう。芹の葉も薫るであらう。

麥の畑の徑をめぐり、蠶豆の花をいとしみつゝあてもなく春の草原を歩いてゐる間に、私たちは、たま〳〵古きゆかりの塚を見出す。或る時は美女の塚を、梟雄の塚を、力士の塚を、旅に死せる人々の塚を。あはれな物語りを傳へられたる塚を。すこし氣をつけて見ると名もない木の上にも必ず小鳥が啼いてゐる。或ひは啼きつかれては美しい翅を休めてゐる。

名もない草の葉を春の柔風が吹いてゐる。

名もない花が古い塚や、朽ちかゝつた草屋根をかざつてゐる。

一塊の土の上にも陽炎がゆれてゐる。

私たちが長いこと忘れてしまつてゐた燈心草が小川に沿うてすく〳〵と簇つてゐる。

川を流れてゆく小ひさな木片にも春の光りが踊つてゐる。

紅い椿には繍眼兒が
白膠木(ぬるで)には鸒(うそ)が
水松樹には四十雀が

小學時代からすつかり忘れてゐた自然が私の胸に、再び取りもどされて來る。
もし詩人ウオーヅオースがうたふやうに、少年期は人生の最もめぐまれた時代であるとするならば、かつて生まれざりし以前の世界の天福に充たされた日の俤を持つてゐるものとするならば、春の日の旅人はよし、しばしであるとしても、人生至上の天福を再びすることができるのだ。旅は人をして少年期によみがへらせるから。

旅人は春の野を歩む。
かれ等の道の兩側には光りがためらうてゐる。かつて天上を照らした光りが。
かつて天福の世界にめぐまれた微風が、空の鳥が、空の色が、最も貧しき旅人の上にほほゑんでゐる。

春あればこそ人生は生きてある價値を見出す。
春風に吹かるゝがた馬車の貧しき旅人！　お前は人生で最もめぐまれた日を見出してゐ

るのだ。

×

私は二三日前とげぬき地藏の前を歩いてゐた。
竹で編まれた小ひさな花籠を山門の前で賣つてゐる男があつた。
私は三十年前の自分をそこに見出した。
竹で編まれた花籠。紫や青や赤の市松模樣に染められた花籠。
私はあの花籠をどんなにか欲しがつたであらう。
削り立ての竹は銀のやうに春の光りにかゞやいてゐた。
削り立ての竹は幼い子供の心に遠い世界を夢みさせる不可思議な香を、春の風に漂はせてゐた。
麥畑に働いてゐた母にせがんで私は幾度花籠を買つて貰つただらう。
人生のすべての幸福が、春のすべての光りがあの小ひさな花籠に盛られてあつた。
櫨の土堤の下で、いつも赤い股引をはいてゐた大きな男の栗毛の馬が死んだ時、土堤の下で火を焚いて人々は馬をとりかこんでゐた。

蠶豆の花が咲いてゐた。
人々は蠶豆畑の傍に馬を埋めた。
私は花籠を抱へたまゝ馬のお葬ひを見てゐた。
貧乏な家の子供として私は垢染みた襤褸を着てゐた。
幼な心にも母がいつも金の工面に涙ぐんでゐるのを感じたこともあつた。
しかしあの頃は一番幸福であつたやうに思ふ。
たゞ一つの花籠に人生のすべての幸福が盛られてあつた。
またあの頃は飽屑で作つたチャルメラを買つてもらつたことを覺えてゐる。
春の音といふ音が、あの赤く青く染めたチャルメラの中から流れて來るやうに思はれた。
菜畑の間を、濠に沿うてどんなにチャルメラ賣りの男の後を追つかけて歩いたであらう。
父は怒る時は私の頭をなぐりつけたが、機嫌がいゝ時はよく肩馬に乘せてチャルメラを買つてくれた。
私がチャルメラを吹く時、母はよく默々として菜畑で働いてゐた。
春の風が吹いても滅多に母は笑はなかつた。

しかし世界中で私は母が一番好きであつた。

×

私の故郷ではどこの町に行つても土でこしらへた鳩が、葭簀張りの店で賣られてあつた。

赭い土で作られた素燒の鳩は白い胡粉や單調な紅色の繪の具で塗られてあつた。

春の日を浴びた土の鳩は雨戸を横にして作られた臺の上に、きよとんとした可愛い丶眼を瞠つてゐた。

お尻の方に唇をあて丶吹けばほう〳〵と山鳩の聲をして鳴いた。

伊太利の Ocarina といふ陶土の笛を聽いたことがある。その形が鵞鳥（Oca）に似たところからこの名が出たと辭書には書いてあるが、幾つかの歌口もついてゐるし、私の故郷の土の鳩よりは幾分進んだ玩具であるが、私の故郷の土の鳩と、その野趣に於いて、單調さに於いてすこぶる似てゐる。

伊太利では森の中で牧童たちが吹くといふことである。牧歌的な感じを抱かせるものである。

故郷の土の鳩もその單調な聲、その單調な形に於いてすこぶる鄕土的であり、牧歌的で

ある。

セルロイドやいろ〳〵な進歩した玩具が田舍の町の店頭にもかざられて來るので、このごろでは土の鳩はだん〳〵すくなくなつてしまつた。

私は春の田舍町で吹いた土の鳩の音を愛する。

あの胡粉で塗られた翅を愛する。

ほう〳〵と土の鳩を吹けば筑紫の春がよみがへつて來る。

筑紫の春の風が、春の光りが、少年の日が。

伊太利の田舍の子供らは春が來れば今もあの Ocarina を吹いてゐるであらう。

筑紫の麥畑の中では今も子供らはあの土の鳩を吹いてゐるであらう。

春の風が吹けば私は筑紫を思ふ。

花籠を思ふ。チヤルメラを思ふ。土の鳩を思ふ。

私がほう〳〵と土の鳩を吹いてゐた時、默々として麥の畑に働いてゐた母を思ふ。

筑紫の春を今日この刹那に歩いて見たら屹度

あの黄金の菜の花の平野に——まつたく南國の菜の花はかゞやいてゐるが——

あの限りもない麥の平野に
春の微風が吹いてゐるであらう。
昔のまゝの私が、襤褸の着物を着て、げんげ畑の傍で土の鳩を吹いてゐるのを見出すであらう。
麥の畑で私の母が默々として働いてゐるのを見出すであらう。
三十年前の母と私は、今日もあの筑紫の野に寂しい眼を瞠(みは)つて春の光りを浴びてゐるであらう。
春が來るごとに恐らく永遠に
私は故鄕のげんげ畑で土の鳩を吹くであらう。
亡(な)くなつた母があの麥畑で默々として働きながら、私の鳩の聲を聽いてゐるであらう。

伊賀の旅

四國、中國の旅の到るところ幾十年來の旱魃だといふことで、八月になつてもまだ田植もせず荒れたるまゝに捨てられた田もあつた。田の隅に井戸を穿ち、一本の桔槹に一家總出で、女も子供らも焦くやうな日に照りつけられながら水を田に揚げてゐるところはまだ慰めんすべもあるやうに思はれた。美しい伊豫讃岐の山々を背景として七十にも餘つたほどの媼が一本の桔槹の綱に縋りついて、赤く燒けた稻田を見つめてゐるのは言ひやうもなくあはれであつた。

大和法隆寺近くに友人を訪ねた日も大和川には一滴の水すら見なかつた。京都に歸つても、三條の橋欄に凭れて鴨川の夜風を納れてをれば、京都をめぐる山々に雨乞ひの火が闇の空に燃えてゐるのを見かけた。

今年は比叡にも登るつもりであつたが、その夜からひどい嵐が京都の町を吹いて、三條四條の大通りのアカシヤの並樹の葉が地に叩きつけられるほどであつた。八十日振りの雨

だ、慈雨だといふので誰も彼もその雨を心から喜んだ。

朝になつて雨は餘程小降　になつた。しかし比叡も鞍馬も深い雨霧にとざされてゐた。ともかくもこゝ二三日では比叡に登れさうもない。急に豫定を換へて伊賀上野に芭蕉の故郷を訪ぬることにした。

麩屋町の柊家を出て、三條小橋から七條行きの電車に乘る。鷗外の小說に高瀨川を下る舟中の囚人と役人の物語を書いたものがあつた。囚人は若い男であつた。三條小橋に來て電車を待つ間、私はよく狹い溝といつた方がいゝくらゐの、そして家々の軒下を流れてゐる淺い高瀨川の水を眺める。

ほうほうと、初秋の町を托鉢(たくはつ)する建仁寺の僧たちが三人三條の大橋を渡つて來た。七條で電車を捨てゝ、ステーションの方へ急いだ。わづかに手の甲に感ずるほどの細雨を伴うて雲が低く東山あたりの塔をかすめてゆく。

廣場で七つ八つぐらゐの一人の巡禮が後を追うて來た。銀貨一つ手にわたして、「御咏歌をうたつておくれ」と言へば小娘は笑ひながら別れてゆく。菅笠はいゝが、ゴムの靴を穿いてゐるのが可笑しい。

奈良から夕方の汽車に乗るたんびに、伏見あたりを通るころになれば京都の夜の町が車の窓の左手に見える。あのあたりから見た京の夜の町はいつも面白い。朝京都を出て奈良地方へ出かける時は、またあの附近で、右の窓から振りかへれば東寺の塔が見える。四月、菜の花のころは、畑をへだてゝ殊にいゝ眺めである。

今日も東寺の塔は雨に煙つて見えた。

木津川の土堤の下に重衡の墓をいたみながら、關西線に乘りかへる。私にとつてはこの線は初めての旅である。

汽車は木津川の左岸に沿うて喘ぎ登る。右も左も美しく繁つた松山、杉山である。時として黝（かぐろ）い岩のごとく聳え立つた孤峰もある。柔かな山を負ひ、清冽な流れ、白い磧を前に控へ、杉や竹の林に抱かれた小ひさな村里が木津川の兩岸を點綴してゐる。壁は白く、屋根の勾配も形もきはめて落ちついてゐる。一つ一つの小ひさな村が自然に藝術的な均齊（きんせい）や調和や落ち着きを感じさせる。笠置の溫泉村の下には深い淵が淀み、ボートを浮かべて遊んでゐる人たちもあつた。

汽車は木津川の左岸より右岸に移り、山を縫ひ、高原を走る。山が迫り、水が急になる

につれて山は一層美しく、空は海のごとく輝く。あたりの風光が何となく、去年下つた球摩川に似てゐる。

汽車は歩一歩、大和と伊賀の國境に近づく。振りかへれば大和の道は斜に木津川に沿うて、麓へ麓へと消えて行く。私は未だかつて大和と伊賀境の高原のやうに美しい姫百合の咲きみだれた草原を見たことがない。青い草の中に燃ゆるばかりの姫百合が咲いてゐる。桔梗が咲いてゐる。

谿の奥、岩角の紅葉が白い瀬に臨んで燃えてゐるところもある。月ケ瀬まで二里、三里などといふ標木が見える。幾つかの高原のステーションを通る。

人を恐れることを知らぬのであらうか、一羽の鴉が、直ぐ鐵道の傍の三四尺の稚松に啼きながら、汽車を見送つてゐる。

木津川の美しい水と山と村とを見つゝ、登りつくしたところに、大和を越えたばかりの伊賀の高原がある。

西には山一つ越ゆれば奈良である。北に山一つ越ゆれば近江である。京である。芭蕉が近江にゆき、奈良に遊び、京にさ迷うたことなどをさまぐ\に想ふ。

鈴鹿は雲につゝまれてゐた。東西南北みな秋の風に吹かれた山にとりかこまれた高山といふ感じが、伊賀を見た刹那に私の胸に湧いた。

山沿ひの上野町の停車場から、さらに町までは小ひさな輕便鐵道の連絡があつたのだが、それを知らなかつたので俥を雇ふことにした。ステーションから十二三町を離れて、桑の畑や稻の田をへだてゝ一連の丘阜(きうふ)がある。北方は美しい杉の山になつてゐる。白鳳城といふ昔の城の址といふことである。その城址の山を北に負うて丘の上に擴がつてゐるのが伊賀上野の町である。上野町全體が一つの纒つた丘の上の町になつてゐる。ステーション前の廣場を下りて、俥は稻と桑の間を一直線に白鳳城の丘に走る。城址に近づくにつれて道はまた上りになる。梶棒の下に結びつけられた犬が喘ぎつゝ俥を曳く。

上野町の西はづれ、丘を下りたあたりに木立が見える。

「あすこが伊賀越の道になつてゐます。荒木又右衛門の仇討はあの邊です。」俥夫は得意になつて、荒木又右衛門の仇討の話をして聽かせる。吉野山の武藏坊辨慶の話、笠置山の後醍醐帝の話と俥夫は白鳳城に着くまで少しも話を休ませない。

白鳳城跡の杉林を通り過ぎると、上野の町が見える。繭を小山のやうに積んだ家がある。

くづれかゝつた土塀にかこまれた家がつゞく。修竹の藪が多い。

「こゝは丸の中です」と俥夫は言ふ。どこにも昔の城下に見出さるゝ士族町である。

芭蕉の兄松尾半左衞門の邸もこの近くにあつたのであらう。城孫太夫の邸も。

「さまぐ櫻」もこの近くに保存されてあることを聞いてゐたが、時間がないので眞つ直に松尾家の菩提寺愛染院に俥を走らせる。

愛染院の前に俥を止める。塀を越して芭蕉の葉が眼につく。近くの子供らがめづらしげに門の前にむらがる。

本堂からは讀經(どきやう)の聲が聞えて來た。

堂の前を左に、さらに右して竹にかこまれたさゝやかな草堂がある。堂の中に丈二尺ばかりの自然石がある。芭蕉の故郷塚である。浪花から淀川を溯つて伏見に出で、狼谷を越えて近江義仲寺に芭蕉の亡き骸を運んだ時、伊賀上野から駈けつけた土芳、卓袋が芭蕉のかたみを抱へて來てこゝに葬つたのである。

「家 は み な 杖 に 白 髪 の 墓 詣」

愛染院の門をくゞる時、甃石(いしだゝみ)を踏む時、御堂の前にぬかづく時、第一に思ひ出さるゝの

ばこの句である。鬢髪やゝ白き芭蕉の痩せぎすな姿が修竹の前に浮かぶ。

讀經を終つた住持に案內せられて庫裡と本堂の間の廊下の薄暗いところに芭蕉の位牌を拜し、芭蕉の像を觀る。芭蕉が死ぬる一年前に弟子と二人して作り上げたといふ塑像である。朴々たる老人である。好々爺である。梅室？　が刻んだと傳へられてゐる木像はずつと見劣りがする。

竹叢を背景とした芭蕉の故鄉塚を辭して門を出づ。新らしい塔婆の前に立つて讀經してゐる住持の袈裟が苔むした碑の小蔭に見えた。門前では俥夫がビスケツトを俥を曳く犬にやつてゐた。雁來紅の秋風になぶられてゐるのが、忘れられたやうな古町の寂しさを一層深くしてゐた。

壞れかゝつた土の塀、低い武家風の門の奧には柔かな修竹がつゝましやかに邸々をつゝんでゐる。或ひは大和へ或ひは近江へ山を越えて走る初時雨が山々につゝまれた伊賀の町を一薙ぎに橫切る時、修竹を打つ時雨の音はどんなにか寂寞の詩人の心を打つたであらう。

上野の町はまつたく竹の美しい町である。竹叢の寂しい町である。修竹のそよぎの靜かな町である。

「降ずとも竹植うる日は蓑と笠」

東西南北に山を控へた高原の伊賀の町の人たちは、國境をめぐる山々の雨雲を氣づかひつゝ竹を植ゑたであらう。竹植うるといふ句の感じは修竹につゝまれた伊賀の町に來てはじめて實感となつて浮かぶ。

俥を南へ走らせる。たいていは軒の低い平家である。京都の横町を聯想させる感じのいい、落ちつきのある、明るいきちんと纒つた町である。晝ながら、旅人の胸には黄昏の街をゆくやうなわびしさが湧く。

さゝやかな冠木門（かぶきもん）の奥に修竹の林があり、中に草庵めいた家を見出すこともある。

「冬籠またよりそはん此はしら」

故郷に歸つて、冬を送つた芭蕉は恐らくそのやうな竹林の中に、自然木の床柱に凭りかかつて旅の疲れを憩うたであらう。旅に聽いた時雨の音を思ひ出したであらう。凩の聲に耳を傾けたであらう。

無名庵、瓢竹庵、東、西麓庵、蓑蟲庵をはじめ、如是庵、半残亭、風麥亭等算ふれば、この小ひさな秋の日を浴びた修竹の中に幾多のゆかり深い枯枝廢壁を遺してゐることであ

らう。

「長閑さや櫻の上にちる櫻
さま〴〵のこと思ひだす櫻かな
土手の松花や木深き殿作り
凪いろやしどろに植ゑし庭の萩
枯芝やまだ陽炎の一二寸
丈六に陽炎高し石の上
故郷や臍の緒に泣く年のくれ」

これらの句が作られたのはこの丘の上の靜かな町であつた。
そこにもこゝにもこんもりとした竹の林があり、傾きかゝつた門がある。鷄頭の花の眞つ紅な間にレグホンが餌をあさつてゐる家もある。
蓑蟲庵は上野町の南、上野町を抱く平原の丘の端にある。
愛染院から商賈の軒に沿ひ、幾曲り俥を走らせて蓑蟲庵に着く。雨催ひの雲が時々上野町の空を低くかすめて飛ぶ。

蓑蟲庵の南にも今は幾軒かの家が立ち並んでゐるが、昔は庵は丘の端になつてゐて、そこからは遠い山が伊賀の平原をへだてゝ眞正面（まとも）に見えたらしい。今でも縁に凭れば木立を通して南の山が見える。

いつ誰住むともなく古びたる籬、いつ開かるゝともなく鎖されたる門の前に車をとゞめて、左り手に片寄つた小門から案内を乞ふ。五十ばかりの女があわたゞしげに走り出て來て、庭に案内してくれた。外庭には秋草の中に秋茄子が赤く枯れてゐた。

柴折戸をくゞつて中に入る。落葉朽葉二三寸が程に積もり、やゝもすれば飛石を埋める。梅があり、櫻があり、百日紅（さるすべり）がある。芭蕉手植の松がある。一抱へほどの松である。朽葉につゝまれた池があり、池には水草の花が暗い底にまどろんでゐる。小ひさな橋がある。庭の東南隅のやゝ小高きところに亭があり、亭の前に芭蕉遺愛の燈籠がある。細長く痩せて、苔むしてゐる。

芭蕉が夜もすがら月を眺めて土芳と語つたであらう濡れ縁も、沓脱ぎもそのまゝになつてゐる。濡れ縁に腰を卸して空を見れば、小暗きまでに繁つた木立を通して靜かに秋の雲が動き、秋の聲が流れる。

水を含んだ老木の枝には蝸牛が眠り、蓑蟲が夢みてゐる。蝸牛も蓑蟲も芭蕉がこの庭を歩いた日以來眠りつゞけてゐるのであらう。それほど庭は暗く、濕り、靜かである。一葉の地を打つ音すらも秋を深めるほどに。

「今宵たれ吉野の月も十六里」

この句を讀んだ芭蕉の心も、こゝに來て、この濡れ緣に腰を卸して、蝸牛と蓑蟲の眠りを見る時、はじめて想像することができる。

まつたくこの一句の味も、伊賀の蓑蟲庵を訪れてはじめて味ふことができたやうな氣がする。

「みの蟲の音をきゝにこよ草の庵」

蓑蟲庵は蓑蟲の音を聽いて芭蕉を懷ふにふさはしい庵である。

あわたゞしい旅には蓑蟲の響を聽く餘裕もない。

再び俥を走らせて上野町を一直線に北に橫切る。めづらしげに竹林の間から走り寄る子供らもある。

赤い土を掘りかへした竹林の蔭に古い屋敷風な家が見える。さつき見た繭を積んだ家の

前を通り過ぐれば間もなく白鳳城跡の杉林である。俥は稲田を隔てた彼方の山の麓のステーションへと一直線に走る。七八軒の家が小ひさなステーションを圍んで山の裾の小高い丘に並んでゐるのがうらさびしい。

鈴鹿はまだ雨雲に隱れてゐる。

ステーション前の坂を、荷車を曳いて下つて來た五十ばかりの男が、愛染院の芭蕉の像に似てゐたのを振りかへつて見た。

私は伊賀の山を越えて、再び大和へかへらなければならぬ。

日は大和境の山に暮れかゝつた。

壺

片田舍の小驛からさらに眞つ白な埃道を小一里も歩いて、二三百年も昔から眠つてゐるやうな靜かな山の中に、二十戸足らずの家が小徑に沿うて並んでゐる。陶土を搗く水車小屋が一つ、小川に臨んで建てられてゐる。柘榴(ざくろ)の花が紅く咲き、稻の穗が山の中の村をつつんでゐる。子供らは、青笹の葉に結びつけた星祭りの色紙をかつぎながら跣足(はだし)で飛んでゐる。

二度目に私が柿右衞門の家をたづねた夏の印象はこれであつた。

時折り山一つ越えた線路から汽車の音がかすかに聞えて來るほかには、そこにはまだ近代生活の何物をもはいつて來てゐないやうに思はれた。

そのやうな山の中で三十人ばかりの男や女たちが、甕の中の白い土を捏ね、轆轤(ろくろ)を踏み、壺を作り、土を刻み、繪筆を舐めてゐるのを見るのはむしろ一種の驚異である。

田舍の小學校を想はせるやうながらんとした建物の中に、人々は硝子窓を洩れて來る光

りを浴びながら默々として働いてゐる。轆轤の廻る音と、時折り甕の土をまぜかへす音のみがモノトナスな響きを部屋の中へ傳へる。

こゝでは陶土を捏ねることも、壺を作ることも、繪を書くことも、窯に火を入れることも三十人足らずの人々によつてなされる。モリスがいふやうな近代の Commercialism によつて毒せられた分業作業の機械的な感じは見出されぬ。或る一人の男は二年或ひは三年の時を費してたゞ一つの制作を完成しようとしてゐる。かれの机の上には、一羽のモデルの鴛鴦と石膏とが並べられてあつた。

庭には澁柿の青い顆が落ちてゐた。

「經濟力の壓迫が私たちの仕事をまで左右しようとしてゐます。その壓迫に勝つて少しでも立派な仕事を成し遂げてゆかうとすることはずゐぶん苦しいことではありますが……」

十二代の柿右衛門氏は素朴そのものゝやうな風采の人である。家を賣り、田を賣り、すべてのものを賣りつくしてなほ立派な仕事を遺さうとしてゐる人たちがこの山の中に働いてゐる。

レオナルド・ダ・ヰンチはすべての藝術の中、繪は最もすぐれたものであると言つたこと

を記憶してゐる。或る批評家は音樂をもつて最もすぐれたるものとした。

しかし私は、この靜かな山中に默々として働きつゝある陶工たちを見た刹那に、かれ等が手にしつゝある一個の壺のいかに尊き藝術であるかを思うて、頭を下げないではをれなかつた。

默々として山の中に作られたる壺は、今默々として私の部屋の棚の上にある。かれは何ものをも語らない。私は何物をも語らぬ藝術の尊さを知る。

詩歌小說それらの藝術のうちにはやゝもすればあまりに多くの饒舌が潜む。

私は言葉を語らぬ藝術の深さを愛する。

×

柿右衞門の村からさらに幾つかの山を越えて三河内の村がある。そこでは昔から唐子の物を燒く。牡丹の花間に蝶を追ふいたいけなる唐子等の繪が、たゞ一色の藍で描かれてゐる。昔、異國の三人の陶工が捕虜となつて日本に連れられて來た。かれ等は陶器を作ることのみを知つてゐたが、繪を書くすべは知らなかつた。しかしかれ等はどうしても繪を書かないわけにはゆかなかつた。

故郷に殘して來た子供らの俤を思ひ出して描いた稚拙な唐子模樣が今日のそれである。あの草青い山の中で三人の捕虜たちは幾年の間、子供らを思ひながらあのたど〳〵しい繪筆を握つたことであらう。

愛執から生み出された青い草山の中の藝術！

私は默々として作られたる山の中の三人の男の藝術を愛する。そこには全我的な熱があり、愛があり、憤りがあり、眞劍さがある。

×

日は夕暮れの町にかゝつてゐた。

私は苧殼を買ひ、酸漿を買ひ、焙烙を買つて歸つて來た。

私は草市の夜を愛する。そこではみんなが、たゞその一夜だけは過去の人々のことを思ひ、しみじみとした心を持つことができる。

ふだんはみんながてんでに自分勝手のことを考へてゐるのが、その夜だけは一樣に死の世界について考へる。殊に今年の草市はいつにもましてあはれである。

九月二日の午後柳原の大通りで死にかゝつてゐた十四五歳の娘や、兩國の橋の上で倒れ

てゐた老婆の俤が私の頭に浮かんで來た。

大川一面に浮かんでゐた人々のことや、龜澤町から綠町五丁目までの間に燒けたゞれてゐた幾千の人たちの姿は想ひ出すのさへ心苦しい。

十三日も月はいつになく美しかつた。

暗く茂つた楓の下で迎火を焚いた。

故鄕の母や、妻の母や、自殺をしたTが來てくれさうな氣がする。

燃えさかる迎火の前に合掌する刹那だけは私にも宗教がよみがへつて來る。

×

「はるかに定家の骨を探り、西行の筋をたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入べきやからわづかに都鄙(とひ)かぞへて十の指をふさず」(芭　蕉)

芭蕉の時代にもほんたうな藝術の道を覺りえた人たちの數はこれくらゐのものであつたであらう。一生藝術の道を求めてなほ求めえないのが普通であるかも知れない。蝸牛角上の爭ひや、名聞やに走り疲れてゐる間にかれ等の藝術はいつか滅びてしまふ。藝術は一人の仕事である。唯一人の精進である。唯我獨尊の氣魄(きはく)である。

もし藝術の道に正覺する精進を持たず、大膽さを持たず、孤獨の力を持たぬならばむしろ藝術を捨てた方がいゝ。人間全體のために。

×

繪師の誰かゞ歌右衛門と同じ時代に生まれ合せたことをありがたく思ふと言つたことがあつたが、實際生まれ合せには運不運があるにちがひない。

同じ時代に生まれ合せたことをありがたく思ふ人たちの藝はできるだけたくさん見て置きたい。そのやうな人たちとはできるだけ幾度も逢つて置きたい。そのやうな友だちとはいつまでも一緒に生きてゐたい。

旅人のごとく

私は旅を愛する。

旅といふ言葉ほど不思議な魅惑を持つてゐるものはない。

かつてマアカス・アウレリウスは人生を旅になぞらへ、芭蕉も一生を羈旅邊土に過した。三界を輪廻する佛教の思想も畢竟は魂の旅を意味するのではないか。

何故に旅といふ言葉は、私たちの心をいやが上にも執念く惹きつけるのであるか。

恐らく人間の血管の中には、かの渡り鳥のやうに、野から野へ、草原から草原へと渡り歩いた原始人の血が、今もなほ潜んでゐるのであらう。

そこには未だ國家といふもの、社會といふもの、都市といふもの、經濟といふものゝ束縛もなく、繋鎖もなかつた。かれ等は鳥の如く自由に翔り、鳥の如く自由にうたひ、鳥の如く自由な世界を持つことができた。かれ等はまた鳥の如く自由に、時と空間とを支配することができた。

そこではすべての人間がボヘミアンであつた。コスモポリタンであつた。そこでは恐らく誰もが人を支配することもなく、支配せらるゝこともなかつたであらう。そこでは誰もがこの大自然の所有者であり、たゞ一人の個人が、墻(かき)をめぐらして、或る範圍の自然や土地を所有せねばならぬやうな必要もなかつたであらう。そこでは、小悧巧な人間の頭によつて編み上げられた道德だの、習慣だのといふやうなものもなかつたであらう。すべてがあるがまゝに尊く、あるがまゝに伸びて行つたであらう。

そこでは人は金錢だの、土地だの、名譽だの、といふやうな人間の魂を歪(いびつ)にし、人間の幸福を曇らせる誤つた我執を持つ機會すらも與へられなかつたであらう。

そこでは人はたゞ人であるといふことだけでこの上もない自由を持ち、生存の喜悅を持つてゐたのであつた。生きて野を步き、草原を旅するといふことだけで、かれ等は人間としての幸福と名譽とを持つことができたのであつた。

神が人間を作つたとして、神が同時に人間のために金錢を作り、劃られたる土地といふものを作り、名譽を作つたとはどうしても考へられない。

裸體のまゝの人間を神は作つたであらう。人間は神が作つた魂と裸體だけを持つてゐれ

ばたゞそれだけでたくさんなのだ。それが一番立派なことであり、尊いことである筈だ。金錢、土地、名譽、これは悪魔によつて作られたものではないか。そこにはあまりに多くの魂をけがすものが潜んでゐる。

かつて鳥の如く自由に野を、草原を、雲を、流れを、微風を翔けめぐりながら、神によつて作られた人間の幸福を味ひ得た原始人が、何故に人間としての幸福を失つたのか。かれ等は排他的な一民族一都市を築き上げることによつて、そこに城を作り、町を劃つた。そこには富、土地、名譽などといふやうな人間の呼吸を窒息せしむるところの凝滯物が積みかさねられた。鳥の如く自由に空を翔る人間の魂の翼は、それ等の凝滯物の重みによつて折り曲げられてしまつた。かれ等の魂は今や、富、土地、名譽といふ悪魔の鎖によつて縛られてしまつた。

翼を折られたる人間は既う天上を見ることを忘れて、地の上にのみ悪魔的な視線を投げる。地の上にのみ繫がれたるかれ等の視線の溷濁を見よ。かつてはかれ等もまた聖母の如く澄みたる眼を以て天上を仰いだであらうに。

×

旅！　地上に繋縛せられたる人間の魂が、再び原始人の自由さと、光りと、幸福とを見出す機會があるとするならば、それは旅の世界に於いてのみではないか。

そこでは私たちは家をも、都市をも、國家をも、社會をも持たないところの赤裸々な一人の人間によみがへる。そこでは私たちはＡでもない、Ｂでもない。私たちは魂そのものとして生きる。

魂には名はない。自分の名をすら持たない人間そのものである。そこでは私たちは自分の名を名のる必要すらも持たない。そこでは私たちは渡り鳥のごとく自由に翔り、自由に思ひ、自由に默することができる。

そこでは私たちは自分の魂を見つめてゐればいゝのだ。たゞ自分自身でさへあればいゝのだ。人のために強ひられたる媚笑を作る必要もなく、人のために尊い沈默を搔きみださるゝ必要もない。そこでは私たちは何を思ふことも、何を語ることも自由である。久しい間失はれてゐた空間と時間の自由が再び私たちの魂によみがへつて來る。

私たちは一人の人間となつて野を步く。

見よ、私たちの視界に展開せられて來る遠い山も、草原もみな私たちのものではないか。

空も雲も微風も夕燒もすべて私たちのものではないか。草に仰臥する時、地と天とすべて私たちのものではないか。鳥の聲と星のさゝやきとすべて私たちのものではないか。

人間が神によつて作られたまゝの人間に還る時、かれは神によつて與へられたすべてのものを自分のものとして受け容るゝことができる。

「貧しき者は幸なり……。」キリストの言葉は、旅人の心を持つ人によつてのみ實感せらる。一坪の土地を持つものは、一坪の世界のみを見る。一坪の土地をも所有せざるものゝみが、神によつて作られたるすべての世界を所有することができる。

渡り鳥の如き旅人！　汝は家を持たず、國を持たず、社會を持たず、都市を持たぬ。渡り鳥の如き旅人！　汝は何物をも持たざる貧人である。貧人であるが故にめぐまるゝ。汝は貧しきがゆゑに、國家以上の人類を持ち、都市以上の全世界を持つ。

渡り鳥の如き旅人！　汝はいつも孤獨である。けれども孤獨なるがゆゑにめぐまれる。汝は孤獨なるがゆゑにめぐまれる。汝は孤獨なるがゆゑに、自由にその隣人を選むことができる。孤獨なるがゆゑにすべての人間を受け容るゝことができる。

キリストは一人で祈つた。かれはいつも孤獨であつた。孤獨であつたればこそ、マグダ

ラのマリヤを愛し、ラザロを愛し、シモン、ペテロを愛することができたのではないか。旅人よ。キリストとその弟子たち、信徒たちのあの原始的な、貧しい生活は羨ましいと思はないか。

五千人の聽衆に對して分たれた食物はわづかに幾尾かの魚と、幾つかのパンだけではなかつたか。しかもかれ等は世界の人類がかつて經驗した最も尊い幸福と名譽を持つことができたではないか。

かれ等はあの馬太傳第五章――七章の山上の說敎を、かれ等自身の耳を以て聽く機會を與へられたではないか。かれ等はキリスト自身の唇から、あの美しい言葉を聽くことができたではないか。

かれ等はまたキリストと共に、安息日に麥の穗を摘んで食つた。いかにかれ等が貧しく、飢ゑてゐたかといふことが想像される。けれども人間の歷史上、かれ等ほど幸福な人間を他に求めることができようか?

かれ等はキリストの衣に觸れ、キリストと共に草に眠ることができた。

旅人よ。もし汝がキリストの弟子たちの貧しい放浪者の旅を羨ましいと思はないなら

ば、汝は救はれないであらう。

旅に在るとき、私たちは土地を持たず、富を持たず、名を持たず、たゞ一人の人間として赤裸々の人間として、生き、感じ、思ふ。

無花果の下に水を乞うたキリスト、癩病人の家に宿りをもとめたキリスト、娼婦マリヤに香油をそゝがれたキリスト。かれはいつも土地を持たず、富を持たぬ貧しい旅人ではなかつたか。かれは小ひさな教會堂をすら持つこともできなかつた。枕するところすら持たなかつた。

旅人よ。私たちの生活をして、キリストのそれの如くなさしむることは、到底不可能なことであるかも知れない。殊にめぐまれない私たちにとつて、それは容易なことではない。

しかしながら旅人よ。私たちが旅をしてゐる間だけでも、せめて私たちの心のうちに、原始人の自由さとよろこびとを取りもどすことをつとめようではないか。何も彼も忘れて、自分自身の名をすら忘れて、空を見ようではないか。草原を見ようではないか。

それこそ最も深い、最も眞實な祈りではないか。

旅人よ、空を見よ。野を見よ。すべてのものが、今日もなほ私たちに賦(あた)へられてゐる。

恰かも人類の祖先たちにめぐまれてゐるやうに。

×

風が吹く。
旅人の心はかすかなる微風に對しても感謝を感ずる。
柔かな日の光りが草の葉に顫く。
旅人の心はかすかなる日の光りにも涙ぐましい感謝を見出す。
見知らぬ人の微笑にも旅人の心は躍る。
旅人の魂は處女の如く素直に、すべてのものに羞恥む。
生けるものゝよろこび、生けるものゝ悲しみ、
生けるものゝ孤獨さ、すべてが旅人の魂にのみ、さながらに迫る。（東海道汽車中にて）

バイロンの日を

S兄。二十日の旅を伊豆で送りました。花の前から後にかけて雨が多く天城にはいつも雲がかゝつてゐます。

二三日前は急に寒くなつて、綿入れなど行李の底から出して着ました。

昨日湯ケ島にH君を訪ねて行つて、日がすつかり暮れてから下田街道を歩いて天城を振り返つて見ましたが、草山には淡い雪が薄暗の中にほの見えてゐました。

今日は昨日に引きかへて再び春がもどつて來ました。久し振りで雲一つ見ぬ青空を見ました。今日はバイロンの死後一百年の記念日です。かれの作品を讀んだ人にとつても、讀まぬ人にとつても、バイロンといふ名は不可思議な響きを持つてゐるやうに思はれます。恐らく都會の何處かではバイロンのために今日は美しい集りも催されてゐる事でありませう。私は天城の山の中で靜かにバイロンのことを思ひながら、草山を越え、櫟林に入り、さらに草山を歩きました。そこはかなり高い草山でした。天城、十國峠、乙女峠、裾野に

至る春の山の背が眞晝の春光に輝いてゐました。高原の草はまだ淺うございますが、高い草山に芽生えたばかりの櫟の柔かな新綠が青空に投影してゐる色の美しさといつたらありません。私は二三日前から下田街道を通るたんびに、草山の美しい新綠に心を惹きつけられては、何の樹であるかを疑つてゐたのでしたが、今日草山に上つてはじめて櫟である事を發見しました。天に投げられたる翡翠！　私は草山を仰いでは櫟の柔かな葉の光りに恍惚たらざるを得ませんでした。

天城を越ゆる馬車が幾度か草山の麓を低く、白い路を走つてゐました。平原は花にかざられてゐました。

そこからは天城の懷に抱かれた湯ケ島の白い倉の壁も見えました。そこには二三株の櫻がまだ紅く、麥畑を背景に燃えてゐました。黃金の棒を掘り出すのだといつて町の人たちが、昨日も山を掘つてゐましたが、その小高い丘も見えました。今の世に、そのやうな神のお告げを信ずる夢想家を見出すといふことを面白いと思ひました。

旅役者の群でありませう、赤い旗を立てゝ太皷を叩きながら桒畑の間を杉山の蔭に隱れてしまひました。昨日下田街道を通る時、私は或る煤けた旅籠屋の二階で旅廻りの役者た

ちが立廻りの稽古をしてゐるのを見ました。軒の下には山籠が一挺置かれてありました。どうかした風の調子にしばらく太鼓の音だけが草山の上まで響いて來るのでした。岩燕が草山の胸を撫でゝ青空に向つて矢のやうに翔りました。山鳩(やまばと)が飛び、雉が鳴き、雲がいつとはなしに天城をつゝみはじめました。

十日ばかり前の雨の夜に旅の女が身を投げて死んだ淵のあたりを、子供の群が歩いてゐます。唖默(おしだま)つたやうに。

私は時々不思議に思ふことがあります。二十日の伊豆の旅に、私は一度も子供らの歌を聽いたことがないのです。なぜ山の子供らはうたはないのでせう。春になつても。そこには天城といふ大きな、餘りに靜かな自然が、何かの原因を作つてゐるのではないでせうか。

しかし私はこんな話を聞いた事を思ひ出します。かつて一人のスコットランド人が信濃の高原を歩いてゐました。かれは不圖或る山家からバアンズの“Should Auld Aquaintance be Forgot”がうたはれて來るのを聽いて、あまりのなつかしさに涙を落したといふのです。しかしそれは「螢の光」を子供がうたつてゐたのですが、曲が同じ所から、そんな印

象をスコットランド人に與へたのでした。私は今日バイロンの記念の日に伊豆の山を歩きながら、信濃の子供らのことや、その外國人のことを思ひ出しました。そして春になつても歌一つうたはぬ天城の子供らを寂しく思ひました。子供らの歌一つ聽かぬバイロンの日を哀れに思ひました。

螢

かすかな光りとも見えぬ光りを生命として夏の夜を漂ひゆく螢は、闇の中に忘れられた人間の魂のやうにも思はれる。或ひは何時か、何時の世にか悠久を思ひつゝ死んだ人々の吐息のやうにも思はれる。

青い火は或ひはほのかに、或ひは暗く、たえず吐息をついてゐる。音もなくかすかなる光りを抱いて闇の中をかける。

青い光りの線が或る時は一直線に、或る時はゆるやかな曲線を描いて、やがて滅え、やがて星の群のなかに見えなくなつてしまふ。

或る時は道ばたの小ひさな流れに沿うて青い光りの吐息を見る。或る時は麻畑の中に、或る時は眠つたやうな黝い大河の上に、たゞ一つ飛んでゐる。一人行く旅人のごとく。

廣い平原を歩く旅人は、或る沼のほとりで、或ひは或る川のほとりで、そしてそこから

は地平線の星のまたゝきが見ゆる時、群をなした螢の光りと、星の光りとを區別することができなくなることを經驗するであらう。

そのやうな夜である、地と天の境が取りのぞかれて、星は地に、螢は天に、そして人間の心は螢と共に天上を思ひ、天上を歩くのは。

螢を追ひつゝ私たちは不圖立ち止まつて天上を見る。そこには私たちの美しい傳說の天の川が流れてゐる。時として螢は織女星を目がけて高く、森をかすめ、塔をかすめて、かけりゆく。

螢を追ふ人たちは、遠く稻田の原を越えて夜の闇をたゞよひ來る笛の音を聽くであらう。

夏の夜の笛。それは都會の人たちの夢にも想像することのできぬ哀韻と悠々の思情をこめたるものである。そこには人間の憎みもない。そこには人間の愛慾もない。

夏の夜の稻田の笛！　私はそれを思ふだけでも苦しい。

人間の子が生まれて、天に對し、地に對し、生そのものに對し、はじめて驚異を感じ、悠久を感じ、寂寞を感ずる時、少年の唇にはあの夏の夜の笛のみが捨てられぬものとなつて來る。

人間の宗教、人間の哲學、人間の寂寞、恐らくこのやうな悠久に對する人間の思情は少年のあの笛の音のなかゝら始めて語らるゝものであらう。

螢を追ふ人たちよ。あの黑い瞳の少年の笛を聽け。天に訴ふる聲。地に訴ふる聲。訴ふるところを知らざる聲。

天の川の星も、地平線も、かれ自身も渾然(こんぜん)としてたゞ一つの悠久のうちに溶けつゝ、漂ひつゝ、やがて、滅(き)えて行く少年の笛の聲を聽け。

かすかなる螢の光りは空をかけり、黝き空に滅えゆく。かすかなる少年の笛の音は夜の空に滅えゆく。

太陽は私たちにソロモンの榮華を見せる。夜は私たちにたゞかすかなる螢の光りと、少年の笛をめぐむ。

太陽は私たちの魂をソロモンの王宮の美しさに誘ふ。

夜は私たちを寂しき魂の世界へみちびく。

螢は私たちの窓をかすめて、野を越え、やがてかすかなる空に消える。

私たちは天を思ひ、悠久を思ひ、人を思ふ。

少年の笛は螢の光りを追ひつゝ野を越え、やがてかすかなる空に滅(き)える。
私たちは生を思ひ、死を思ひ、悠久を思ふ。
笛を吹く少年は眠つた。
螢はつばさをやすめて草に眠つた。
星は地平線の上にさゝやきをやすめた。
地も空も眠つた。
私はたゞ一人夜を歩いてゐた。
恰かも無限の闇を歩く旅人のごとく。
私は何も考へなかつた。
闇を無限に歩くことが私の宿命であるかのやうに私は闇の中を歩いた。
かすかなる光りが私の胸に歩み寄つた。
かすかなる笛の音が私の胸によみがへつて來た。
私は黝(かぐろ)い平原の中に立つてゐた。
螢は眠つてゐた。

少年も眠つてゐた。
星も眠つてゐた。
たゞ二十年前の私自身が
二十年前の夏の夜が
私の心によみがへつてゐた。
私はたゞ一人眼ざめてゐた。

砂丘日記

三保までは二十町、龍華寺までは一里、久能までは十五六町。しかし日中はまだ焦くやうな暑さですから三保にも龍華寺にもゆきませぬ。久能には親しいT氏が病を養つてゐるので一日置きくらゐには濱を傳うて出かけます。T氏の方からも何かおいしい物でも出來れば女中に持たせて屆けてくれます。昨日もT氏の小ひさいお孃さんが茄子を漬けたのを持つて來てくれました。私たちは妻と二人で濱に沿うて小ひさな橋の袂までT氏のお孃さんを見送つてゆきました。道ばたには木槿(むくげ)が咲き、赤い百合が盛りです。海沿ひの小ひさな松山を越えてゆく人を見送つてゐる間に日が暮れてしまひました。ほんの十四五町の間を歸つてゆく人を送るといふことでも、こゝでは何んだかしみ〴〵とした心になります。

昨日は二里餘の道を淸水まで出かけて行つて臺所の物を買ひ集めました。土釜、鍋、まないた、庖丁、しやもじ、土瓶、火箸、筆、インキ、提灯各々一、茶碗、箸各三人前、木炭一俵、白米一斗といつた風な買ひ物を乘合自動車に託して運んで來ました。

魚は一日に一度清水の町から一人の男が運んで來てくれますが、濱に出ると地曳網の魚が手にはいることもあります。仕事に疲れると濱邊の道に出て待つてゐますと、いろ〳〵な野菜を擔いだ女たちが通りますので、その女たちから、さゝげだの、茄子だのを買ひます。清水から魚を賣りに來る男は面白いひやうきん者です。正直な聖人見たいな男です。濱で地曳網を引いてゐる男たちとも顏馴染になれば手傳つてやりたいと思つてゐます。

お天氣つゞきで筧の水が涸れかゝつてゐますので、水だけは心細いやうですが、少し山を下るといゝ桔槹の井戸があります。毎朝、寺のお住持さんが手桶で汲んで運んでくれます。そのうちには私自身で汲むつもりでゐます。

私たちの現在の生活は非常に單調です。理想的なほど單調です。

朝五時か五時半には起きます。海が煙つてゐます。冷たい水で顏を洗ひます。もうそのころは寺のお住持さんは朝のお勤めをすませて苺に水をやつてゐます。お住持さんは毎朝三時に起きてゐます。

私たちは眞つ先に庭の直ぐ下の海を眺めます。そして白い波頭が立つてゐるか、ゐないかを氣を付けて見ます。波の高い日は屹度涼しいからです。駿河灣の面が鏡のやうな朝も

あるし、また朝から白い波が高く立つてゐる時もあります。濱を洗ふ白い波の音は四六時中絶え間もありません。

妻が土釜で飯を焚いてゐる間に私は濱を歩いて歸ります。地曳網を手繰つてゐる男女の聲が靄の中をほうほうと響いて來ます。御前岬や伊豆の半島が水煙縹渺の間を走つてゐることもあります。

伊良湖岬はこゝからは見えませぬ。御前岬を一つ越ゆれば伊良湖岬になるのでせうが。私はこゝからかすかに御前岬を見るたんびに伊良湖岬を思ひ出します。さらに世を憚つて伊良湖岬に寂しい生活を送つてゐた若い天才の杜國や、道を曲げてわざ〳〵杜國をたづねて行つた芭蕉のことを思ひます。

「鷹一つ見つけてうれしいらこ岬」

海を渡つて來る鷹を水天髣髴の間に見出し得た師と、薄命な弟子の當時の心情がいろいろに想像されます。

×

七時に朝の食事をすませます。手紙を書きます。九時には新聞が來ます。地曳網を引く

人々の聲が濱から高く聞えて來ます。前の海を清水港へゆく汽船が一日に一度、二日に一度くらゐの割で、大きな影を水平線の上に投げかけます。汽船を見るといふだけでもこゝでは懐しく思はれます。

こゝに來て一番驚くことは土地の人々の勤勉なことです。今ではたいてい三時には起きて、四時少しまはると畑に出てゐます。十三四の娘たちすら手桶を擔いで莓畑に水を注いでゐます。草を捲つてゐます。朝寢をしてゐるのがすまないやうな氣になります。私たちが朝の食事をはじめるころまでに、村の人たちは一仕事すましてゐます。手甲脚絆を着けて手拭を冠つた娘たちが鎌を持ち、鍬を握つて終日働いてゐる姿を見ると白い手の都會人たちの怠惰な生活が直ぐ聯想されて來ます。まつたく田舍の人たちは終日休む暇なく働いてゐます。焦くやうな太陽の下で。

人々は夜が明けるのを待ちかねたやうにして野良に出ます。人々は私たちが想像してゐるほど決して自然に對して無關心ではありません。否、田園の人々ほどよく自然を感じ、自然を知つてゐる人はありますまい。朝の空の美しさ、微風の快さ、小鳥の鳴く音、それらの自然のあらはれに對して人々は最もデリケートな感受性を持つてゐます。

都會の人々が富の上に、或ひは社會的地位の上に、名譽の上に、生活欲の刺衝を見出してゐる間に、田園の人々はむしろ自然そのものゝ藏されたる蠱惑のなかに生活を享樂しつつあるやうに思はれます。

恐らく都會の人にとつては單調すぎるほどの同じ波、同じ島影、同じ空を眺めつゝも、田園の人々は飽かず一生を自然の中に送つてゐます。私たちが想像してゐる以上に人々は自然の單調な表現のうちに、深い複雜な蠱惑を見出してゐるやうに思はれます。

私は日が暮れかゝるころから濱邊を歩きます。三保から御前岬までの山の裾を縫うて走る白い波頭を見つめてゐます。

夜釣りの男たちが砂の上にしやがんで白い波頭を見つめてゐます。

人々はきつと聲をかけてくれます。いかにも溫かいホスピタルな心を私は人々の言葉に見出すことができます。

「旦那、殺生の方はお好きですかい？　わたしの絲を貸して上げませう。月の夜の美しさつたらありませんよ。濱へ出て、蓆の一枚も敷いて寢てゐてごらんなされ。こゝの濱ほどえゝところはありません。」

私はよくこんな會話を夜釣りの男たちから聽きます。

濱に夜釣りする男の焚火は迎火に似たあはれさを覺えさせます。こゝでは都會生活に於けるよりは、ずつと人と人とがほんたうに仲間(コムラッド)であるといふ感じを抱くことができるやうです。都會人がほとんど共通に持つてゐる豪(えら)がりや、エゴイステックな考へが、濱の人たちにはないからだと思ひます。

すべての人は、この大きな自然の前に置かれた刹那にすべて平等でなければならなくなつて來るのです。人間の少かの學問だの、才智だの、富だの、門地だのといふことが、こゝでは言ひやうもなくくだらないものとなつてしまふのです。

こゝでは誰れも彼も正直に、大膽に働いてゐます。こゝでは働きさへすれば最も正直な收穫の報酬が與へられるのです。學校に行つて御覽なさい。官廳に行つて御覽なさい。會社に行つて御覽なさい。そこでは排擠(はいせい)と、自卑と、屈從と、陰謀のみが繰りかへされてゐます。かれ等は人間を對象として生きてゐます。それゆゑにかれ等は人間を恐れ、人間の前に戰々兢々としてゐます。

この濱の人々は海を生活の對象として生きてゐます。山を、畑を對手として生きてゐま

す。こゝの人々の恐るゝところは神であります。自然であります。
人を恐れずして、自然を恐れて生きる人々の大膽さと正直さと勤勉さほど氣持ちのいゝものはありません。
人々は太陽と共に起き、太陽と共に働き、思ひ、生き、太陽と共に眠ります。人々は太陽がいつも一つの軌道を走るやうに、いつも單調な生活の軌道を步いてゐます。人々は太陽の如く大膽に、太陽の如く赤裸々に生きてゐます。太陽の如く絕えず燃えてゐます。動いてゐます。そして太陽の如く深く夜と共に眠ります。

×

今夜は濱の人たちにぐち釣りに誘はれました。ぐちのほかにわかさごも濱ではとれます。久能まで絲と鉤を買ひに行つて日が暮れてから濱に出ました。私は東京の生活にはいつてから二十年、釣といふものを忘れてゐました。
暮れてしまつた大洋に向つて力いつぱいに絲を投げます。白い波が膝の上までも襲つて來ます。指の先きに二十年來忘れてゐた釣の絲の感觸が目覺めて來ました。
空には星がまたゝき始めました。秋近い空には銀河が大海を橫切つて沖の涯までも流れ

てゐます。

夜の空と、無限なる海と、その悠久なるなかに投げられた一線の絲と、そして私の魂と。絲を指頭に感じて海の中に佇立してゐる私は、空に對し、海に對し、無限に對して永遠に解き難き或る不思議な謎を聽かうとしてゐることに氣付きます。

そこには社會もない、人類もない、憎しみもない、愛もない。たゞ私は波の中に佇立して、無限の扉に指を觸れてゐることを感じます。

もし私の生命がその刹那に波と共にこの世界から失はれたとしても、私はたゞ還りゆくところに還りついたといふ感じのほか、何ごとをも思はないかも知れません。人間の生や人間の死は無限に直面する時あまりに小ひさ過ぎます。

しかしながら私のこの超人的な考へは直ぐに打ち消されてしまひます。

白い波の帶に沿うて遠い岬の燭が二つ三つ四つと殖えてゆきます。私は今日島田から訪ねて來た友人八木氏のことを思ひます。

靜岡に買物に行つた留守に友人はあの岬の向うから訪ねて來てくれたのでした。久能に廻つて歸つて來たのと、ほんの少かの行きちがひで友人とは逢へなかつたのでした。私は

かれのあとを追ひました。濱に沿うて松並木の間を走りました。一つの丘を越ゆれば、一つの松林を通りぬくれば、かれの俥を發見することができるであらうと思つたからでした。

私は日ざかりの遠い濱を一人で疲れて歸りました。

私は岬のかなたの友人のことを考へました。もし私たちの生活から親しい幾人かの友人を取り去つたとしたら、私たちの世界はどんなにか寂しいことでせう。

私はひたすら故鄕の父のこと、妻のこと、姉妹のこと、友人のこと、誰れかれのことを思ひます。それらのすべての人々から離れてたゞ一人旅立たなければならぬ日の寂しさを思ひます。

×

波が荒いせゐかこゝの沖では滅多に往き來する船を見ません。海は暗い雲を負うていつも憂鬱に沈んでゐます。

晝日中（ひるひなか）、沖を通る船を見出してすら懷かしさを感ずるほどにものさびしいこゝの濱邊では、夜たまに沖にたゞ一點の灯を發見した時には、私たちは灯が水平線の下に隱れてしまふまで飽かず眺めてゐます。それほどこゝでは私たちは灯（あかり）といふものに飢ゑてゐます。日

が暮れると共にほとんど燈一つ見出すことができません。濱を歩いてたま〳〵遠い波の上に灯を見出した刹那に、私たちは珍らしいものでも發見したやうなよろこびを感じて人を呼びます。

人間がこの世界に生きてゐるといふこと、そして夜になれば燈を點ずるといふことだけでも、それは立派な尊い仕事なんだといふ感じが湧いて來ます。燈臺守だけが燈を點して人々に喜びを與へるのではありません。岬の見も知らぬ人々の一つ〳〵の窓の燈はどんなにか旅人の心に慰めを與へてくれるか知れません。

町の人々よ、濱の人々よ、世界中の人々よ、君等の窓の燈をできるだけ明るく、そしてできるだけ高くかゝげてくれ給へ、夜の旅人の魂はそれによつてどれほど救はれるか知れない！　私は夜の濱を歩きながらこんなことを考へます。

×

裏の山ではよく瑠璃鳥が啼いてゐます。T氏の家では久能山の御堂の屋根に巣食うてゐた瑠璃鳥の雛を、三羽貰つたといつてT氏が時間をきめて摺り餌をやつてゐます。

瑠璃鳥も早く大きくなつてあのすが〳〵しい高鳴きをせよ。T氏も早く元氣になつてお

子さんたちと一緒に東京で暮らすことができるやうになれ。
私たちが知つてゐるかぎりの人がみんな丈夫で幸福であることは何よりも望ましいことである。

×

夜になると寺のお住持さんと奥さんがやつて來て波の音を聽きながら緣側に腰を卸していろ〳〵な話に夜を更かします。蚊が多いので榧を焚いてゐます。

十幾年前にこゝの寺は燃えてしまつたのださうです。その少し前まではこゝの沖から網で曳き上げた一寸八分の黃金佛がありました。それを塗師がすりかへてしまつたのです。塗師は佛罰で失明してしまひました。寺の奥さんはよくそんな話をします。波の音が夜と共に高まつてゆきます。恰度嵐のやうに。

寺が燃えたについては劇的な話があります。隣り村の或る男が一人の女を戀してゐました。女は男から逃げてこゝの寺にかくれてゐました。寺には老僧の他に一人の若い僧がゐました。隣り村の男は、若い僧とその女との間を疑つたのです。男は怒つて寺に火をつけたといふのです。

もうその時の老僧は死んでしまひました。その若い僧にしても今ではかなりの年配になつてゐることでせう。若い娘はその後どうしましたか。

こゝいらでは夕方になると庭の眞ん中に野天の風呂を立てます。私は三十幾年振りでこのごろは毎晩野天の風呂にはいつてゐます。亡くなつた母に抱かれて、故郷の母の里の野天の風呂にはいつて月を見た記憶がよみがへつて來ます。

子供のころ父や母に敎へられた天の川だの、牽牛星だの、織女星だのを毎晩野天風呂につかりながら眺めてゐます。

誰でもそのやうな場合には、人間の一生や、運命やについて考へるにちがひない。私にしても考へないではない。しかし諦めといふのでせうか。私はそのやうなことを成るたけ考へないことにしてゐます。耐らなく苦しいからです。すべてのことあるがまゝにあるのだ、どんなに考へたところで、もがいたところで人間は人間の運命から一歩も遁れることはできない。野天風呂のまはりで鳴いてゐる草の中の蟲と人間とがちがつた運命の下に置かれてあるやうに考へるのからして間違つてゐる。あの草叢の中の蟲が生き、すだき、やがて死んでゆくやうに、そして何の疑ひも抱かず自然そのものゝ懷にすべてを委ねてゆく

やうに、私たちの生涯も自然そのものに委ねられないだらうか。悟道とはそんな心の境地ではないのか。私はよくこんなことを野天風呂の中で考へます。

亡くなつた母のことなどを考へながら野天風呂の中にはいつてゐると耐らなくなることがあります。しかし私はそのやうな時、草の中の蟲の運命を考へます。悲しいことも、嬉しいことも、すべてをあるがまゝに感じ、あるがまゝに忍んでゆく、それより他に生き方はない。悲しむことも靜かに、忍ぶことも靜かに。

×

凡夫であり、下根である自分の性をどれだけ押しすゝめて行つたところで、どこまで達せられるものでもないといふことが年と共にはつきり分つて來るやうな氣がします。淋しい氣にもなります。しかし下根は下根なりに進めてゆけば自ら一つの靜かな世界を、小ひさいながらも、見出すことが出來るのではないでせうか。

田舍を廻つてゐて不圖訪ね寄つた山寺の中や、在家などで思ひもよらぬ立派な人にめぐり逢ふことがあります。その人たちは色々な物を讀んでゐます。人生についても眞面目に考へてゐます。自分自身を顧みて恥づかしくなることがあります。

いつの時代でもさうであるやうに思はれますが、都會は決して思想を生かしてはゐない。ほんたうに思想が生きて底強く動いてゐるのは田園であるやうに思はれます。都會の學者や思想家たちが後から後からと流れて來る思想の外殼を捕へて左顧右眄しつゝ持ちあぐんでゐる間に、靜かな田園の人々はその單純な心境に一つ〳〵の思想を觀照しつゝ、思想のうちに自分の生活を色づけ力づけつゝあるやうに思はれます。かれ等の受け容れ方は時として間違つてゐるかも知れない。けれども浮薄なところがありません。どこまでも眞劍に自分のすべてを投げ出してかゝつてゐます。それゆゑに、恐ろしい底力を持つてゐます。馬鹿力とも思はれるかも知れませんが、それだけ鈍重な迫つた力をもつてゐます。

私たちは色々な哲學を敎へられました。しかし結句敎へられたものは再び敎へた者に還さなければならぬ。私たちは哲學を學ぶことによつて何等かの暗示を與へられるにちがひない。しかし暗示は、私たちの內に、暗示に應答するだけの力を把持してゐないかぎりは何の足しにもならない。

一番悲しいことは私たちの內の力を自分自身に見出すことのできぬ場合であると思ひます。私は信ずる、下根は下根なりにその力を私の內に持つてゐるにちがひない。私はその

下根の力を見出さなければならぬ。下根の生活を見出さなければならぬ。下根の聲を見出さなければならぬ。

トルストイの聲を聽くこともいゝことにはちがひない。アシシのフランシスの生活を見ることもいゝことである。しかし「闇の力」のニキタの聲を聽くこと、「罪と罰」のラスコルニコフの罪惡苦を自分の內に、如實に、苦しみ喘ぐことはさらに必要ではありませんか。

私たちの生活で一番恐ろしいことは、立派な言葉を人に敎へることである。立派な言葉を人に敎へる結果、自分自身を立派な完全なもののやうに錯誤の上に價値づけることである。たゞしこゝにいふ立派な言葉とは、聖徒でなければ語つてはならぬ言葉を謂ふのであります。

しかし下根の人の生活にも立派な言葉はある。ニキタがニキタのあの恐ろしい罪の懺悔者として神の前に、戰慄すべき言葉を語る時、かれの言葉は最も美しい言葉である。下根の私が、下根の言葉を率直に語ることを得るならば、私の言葉はその時はじめて眞實の言葉でなければならぬ。しかし下根の私は、まだほんたうな下根の言葉を語ることができません。

三十にして何の言葉をも見出し得ず、四十にして何の言葉をも見出し得ず、五十にして然り、六十にして然り、そして七十にして何の言葉をも見出し得ずして死なゝければならぬとしても、私は私の下根を、私の性の魯鈍を輕蔑しようとは思はぬ。私は私の下根をあはれむ。私の下根をいぢらしく思ふ。たゞ私の冀望としては下根らしく人生の尊さ、ありがたさ孤獨さを味ひ得んことであります。下根らしき言葉を自分自身に見出し得んことでありませう。最も深く、最も切に凡夫らしき悲しみと、喜びと、凡夫らしき言葉とを見出し得んことであります。

子供らと嬉戲した白隱や良寛、子供らの爲すところを見よと敎へた芭蕉、弟子の足を洗つたキリスト。あの人たちはほんたうに下根の性のうちに、凡夫の言葉のうちに美しい言葉を見出し得たのでありませう。

まつたく素朴な田園の人々の間にゐると、自分が一番怠惰者で、自惚家であることに氣付きます。

私が眠つてゐる間にもうあの人たちは草を刈つて山を下つて來る。私が長くなつて晝寢をしてゐる枕もとに鎌の音が聞える。私がぽつねんとして夜の空を眺めてゐる時、あの人

たちは藁を打つて夜なべをしてゐる。しかもあの人たちは疑ふこともなく、訴ふることもなく默々として働いてゐる。

一日に數時間本を讀んだり、ペンを走らせたりして、たゞそれだけで自分の仕事は終つたやうに思つてゐる私自身の生活が恥づかしくなります。

×

二十六夜の月を待つ濱の女たちが宵から御堂に集まつてゐたが、今朝方の二時ごろであつたらうか。それまでお月さまを待つて、海から出たお月さまを拜んで濱の方へ山を下りて歸りました。

あの人たちこそほんたうに詩の心に生きてゐる！　私はさう思ひました。

信濃の旅

この夏京都の町を歩いてゐた日であつた。私は三條小橋の近くで一茶の傳記を店頭で買つた。麩屋町の柊家の一室にこもつてその夜すつかり讀んでしまつた。一茶の故鄕柏原をたづねて見たいと思つたのはその時からであつた。

三歳にして母を失ひ、十四歳以後ほとんど壯年期を旅から旅へと過さなければならなかつたし、五十幾歳にして初めて妻を迎へ一家の主となつたと思ふ喜びも束の間で、五人の子供は死ぬ、妻には別れなければならぬ、家は燒かれる、中風にはかゝるといつた風なかれの一生は、たしかに舊約ヨブの生涯そのものを如實に經驗したものであつた。

私はこの秋の初め、木津川を溯つて大和から伊賀に入り、伊賀上野に芭蕉の故鄕塚に詣で、蓑蟲庵を訪れた。そしてなほ一ケ月經つか經たぬ間に信濃といつても越後境に近い柏原に一茶の故鄕を訪ねることになつた。何となく不思議な因緣であるやうな氣もする。

私にとつては信濃は初めての旅である。東京から西は大分旅をした經驗もあるが、東、

北といつてはまだほとんどどこも知らない。この夏荒川の畔に調べたいことがあつて舊いころの友人を訪ねて鴻の巢まで出かけたことがあつた。

桑畑や、櫟の林の上に秩父の連亙を眺めながら草いきれする草の道を俥に搖られて荒川の岸に出たことがあつたが、それが東京から北への初めての旅といへば旅であつた。

信濃の旅は私にとつてはまつたく未知の世界への旅でもあり、あこがれの旅でもあつた。地震後初めて上野から汽車に乘つたが、バラック建ての假ステーションの中には團體の人たちが脚絆姿凛々しく旗を押し立てゝ身動きもならぬほどであつた。

雨が降つて來た。窓の外は眞つ暗であるが、電燈に照らされた窓を打つ點滴が硝子窓にかぼそい白線を描いて闇の中を滑つてゆく。

淺草から向島あたりの燭が雨の空に赤く映つてゐる。まだ燒け焦げたまゝの巨きな建物の雨に濡れた姿が周圍の電燈に浮き出されてゐるのもある。

去年の九月二日、三日……私は田端や飛鳥山の崖の上に立つて、汽車の屋根の上までも群がつて都會を落ちてゆく人々の姿を見つめてゐたことがあつた。

若い女たちがタンクや、石炭の上に腹這ひになつてゐるのもあつた。機關車にも、窓に

も、屋根にも人々は獅嚙みついて恐ろしい姿の都會を捨てゝ行つた。
私が立つてゐた草の中には二人の女が燒けたゞれたトタン板を拾つて來て、方四尺にも足らぬほどの小屋を作つてゐた。その日も雨催ひの日であつた。最初は女であることすら氣付かなかつたほど、かの女等の顏も髮も土と煙に汚れてゐた。年かさの女の方は細帶一筋であつた。二人とも跣足(はだし)であつた。
恐らく妻と子を火中に見失つた男であらう、淺草の見當の炎を見つめてゐたが、何かつぶやいては憂鬱そのものゝやうな顏をしたり、やがて笑つたりした。
誰も彼れも見失つた親や兄弟や子供たちを探してゐるのであつた。長靴を穿いて、たゞ一枚ちゞみのシャツとズボンに、肩の水筒を賴りに、行方知れずなつた老人を探し歩いてゐる私自身の姿をその人たちの間に見出した時、私は草の上にしやがんでしまつた。
「淺草猿若町の×××」かういつた文字を書きつらねたボール紙や、白い布を竹棹にくくりつけて呆然として歩き疲れてゐる人々を見るたんびに、幾度涙がこみ上げて來たことであらう。
誰も彼れもがあの時は、隣人のために泣くことができた。

夜の東京の明りが雨雲のなかに消えてゆく。

私は明日の朝、信濃の丸子といふ町の講演があるので、頭から外套を引つ冠つて眠ることにした。汽車が急に停つてがた〳〵と搖れるたんびに、地震かと思つて眼をさましたことも二度や三度はあつた。まだ去年の地震のおびえが私の心にそれほど深く喰ひこんでゐるのであつた。

眞夜中であつた。汽車はどこかの寂しい停車場に止つてゐた。妙義山に登る人々の群がなだれを打つてプラツトフオームを出て行つたのであつた。闇のなかに提灯が動き、喇叭が響いた。

夜が明けかゝつてゐた。輕井澤といふ聲を聽いた。霧が板葺きの屋根をやはらかにつゝんでゐた。

霧の下を飛び飛びに別莊風な家が草枯れの中に建てられてあつた。痩せた針葉樹が高原の涯を縁取つてゐた。薄い霜が廣いキヤベツ畑をほの白くつゝんでゐた。

沓掛（くつかけ）、小諸（こもろ）、そんな名は私にとつてはかなり久しい間いろ〳〵な聯想を抱かせてゐた。私は今眼のあたり沓掛を見、小諸を見た。淺間は雨雲につゝまれてしまつて裾野の秋すら

見ることはできなかつた。

信濃は高原の國である。コスモスの國である。野菊の國である。高原であるせゐか、空氣が澄明であるせゐか、山が美しいせゐか、私は信濃で見たほど美しいコスモスを見たことがない。信濃で見たほど美しい野菊を見たことはない。

信濃で見たコスモスは可憐さのうちに山國の人のねばり强さを持つてゐる。山の小ひさな鐵道官舍の垣根や、農家の庭をかざつてゐるのは寶石のかゞやきを持つた高原のコスモスである。牛舍のまはりにも、堆肥の蔭にも、石ころ道のほとりにも、小學校の窓の下にもコスモスがかゞやいてゐる。みがき上げられた靑空と高い嶮しい山脈を背景として。

私はまた信濃の高原の野菊の美を忘れることはできない。草枯れの中に自らなる品位と可憐さと慶しさとを持つた野菊の美は、信濃の高原を旅する人々にどれほどフレッシュな慰めを與へるか知れない。二坪にも三坪にもあまるほどな白い雪のやうな野菊の群を、淡い霜に掩はれた草枯れの中に見出す。

沓掛、追分、小諸……高原の町々はコスモスと野菊につゝまれてゐた。

小諸の町といつても、停車場のプラットフオームから爪先上りになつた小諸の町を覗い

たばかりである。汽車から下りてゆく人たちの後ろ姿も、何となしに山國の寂しさを聯想させる。

この夏四國に旅した時も、私は亡友Tがかつて父の死を悲しんだ海岸を見た。

この秋、私は信濃に來て再びTのことを懷はなければならなかつた。

Tと私が二人で武藏野の中の古い森につゝまれた寺の中に自炊生活をしてゐたころであつた。そのころは武藏野の中はまつたく寂しかつた。到るところに櫟（くぬぎ）や欅（けやき）の林があり、家を見出すことすら滅多になかつた。思ひもよらぬところに水車小屋があつたりした。庭には夜になれば梟（ふくろふ）が鳴き、秋になれば終日鵯やかけすが鳴いてゐた。

Tは父を葬つた足で四國から東京へ歸つて來た。Tはそのころ或る役所の事務員に雇はれて、士官學校にはいる準備をしてゐた。

八月の末であつたか、九月の初めであつたか、Tは急に旅をするといひ出した。私はかれを一人で旅に出すことは不安でならなかつた。それはTの胸に數年來苦しい影を刻んでゐたかの女の結婚が決つて間もなくであつたからであつた。

Tと私はその日も武藏野を歩いてゐた。Tはたうとう一夜きりで歸るといふ誓ひを立て

て郊外の汽車に、私から逃げるやうにして飛び乘つてしまつた。

幾日經つてもTは歸つて來なかつた。數日後であつた、甲州石和から鉛筆で書いた葉書が一枚屆いた。かれは自殺の場所を探して歩いてゐたのであつた。

葡萄畑にしやがんで、亡くなつた父のことを思つて泣いたことを書いてあつた。

さらに數日後私は小諸からのかれのたよりを受け取つた。

私は今二十年前の小諸の町を眺めてゐる。柔かな雨が淺間をつゝんでしまつた。板庇の上の石を濡らしてしまつた。

Tは淺間で死ぬつもりであつた。しかし小諸の町の牧師さんに救はれて淺間を下つて來た。私はその牧師さんの敎會の屋根でも見たいと思つたが、わからなかつた。

Tは乞丐のやうにやつれて私の家に歸つて來た。

父を持たず、生みの母を持たなかつたTはほんたうに氣の毒であつた。

淺間で救はれたかれはやつぱり一度は死なゝければならなかつた。それから十年後Tは千葉のあの懶いやうな曠野の中で自殺をしてしまつた。かれはかの女を忘れえないで死んだ。

Tも死んだ。或る男に嫁いで行つたかの女も數年前病んで死んだ。Tもかの女も私も幼な友達であつた。そして私一人だけが生きのびてかれ等のことを考へながら旅をつゞけてゐる。

コスモスと野菊と向日葵(ひまはり)と薊(あざみ)とにかざられた淺間の裾をめぐつて汽車は走つてゐる。

×

信濃の高原を走つてゐる間に私はバアンズの詩に描かれてゐるスコットランドを聯想せずにはをれなかつた。

信濃はバアンズの歌ふハイランドである。そこには可憐なる野菊があり、朴々たる小作人のコツテーヂがある。黍畑の野鼠が棲んでゐる。

低迷する山腹の雨雲を分けて一臺の自動車が走つて來た。女の運轉手である。眞つ赤なジヤケツを着て、黑ずんだ袴を穿いてゐる。赤いジヤケツの色がいかにも高い山の色と美しい對照をなしてゐる。

信濃の空はまだ秋のせゐか想像してゐたよりはずつと明るい感じを與へた。けれども崢嶸として聳え重なり合つてゐる無氣味なほど高い山のけはしさは旅人をしてむしろ或る種

の冷たさ嚴さを感じさせる。肌をあらはにした黝い岩山がつゞくせゐか、或ひはあまりに急峻なためか、そこには暗い孤獨さが漂うてゐる。

長野の町に着いたのは夕暮れであつた。東京を出る時、信濃は寒いといふ話を聽いてゐたので冬の外套を着て行つたが、東京の十一月末の寒さであつた。俥を走らせてゐると指先が冷たくなる、雨が降つてゐるせゐでもあらうか。枝からもぎ取つたばかりの林檎が小山のやうに時雨の街の店頭に積みかさねられてある。

お座敷に呼ばれた妓であらう雨の中の甃石を横切つて、寺町の方へ小急ぎに急いでゆく。

夕暮れの善光寺の大伽藍の中はさすがに尊い。夢に見る世界のやうに廣い、暗い、高い御堂をめぐつて幾抱へもありさうな丸柱が奥へ奥へと並んでゐる。堂を埋めて香煙が漂うてゐる。そこには一つのランプも、電燈もない。蠟燭の燭のみである。大伽藍の闇をかすかにゆれながら燃えてゆく蠟燭の光りの中を蠢いてゐる人々の姿は、現世の物の影とも思はれぬまでに尊い。

善光寺の朝のお勤めは西洋の物語に讀む彌撒の勤めを聯想させる。

朝まだ暗いうちに宿の男に起されて、石疊みの街を仁王門の前の僧院へゆく。そこには

日本中の國々からこの山の中の町に集まつて來た人々が御堂を埋めてゐる。夜がほの〴〵と明けて來る。

若い尼宮さまが朝のお勤めのために本堂まで二三町の甃石の道を歩かれる。後からは一人の男が日傘をさしかけてゐる。善男善女は霜の上にひざまづく。若い尼宮さまはひざまづいた善男善女の一人々々の頭を、その御珠數で撫でてゆかれる。私たちは大伽藍の西の廊下にひざまづいて尼宮さまを待つた。

暗い大伽藍の中をかすかに照らす蠟燭の炎の下で朝のお勤めが一時間くらゐもつゞくであらうか。

西の廊下にたゝずんで尼宮さまの御出ましを待つてゐる間に、私は不圖いたましい鳩の死骸を見た。

大伽藍の壁、軒をめぐつて一面に網が張られてゐる。寺の鳩に汚されないためである。たま〳〵網の裂け目を見出して網の中に飛び込んだ一羽の鳩は終に出口を失つて、網にかゝつたまゝ死んでしまつたのであらう。

高い御堂の軒の網に引つかゝつたまゝ飢死してゐる鳩の姿を眺めてゐる間に私はウオル

ター・ペーターの作品の中に描かれた一羽の鳥の話を思ひ出さずにはをれなかつた。

彌撒のお勤めからの歸るさに、畫工アントニイ・ワツトウに別れた女が、高い御寺の屋根を見ながら抱いたのは「もしあの高い窓から一羽の鳥が御堂のなかへ飛び込んだとしたら、そして出てゆく道を失つたとしたら、はたして誰がその鳥を救ふことができよう?」といふ疑であつた。

私は今眼のあたり不運な鳩の死を見た。

鳩ははたしてかのアングロ・サクソンの祖先たちが傳說として持つてゐた闇の中の鳥のやうに、御堂の光りにあこがれて飛びこんで來たのであらうか。王の華やかな饗宴の燭を眼がけて飛びこんで來たのであらうか。

或ひは恐らくさうでないかも知れない。單に塒をもとめるために軒の下に近づいたのかも知れない。しかしいづれにしてもかれは何ものかをもとめんがために軒の下に近づいて來たにちがひない。かれはそのもとむるものゝために生命を捨てゝしまつた。

うすれゆく法燈の光りを浴びながら死んでゐる鳩の柔毛を、朝まだきの山風が、かすかに搖がせてゐるのもあはれである。

朝のお勤めをすまして再び甃石の上を三人の若い尼僧にまもられながら僧庵へ歸らるゝ尼宮さまを送つて、仁王門に出た時、私はさらにそこに淡い霜の上に干からびて死んでゐる一羽の鳩を見た。

×

雨が小止みなく降つてゐた。

直江津行きの汽車には遠足の子供たちが雨に濡れて顫へながら窓の外を眺めてゐた。雨に濡れた嶮しい山が遠ざかり、信濃川に沿うた高原の平野が展けて來た。山は雨雲に深くとざされてゐた。

長野から越後境に近づくにつれて家の形も面白く、屋根の勾配、屋根の形も一層美しい感じを抱かせる。雪崩を防ぐために屋根の上にしつらへられた雪よけを見るだけでも雪國に來た感じが湧いて來る。大和で見た屋根は急な勾配をしてゐてゴシツク風な建築の美と落ちつきを想はせたが、こゝの屋根はそれにくらぶればもつとゆるやかな勾配で、さらにゆつたりとして、軒先きがかなり長い。大まかで、いつたいの屋根、壁、門、庇、煙出しといふものゝ線がシンプルであり、明るい均齊を持つてゐる。雨に濡れた黑い屋根と白い

壁の色のコントラストもきはめて繪畫的である。

山に沿うた農家の庭にはコスモスや、向日葵や、ダリヤが殊に美しい色を見せてゐる。草の中には月見草と野菊が。

中二階の窓に十も二十もの黄色な或ひは眞つ赤な南瓜が並べられた家もある。

丘から丘へとつゞく林檎畑を見るのも私にとつては初めての經驗であり、嬉しかつた。林檎が、伊豆あたりの乙女椿を想はせるほどに眞つ紅に、枝もたわゝに實つてゐた。私は山の林檎畑が近づいて來るごとに窓を明けて見た。

アカシヤの並樹には三羽の鴉が雨にそぼ濡れてゐた。山といふ山は櫨や白膠木の紅葉につゝまれてゐた。紅葉の山をかすめて雲が飛んで行つた。

一茶が父に送られて江戶に出た時、一茶の父は柏原から牟禮の三本松まで送つて行つたと傳へられてゐる。

牟禮の町も雨に降りこめられてゐた。ステーションには山から運ばれた薪の小山が、すでに冬の準備を急ぐ山國の人々の心を描かせてゐた。

柏原の驛に下りて、直ぐ前の旅籠屋で蕎麥をあつらへて休むことにした。疊二枚ばかり

を仕切つた爐にはもう炭火が注がれてゐた。土間にはいつて來た旅人は爐の中に草鞋穿きの足を投げ入れた。黒姫山登山口と記された道しるべには三頭の馬がつながれて雨に濡れてゐた。戸隱山講中の奉納手拭などが軒の風に吹かれてゐるのが、遠い旅心を打つ。

柏原の町は北國街道に沿うた小ひさな宿場である。爪先上りの舊街道が町の眞ん中を南から北へ走つてゐる。

道の傍にはやさしい菊が咲きこぼれてゐるところもあつた。

雨の中を一茶の家を訪ねてゆくことにした。

一茶の家もこの北國街道に沿うた農家とも商家ともつかぬ煤けた家である。暗い土間にはいつて行つた時、三人の老媼と一人の若い女と、作男らしい若い男と、赤ん坊がくづれかゝつた壁の前に坐つて食事をしてゐたのを見た。

豆腐を作る石臼だの、豆腐を容るゝ手桶だのが暗い土間の眞ん中に置かれてあつた。蠅が眞夏のやうに元氣よくしと〱としとつた部屋中を飛んでゐた。

豆腐を作る土間の隅に馬小屋が仕切られてあつて、小ひさな馬が路地の方へ首を出してゐた。

路地に沿うて馬小屋の前を背戸の方へ少しばかり歩いたところに、一茶が晩年を送つたといふ籾倉が一軒桑畑の中に立つてゐた。

異母弟の仙六と争つた母屋はすでに一茶の生存中に焼けてしまつたので、今残つてゐるのは小ひさなその籾倉だけである。籾だの、蠶のかごだの、馬秣だのが籾倉の中に積み重ねられてあつた。一茶が生きてゐたところは北の方の壁に窓がつけてあり、土間には板が敷いてあつたといふことである。

籾倉の裏は一町ばかりの桑畑や、蕎麥畑をへだてゝなだらかな山になつてゐる。そこにはかれの恩人であつた柏原の本陣の中村家の墓がある。こんもりと茂つた森につゝまれて。

「不思議なり生まれた家で今日の月
露の世は露の世ながらさりながら
名月や膳へ這ひ寄る子があらば
小言いふ相手もあらば今日の月
故郷やよるもさはるも茨の花
ともかくもあなたまかせの年の暮」

一つ〳〵が凡人らしい凡人の腸を絞つた句である。一茶の生涯を見る時、私たちは運命の冷たさについて人ごとならず考へさせられる。

五十二にしてはじめて曲りなりにも一軒の主となり得たかれの凡人らしい喜び、子を失つた凡人らしい親としてのなげき、あきらめ、すべてがそこの桒畑の中の三間幾尺のあはれな倉の中の世界でうたはれたのだと思ふと、何といふ人生の尊い苦しい記念碑であらう。

私は郷社諏訪神社にも行つて見た。恐らくそこではかれは旅から來た角力を見たり、野芝居を見たりしたことであらう。

畑の中のぬかるみの道を横切つて一茶の墓に詣でた。丘の上の深い木立の中の一茶の墓のまはりには白い小菊が咲いてゐた。

誰の試みであらう? 高い、結構過ぎるほどの碑が一茶の古びた小ひさな塚の後ろに立てられてゐた。さらにその傍には新しい標木さへ樹てられてゐた。

墓はたゞ南無阿彌陀佛と刻んだあの小ひさな墓一つでいゝ。それでこそ尊い。

私は野菊の咲きみだれた丘の上に立つて暮れてゆく柏原の小ひさな町を見た。幾つかの矗々とそゝり立つた木立の間を縫うて廢墟のやうな町が黒く寒い雨の底を流れてゐる。

寺の屋根が見え、秋の色につゝまれたなぞへが見える。

一茶がまゝつ子としてさげすまれつゝ泣いた道、軒端。一茶が里に歸つた妻を待ちあぐんで立ちつくしたであらう小山、失つた幼兒を葬りに行つたであらう草路、みな昔のまゝである。

黒姫山も、妙高山もこの小ひさな破驛を脅かすかのやうに黝い巨人の影を夕暮れの空に聳え立てゝゐる。

柏原の町を黄昏の野尻湖の方へ歸つて行く駄馬の群には、すでに越後近い冬の寒さが迫つてゐる。

あとがき

二三日前から庭の木立にひたきが來て鳴いてゐる。ひたきが鳴けば袷が欲しくなる。二三日來、また、山の初雪が報ぜられてゐる。ひたきが鳴き、山の新雪のたよりを聽くだけでも心のひきしまる思ひがする。

今度「木に凭りて」をふたゝび世に問ふにあたつて、久しぶりに讀み直して見ると、あのころのことが、ひしひしと胸に迫つて來る。この本はわたくしの三十七八歲ころの作品を蒐めたものであり、あのころはわたくしも健康にめぐまれてゐたし、汽車の旅行もまことに快適だつたので、わたくしはよく旅から旅を歩いた。

或る時は駿河灣に沿うた松並木近くの禪洞に假りの棲居をもとめて、遍路のさびしさとうれしさにしみじみと浸されたこともあつた。

或る時は京大和の寺々を訪ね、心から洛北の時雨に濡れたこともあつた。また或る時は木津川の溪谷をさかのぼつて伊賀上野に芭蕉翁の故郷塚や蓑蟲庵をたづね、近江湖畔の義

仲寺に詣でたこともあつた。

今、新秋の日ざしを浴びながら「木に凭りて」をふたゝび手にすれば感慨きはまりなきものがある。現在の天涯孤獨にして、かの聖書に記された「一疋のこほろぎを持ち上げる力もなき」までに衰へた自分自身の姿が、今更のごとく感じられて來る。

「木に凭りて」を讀んで氣につくことは、わたくしはあのころ、かなりたくさんな詩を作つたことである。あのころは、時代がよく、日々の生活にも詩があつた。

今朝改めて、この稿を書いてゐると、しきりに軒近い梢にひたきが啼いてゐる。こゝにも、考へて見れば詩はある。

昭和二十四年新秋

武藏野にて

著者



昭和二十四年十月三十一日印刷
昭和二十四年十一月五日發行

定價　金百七拾圓
地方賣價　金百八拾圓

木に凭りて

著作者　吉田絃二郎（よしだげんじろう）
東京都新宿區若宮町三七

發行者　中根弘
東京都文京區戸崎町七一番地

印刷者　小泉輝章

東京都新宿區若宮町三七
發行所　中根書房
電話九段（33）一八〇三番

小泉印刷株式會社

中根書房版